

522

291

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





ラム  
原著

全  
譯

セキスピア劇二十篇

全

同志社大學講師  
同志社大學講師

マスター・オブ・アーツ 塩見 清  
パチエラー・オブ・アーツ エツサー夫人

共譯

東京 閣文閣發行

大正

13. 6. 28

内交



522-291

### 原著者ラム兄弟に就て

◆ 倫敦の真中にテンプルと呼ばれてをる古びた一區劃がある。中世の十字軍時代に騎士團 (Knights Templars) が住んでをった處であるが、今は正義を楯とする辯護士町になつてをる。

◆ チャールス・ラムはここに一七七五年に生れた。父は或る辯護士の貧しい事務員、否、寧ろ召使であつた。七人兄弟の中で、兄一人とチャールスと妹一人とが成長した。七歳の時、基督病院の「青服」慈善學校へ入學した。十四の時學校を去つて南洋商會の事務員となり、二年の後有名な東印度會社に入社して、そこに三十三年間勤続した。その間一七九五年から一七九六年へかけて僅かに六週間療病院で妹を介抱するために休んだだけである。五十歳の時會社は彼が先に出版した「エリア論叢」の好評なのと三十三年間勤続の勞を稿つて豊富な年金を與へて隠退させた。それは一八二五年四月の事である。一八三四年に彼は遂に不歸の客になつた。



— 2 —  
妹のメリーは兄に劣らない天才であつたが、病身であつたので、チャールスは貧窮と戦ひながら一生獨身で妹の介抱に盡し、その友愛の情の暖かさは今に文學界の美談となつてをる。妹はチャールスよりも十三年遅れて一八四七年になくなつた。

◆  
ロングはその著「英國文學史」にラムの文學的作品を二期に分けてをる。第一期は一七九六年から一八〇三年まで、あつて「ロラマンド、グレー」(一七九八)と「ジョーン、ウッドビル」(一八〇二)等の作があり、第二期は一八〇八年まで、あつて、妹との合著我が「シエークスピア劇物語」(一八〇七)と「シエークスピア時代の英國詩人」(一八〇八)である。第三期は一八三三年まで、あつて、「第一エリア論叢」(一八三三)、「第二エリア論叢」(一八三三)とである。

◆  
ラムは英國浪漫派時代の作家であつて、バートンの「沈鬱の分解」や、ブラウンの *Religio Medici* や英國の初代劇作家等に負ふ處が多い。作風は温雅な古風とを帯び人を引きつける魅力を持つてをる名著エリア論叢はラムの稀代の古雅と侮り難いユーモアと彼の人生觀とを遺憾なく示してをる。英國初代の評論家アデイソンやステイルの美點を保ち、然も前人の及ばない見解の深刻さと輕快な

ユーモアが溢れてをる。

◆  
我が「シエークスピア劇物語」は、ラム兄妹友愛の結晶である。シエークスピアの力作、四十の劇から、英國史劇と羅馬劇とを除いた二十を選び、チャールスは悲劇を、メリーは喜劇を、難解な詩劇から平易な散文に書き直し、子供にシエークスピアを紹介するためにもしたものである。併し兄妹の努力はエリザベス王朝時代の英國散文の粹をなし、アルフレッド、エイングラーの語をかりて言へば——英國散文の音樂的作品——である。今は古典文學の一となつてをる。老幼男女と教育の有無とを問はず、ラムの「シエークスピア劇物語」は萬人に愛讀されてをる。初版以來既に一世紀を経てるが、今にこの書の右に出るものがなく、恐らく將來もないであらう。歐米の家庭にシエークスピアの原書はなくとも、この「シエークスピア劇物語」と聖書のない家庭はない。

◆  
— 3 —  
「シエークスピア劇物語」の初版は「シエークスピアの劇を基礎とする物語」(Tales Founded of the plays of Shakspeare) と題して、倫敦 ハンウエイ街、少年文庫、トマス、ホツヂキンスの爲めに印刷し、銅版で裝飾し、一八〇七年に少年用として、チャールス、ラムの名で出版された。挿畫はマ



ルレディーの手になり、表紙にも、序文にも、メリー、ラムの名はないが、メリーが喜劇を書いた事はチャールズが前年五月十日に支那に行つた友人マンニングに送つた手紙に明かである。

「君は過日妹の書き物をしてをるのを見られたさうだが、妹は當時何を書いてをつたかを君に知らせたいと言つてをる。妹はゴルドウイン書店の請によつて、シエークスピアの劇二十を子供の爲めに書きつゝあつたのである。既に「暴風雨」、「冬の夜ばなし」、「眞夏の夜の夢」、「から騒ぎ」、「ペロナの二紳士」、「シンベリン」の六編を終り、今「ベニス商人」を書きつゝある。僕は「オセロ」も「マクベス」もを終り、悲劇を皆書かうと思つてをる。」

原著者の抱負はその序文に明かなやうに、少年少女にシエークスピアの作品を紹介し、シエークスピア研究の手引とするためであるから、できるだけシエークスピアの詩風を生かさうとした。悲劇の句は割合にその目的を達する事ができたけれども、喜劇の句は散文に直すのに困難を感じたとラムの妹は述懐してをる。私達も亦原書の平易、温雅、流暢な文章を邦語に譯するのに非常に苦心した。意明かで筆の運びのないのを遺憾に思ふ。併しできるだけ原文を尊重して句を追うて譯したから原書と對照して研究される人達には幾分か便利であらうと思ふ。

私達がこの「シエークスピア劇物語」を我國の讀書子に奨めるのは原著者が序文に書いてをると同じ志からである。「此書を若い讀書子に奨めるのは將來シエークスピアのほんこの劇を味ふ手引としてである。——想像の激増者、徳性の陶冶者、あらゆる利己主義や射利思想より蟬脱して、あらゆる幽香しさご高尚な禮讓、仁慈、寛量、人道等を教へる思想と行爲の教訓——そしてこれ等の美德を教へる例證はシエークスピア劇の全紙面に充滿してをる。」

ラムの「シエークスピア劇物語」は専門學校や大學の英語の教科書等に多く用ひられてをるが、その邦譯は明治三十六年頃の序文のある「ラム沙翁物語集」を最近小松武治氏が出版されてをるだけである。そしてその物語数も全篇の半分即ち十編のみであつて、悲劇五編は文語體、喜劇五編は口語體に譯されてをる。まだ全譯は誰にも出版されてゐない。

私達は右の事情からラムの全譯二十編を「全譯シエークスピア劇二十篇」として口語體で出版する事とした。原本は紐育ハースト商會發行アルフレッド、エイングラー牧師編纂の Tales From Shak-



大正十三年五月二十五日京都にて

譯者識

目次

暴風雨物語	1
眞夏の夜の夢	2
冬物語	4
かから騒ぎ	5
お氣に召すまま	8
ベロナの二紳士	10
ベニスの商人	13
シムベリ	15
リヤ	17
マクヤベ	19
終りよきは皆よし	21
ちや／＼馬馴らし	23
間違の喜劇	25
以尺報尺	27
十夜	30
アゼンスのタイモン	32
ロミオとジュリエット	35
ハムレット	37
オムセ	40
メリクレス	42



ラム原著 全訳 シエークスピア劇二十篇

暴風雨

海の中に一つの小島があつた。住むものとしてはプロスペロと呼ぶ一人の老人と、又となく美しい娘のミランダのみであつた。ミランダは未だ物心の付かぬ時分、此の島に渡つて來たので、父より外には人間の顔を見たと言ふ記憶さへも持つてゐなかつた。

父子二人は岩窟の中に住んでゐた。その内部は幾つかの室に分たれ、その一つはプロスペロの書齋になつてゐた。其處には主として魔法に關する書物が藏つてあつた。——當時魔法の研究は多くの學者が好んでしたのである——そして此の魔法の智識はプロスペロに大層役立つた。まことに不思議な機會からプロスペロが此の島に漂着した時、此の島はその少し前まで、此處に住んでゐたシコラックスと云ふ魔女の爲に魔法で封じられてゐた。プロスペロは魔法の智識があつた爲め、シコ



ラックスのよこしまな命令に服することを拒んで大きな木に封じ込められてきた多くの善良な妖精達を、その魔法から解き放つことが出来た。是等の溫和しい妖精達はそれ以後常に従順にプロスペロの命令に従つてゐた。そして此の妖精達の頭になつてゐたのはエリエルである。

元氣な、小さい妖精エリエルは生れながらのいたづら好きでは無かつたが、醜い怪物カリバンをいぢめて楽しむいたづらばかりは少し度を過ぎてゐたやうである。このカリバンは云ふのがシコラックスの子であつたので、エリエルは少なからぬ恨みを抱いてゐたのである。プロスペロが森の中で見付けた此のカリバンは、奇妙な、不恰な者で形から言へば猿よりもつゞ人間に遠いものであつた。プロスペロはカリバンを洞窟につれて歸つて話を教へた。併しカリバンはプロスペロが非常に親切を盡したにも拘らず、その母親から受け継いだ悪い性質の爲に、善いことや役に立つ仕事を覚えようとしなかつた。そこで薪拾ひや、力仕事をする爲めに奴隷の様にして使はれてゐた。エリエルはカリバンを監督して仕事をさしてゐたのである。

カリバンがなまけたり仕事を忘れたりした時には、エリエル（プロスペロ以外の人の眼には見へなかつた）がこつそり出て来て抓るのが常であつた。又時には泥の中へ投げ込んだ事もあり、猿の姿となつて口を曲けて輕蔑したり、又すばやく姿を變へてはりわらふ 蝸になり、カリバンが来る路に轉び廻

つてゐた事もある。カリバンは蝸の鋭い針で素足を刺されては大變だと非常に恐れてゐたからである。カリバンがプロスペロから吩咐かつた仕事を怠つた時には、いつもエリエルは右のやうな色々な手段でカリバンを苦しめた。

プロスペロは色々な力を持つた妖精達を自分の思ひ通りに従はせる事が出来たので、その力を借つて風や海の波をも支配することが出来た。或時プロスペロは暴風雨の眞只中に、今にも船を一呑にしようとして荒れ狂ふ怒濤と闘ひつゝある一艘の立派な船を指して「あの中には我々の様な人間が一杯乗つてゐるのだ」と娘に語つた。

「お、お父様、御願でございます。若しもあなたのお力でこの怖ろしい暴風雨を起されたのならさうぞあの悲惨な苦悶の様を哀れんで下さい。御覽なさい！船は今にも粉微塵に碎かれてしまひさうです。可愛さうに！皆死んでしまひます。私に若し力がありますなら、あの立派な船を碎き、乗つてゐる尊い命を亡ぼす前に、海を地の底に沈めてしまつたでせうに」

「娘、ミランダよ、さう駭く事はない、何の事も無いのだ。わしは船中の何人にも怪我があつてはならぬと命じて置いた。可愛い娘よ、わしがした事は皆お前の爲めを思つてしたのだ。お前は自分の身分も知らず、何處から來たのかも知らない。その上わしの身の上についてさへ、お前の親だ



— 4 —  
「さういふ事さ、この見る影もない窟に住んでゐると言ふ事だけしか知らないだ。お前はこの窟へ来た前の事を覚えてゐるか？覚えては居るまい。その時、お前は未だ三歳にもなつてをらなんだのだから。」

「いゝ、え、良く覚えて居ります、お父さん。」

「さうして？家か人かに記憶があるのか、覚えてゐる事があれば言つて御覽！」

「私には夢の様に淡い思ひ出で御座いますが……四五人の女の人が私に附添つてはゐませんでしたか？」

「さうだ、もつと澤山附添うてゐた。さうして今でもそれを覚えてゐるのだ。それでは此處に來た時の事も覚えてゐるさうなものだ。」

「いゝ、え、お父さん。そのほかの事は何も存じて居りません。」

「思へば十二年の昔だ。ミランダよ。」とアロスベロは話し續けた。「わしはミランの公爵で。お前はそなたつた一人の姫君だつたのだ。わしにはアントニオと云ふ一人の弟があつた。わしは生れ付き閑靜と學問とが好きだつたので、お前の叔父なる、不義不信の弟に國事を一切任せてしまつたのだ。（確かにさうだつた）わしは凡ての俗事と縁を切つて、書物の中に埋まり、心ゆくまで讀書さ。」

研究とに身を捧げてゐたのだ。處が弟は悉く自分に政權を握つて居つたため自分が公爵になつたやうにおごり始めた。わしが弟に人民の信用を得る機會を與へたために、弟の悪い心の中には、わしの公國を奪ひ取らうと言ふ様な、以ての外の野心を起さした。それから間もなく、わしの敵であつた強い、ネーブルス王の加勢を得てこの計畫を直ぐに實行したのだ。」

「なぜ、その時敵の者が私共を殺さなかつたのでせう。」

「娘よ、弟等は殺し得なんだのだ、人民達は大層わしを慕つて居つたから。アントニオは私達を船に乗せて遙か沖に漕ぎ出た時、船具もなければ帆も櫓もない小舟に、私達を投げ込んで置き去りにした。勿論、弟はわし等親子は死ぬにきまつてをると思つてゐたのだ。併し、ゴンザロと云ふわしを尊敬してゐた親切な侍臣が、私かに小舟の中に飲料水や衣類、日用品、その上わしが領土よりも珍重してゐた數卷の書物等を入れて置いて呉れたのだ。」

「お、お父様、その時は嘸御厄介を掛けましたでせうね！」

「いゝや。お前は全くわしを救つて呉れた小さな天使だつた。お前のあきけない笑顔があつたればこそ、あの様な艱難にも耐へられたのだ。食物は私達がこの無人島に上陸するまで不足はせなかつた。それ以後さういふものは、わしはお前に物を教へるのが只一つの楽しみだつた。そしてお前は

No, my dear father  
said Miranda



charge = 責任, 負はす

— 7 —

「よく其の教を守つてくれた。」  
「神様、さうぞ父上にお禮をして下さいませ！それではどう言ふ譯で此のあらしをお起しになつたのです。さうぞそれを知らして下さい。」  
「では言はう、此のあらしでわしは敵であるネーブルス王と慘酷な弟とをこの島の岸邊に打ち上げさせたのだ。」  
斯う言つた後プロスペロは彼の魔法の杖を取り靜かに娘に觸れると、娘はすぐ深い眠りに落ちたその時精靈エリエルが嵐の経過や船に乗つてゐた人々の處置に就て報告するために其所にあらはれたからである。プロスペロは、勿論精靈がミランダには見えないとは知つてゐたが、空に向つて一人で話をしてゐる様に（實際さう見えたであらう）思はれるのを好まなかつたからである。  
「お、勇ましいエリエルよ、お前の仕事をしおうせたか。」  
エリエルは嵐の事や、怖ぢ惑ふ船員達の事、王子ファデーナンドが眞先に海を目掛けて飛び込んだ有様や、父王が自分の愛する王子が波に吞まれて消え去るのを見てをうたと言ふことなど、凡てを手に取るやうに物語つた。  
「併しあの王子は無事で御座います。人目に付かぬ島蔭で腕を組みながら悲しげに、父王は亡くなられたものと思ひ込んで、その事ばかり考へて居りますが、髪の毛一筋さへもなくしては居りませぬ。その王子らしい衣服も波の爲めにびつしよりにはなつて居りますが却つて前よりも色が鮮かになつた位で御座います。」  
「よくやつた。エリエル、王子を此方へ連れてこい。わしの娘をあ若い王子に逢はしてやらう王や弟等は何處に居るのだ？」  
「あの人達は、もうファデーナンドを見付ける望さへも殆んど失つて、今では屍を探し廻つて居られます。船乗り達も一人残らず無事に居ります。が皆互に自分一人だけが助かつたのだと思ひ込んで居ります。そして船も皆に見付からぬやう安全に港に繋いでございます。」  
「エリエルよ、命令通りによく果してくれだが、まだ／＼用があるのだ。」  
「まだ用があるのでございますか。私を自由にしてやるとのお約束をよもお忘れてはございませぬ。御主人。私の忠義振りを考へて下さい。嘘も言はず、仕損じもせず、苦情や愚痴を一度だつて言つた事はありません。」

「それぢやお前はこんな苦しみから、わしがお前を救つてやつたのかも忘れてしまつたのか。もう齡もこり、悪心も積つて、二つに折れる程に曲つてゐた妖婆シユラツタスの事を忘れたのか。彼

— 6 —

man  
man  
many man  
man



— 8 —  
奴は何處で生れたのだ。さあそれを言つて見ろ。」

「はい、アージャーで生れました。」

「お、左様か、お前のやうなものは時々聞き直して置かぬご前の事を段々と忘れてしまふやうだあの魔女シコラツクスは、人間が聞くも怖ろしい妖術の科でアージャーより追放され、水夫達は此處に置き去りにされたのだ。お前は、あの妖婆の吩咐ける怖ろしい命令に従ふには餘り温順に過ぎたので、木の中に封じ込まれて、わしが來た時には呻吟いてゐたではないか。其難義をわしが救つてやつたのをもう忘れたのか。」

「お許し下さい、御主人。みんなお吩咐にも従ひます」と、エリエルは恩を忘れたと思はれる事を恥ぢて言つた。

「よし、お前がわしの命令に従へば、もうすぐに自由にしてやらう。」

そこでプロスベロはこれからする仕事をエリエルに命じた。エリエルは直ちに其處を去り、最初にフアーデイナンドを残して來た所へ行つた。王子はまだ物悲しげな様子をして草の上に座つてゐた。

「お、若い殿方。私はあなたをお連れ申さう。ミランダ様にあなたの美しい姿をお見せ、ねばな

りませぬ。私と一所にゐらつして下さい。」

そして次の歌を歌ひ出した。

千尋も深き水底に、

御父上は臥したまふ。

み骨は珊瑚、眞珠こそ

その以前君が御龍眼

御體のなべては朽ちもせて

寶と化しぬ底深く。

聞かずや海の女神等が

あれく、弔ひの鐘の音を

デイン、ドーン、ベル。

— 9 —  
此不思議な、失くなつた、父の事を歌ふ音楽により、<sup>王</sup>壺子は愚かな物思ひより醒め、打驚きながらエリエルの妙なる聲に従つて、遂にプロスベロとミランダが座つてゐる大きな木影の邊りまでやつて來た。今までにミランダは決して父以外に男と言ふものを見た事が無かつた。



「ミランダよ、向ふの方に何か見えるか言つてごらん。」

「お父様、あれはきつと精霊で御座いますね。まあ、方々あたりを見廻してゐるこゝ。お父様、ほんごに立派な姿で御座いますね、精霊なのでせうか。」

「いゝや精霊ではないよ。物も食べれば、眠りもする、我々と同じ様な感覚をも持つてゐる。あの若者は難船した連中の一人だ。悲歡の爲に少し寝ては居るやうだが、さもなければお前はきつと美しい男だと思ふであらう。はぐれた友達を探して、さまよつて居るのぢや。」

男はきつと皆、お父様の様な嚴めしい顔をして、灰色の願鬚をはやしてゐるものとのみ思つてゐたミランダは、美しい若い王子の風采を見て非常に喜んだ。又フアーディナンドの方では、此の荒れ果てた島で、斯うも美しい婦人に巡り合つたのと、さつき聞えた音楽と言ひ、不思議な事ばかりが続く所から、全く此處は魔法の島で、ミランダがその女王なのだと思ひ込んで、恭しくミランダに語り始めた。

ミランダは恥づかしさうにこれを打消し、女王ではなく、たゞの卑しい娘だと答へて、自分の身の上を語り出さうとしたとき、プロスペロはそれを遮つた。プロスペロは二人が互に喜び合つてゐるのを見て非常に満足した。それは明らかに二人が一眼見た時から(俗に言ふ戀に落ちたと云ふ事

を知つたからである。併しプロスペロはフアーディナンドの不撓の心を試さうと思つたので、王子に難題を掛けやうと決心した。そこで其の前へ進んで物々しい調子で王子に言つた。

「お前はきつと、此島の王である自分から此の島を奪ひ取らうと思つて、様子を探りに來た間隙であらう。『わしについて來い』。さ、お前の足と首とを一所に縛り上げて、潮水と貽貝いっかいと枯草の根を團栗の殻位を馳走してやらう。」

「なにそんな待遇を受けるものか、この力の及ぶ限りは」と、フアーディナンドは叫ぶが早いか劍を引き抜いて切り付けやうとしたが、プロスペロの魔法の杖にはかなはず、其場に立すくんだまま身動きさへ出来なかつた。

ミランダは父によりすがりながら「お父様はどうしてそんなに荒々しいことをなさいます、どうぞ同情して上げて下さい、ね、私があの人あの人の證人になりますから。私がお父様以外に初めて出會つた人ぢやありませんか、その上私にはほんごに善さうに見えるんですもの。」

「お黙り！」と父は娘を制しながら「此上一言でも言つたならわしは本當に叱るぞ、何だ詐欺師の庇い立てなんかをして！お前はカリバンと此男しか見た事がないので、こんな立派な人は外に無いと思ふのだらう。併しいとしい娘よ。此男がカリバンよりも優れておる程、世の中の男はこの男よ



りも立派なのだ。」と言つて、父は娘の忍耐力をも試さうとした。處が娘は「私の愛情はどんなに母しくとも私はこの人より立派な人を欲しいとは思ひませぬ。」と言つた。

「ついで來い若者。お前はわしの命令に逆らう事は出来ぬのぢや。」

「いかにも力が及びませぬ。」

魔法のために反抗の力の凡てを奪ひ取られて居るとも知らず、無理矢理に自分がプロスペロに従はされて行くのに氣が付いて、王子は驚かすには居られなかつた。そして娘が全く見えなくなる迄あごを振り向きながら、プロスペロについて窺の中にはいつた。

「自分の精神は悉く自由を失つてしまつて、まるで夢でも見てゐるやうな心地だ、併し此の男の威嚇も、自分の感じる弱さも、この牢屋の窓から日に一度、あの美しい娘の顔を見る事さへ出来れば、何の苦痛もない」と思つた。

プロスペロはファーディナンドをさう長くは牢屋の中に押し込めて置かず、間も無く牢から引き出して、色々難儀な仕事を吩咐けた。併しプロスペロは特に意を用ひて王子が烈しい勞働の爲に苦しんでゐる様を、娘に知らせやうとし、書齋へ行くふりをしながらこつそりと蔭から二人の様子を覗つてゐた。

プロスペロはファーディナンドに、重い丸太を積み上げる様にいひつけて置いたのであるが、宮中に育つた身にこつて力仕事は非常な難業であつた。ミランダは愛する王子が疲れて死にさうになつてゐるのを見付けると驅けて來た。「まあ、お氣の毒な。そんなに働かなくてもよいのです。父は今書齋（カ）に入りましてから、三時間位は出て來ますまい、さうぞお休みなされませ。」

「お嬢さん有り難う御座います。併し仕事ですんでから休む事に致しませう。」

「あなたがお休みななればその間私が丸太を運んであげませう。」ミランダが言つたが、ファーディナンドは決してそれを承知しなかつた。ミランダは其の仕事を助けるどころでない、却つて邪魔になつて二人は長い話を語り續けたので丸太運びは少しも捗らなかつた。

ファーディナンドは唯愛の試して此仕事を與へて置いたプロスペロは、娘が思つてゐた様に書齋にはゐないで、見えない姿となつて二人の側に立つて、その話を聞いてゐた。

ファーディナンドは娘の名を尋ねた。ミランダはそのこゝろは父から嚴重にとめられてゐるのである話しながら、言つてしまつた。

プロスペロは自分の娘が初めて父の命に背いたのに對して、唯微笑を浮べた丈けであつた、と言ふのは魔法によつて娘を急に戀におちいらせる様にしたのであつて、その命に背いてまで、その愛を



表はした事に對して怒る事は出来なかつたからである。そして又ファアードイナンドか、今迄に見た凡ての婦人にも増して熱くミランダを愛すると言つた長い告白を聞いて非常に喜んだ。

王子が、世界中のどの女よりも美しくいとミランダの美しさを譽めたのに答へ、ミランダは言つた。「私はほかの女の人の顔と言ふものを覺てはをりませんし、男の方もあなたと父上とのほかには見た事がございません。それ故此處では人がごんな顔をして居るのやら存じませぬが、併しお信じ下さい。私はあなたより外に世界に友をもちたくありません。又あなたより外に好きな男の姿を想像する事さへ出来ませぬ。——お、恥づかしい。私はあなたにあまり自由に話し過ぎました。つい父上の吩咐をも忘れて。」

これを聞いてプロスペロは微笑んで、

「今度の事は全くわしの望み通りに行つたわい、これで娘もネーブルスの女王だ。」と言はんばかりにうなづいた。

そこでファアードイナンドは又町重に(宮殿で使ふ言葉で)長々と、無邪氣なミランダに自分がネーブルス王の世嗣ぎであり、ミランダを女王にすると言つた。

「あ、私は何と言ふ馬鹿なんでせう。嬉しいのに涙を流すなんて。私は全く清淨な無邪氣さを以

て申します、あなたさへ結婚して下されば私はあなたの妻になります。」

プロスペロは急に人間の姿になつて彼等の前に現はれ、ファアードイナンドの感謝を遮つた。

「怖れる事はない、娘よ。俺はお前の話をすっかり聞いてゐた。お前の言つた事は凡て認めてあげる。それから、ファアードイナンドよ。わしは貴下を餘り酷く使ひ過ぎたかも知れないが、わしの娘を上げることに依つてその憤ひをしよう。凡ての虐待も皆貴下の愛の試練に過ぎなかつたのだ。處が貴下は氣高くもその試みに耐へた。そこでわしは貴下の眞の愛に充分相當する私の娘を贈らう併しわしが自分の娘を何んな賞與よりもまして大切に思つてゐる事を笑つては下さるな。」と語り終つてプロスペロは急用があるから、自分が歸つて来るまで此處で兩人は話してもして待つてゐる様に言つて立ち去つた。此の吩咐にはミランダも、少しも逆らはずはしなかつた。

プロスペロは其處を去つて後、すぐ精靈エリエルを呼ぶと、エリエルは直ぐに出て來た。エリエルはプロスペロの弟やネーブルス王に對して自分がした仕事の結果を語らうと思つて待ちかまへてゐたからである。エリエルはネーブルス王達に不思議を見せたり、或は聞かせたりしたので、殆んど怖ろしさに氣絶せんばかりになつてゐる言つた。彼等が漂ひ廻つて非常に疲れ、食物が無いので飢死にしようとしてゐた時、エリエルは不意に彼等の前に酒池肉林の御馳走を現はした。そして



今にも彼等が食べやうとした時、貪慾な羽のはえた鳥身女面の怪物となつて彼等の前に現はれるとその御馳走は消けてしまつた。その時彼等が大層驚いたのは、此の怪物めいた者が話をし出した事である。その上彼等がプロスベロをその公國から追ひ放つた慘酷な行や、プロスベロと其のあきけない娘を海の中に投げ捨て、死するがまゝに任せておいた事なきをあばき立てた。そしてその様な罪業のむくひでこんな苦しみを嘗めなければならぬのだと語つた。

ネーブルス王や不義の弟アントニオは、自分達がプロスベロに對してした不義を後悔した。エリエルは彼等が心より前非を悔いてゐる事は確かだと主人に告げ、そして自分は精靈の身でありながら彼等を憫れまらずには居られなかつたと附け加へた。

「エリエル、それぢや弟達を此處に連れて來い。若し精靈であるお前でさへ、彼等の悲歎に心を動かされたのなら、彼等と同じ人間であるわしが彼等を憫れまない譯はない。可愛いエリエルよ。急いで彼等を連れて來い。」

エリエルは間もなく、王やアントニオや後につづく老ゴンザロ等をつれて歸つて來た。彼等は空に響くエリエルの音楽に驚きながら、エリエルの後からプロスベロの前へ進んで來た。此のゴンザロは、その昔しプロスベロの弟等が親子二人を海に沈めてしまふつもりで何の設備もない小舟に乗

せて流した時、親切にも日用品や書物等を隠して置いて呉れた、ゴンザロその人である。

悲しみや怖れの爲めに度を失つてゐた弟等は、プロスベロを見分ける事が出来なかつた。プロスベロは老ゴンザロに先づ打あけ、そして自分の命を救つて呉れた恩を謝した。そこで弟も王もこれがあの死んだ筈のプロスベロである事に氣が付いた。

アントニオは涙を流し、悲しみと真心よりの後悔から悲痛な言葉を以て、兄に赦しを乞うた。王も亦不義の弟を加勢した事に就て心からの後悔の言葉を述べてことはつた。プロスベロはネーブルス王に向つて、「私にも亦あなたの爲めにしまつてある贈物がある」と言つて、すぐさま戸を開いて王子フアーデイナンドとミランダが將棊をさしてゐる所を見せた。

お互に嵐の爲めに死んだものご諦め、二度ご逢へやうごは夢にも思つて居なかつた親子二人の再會の喜びは、何ものにも比べる事は出来ない程であつた。

「まあ！不思議な。人間ごは何ご言ふ立派な者なんだらう！かういふ人達が住んでゐる世界は、確かに勇敢な世界に違ひない。」ミランダは言つた。

17. 「ネーブルス王は若いミランダの美はしさご優雅さに、王子が驚いたご同じやうに、驚きながら「あの娘は一體誰ぢや。我々を離れさせたり、又會はせたりした女神でもあるのか？」ご王は言つ



「否、お父様」ミファアーデイナンドは初めて自分がミランダを見た時と同じ様に、父も迷ひに陥つてゐるのを知つて笑ひながら答へた。「あれは人間で御座います。併し神様の攝理に依つて私のものになりました。私は父上の御許しなしにあの娘を撰びました。實は父上が生きて居られやうごは夢にも思ひませんでした。あの娘は元の有名なミランのプロスベロ公爵の姫君です。私は公爵のお名前はかねて聞いて居りましたが對面したのは今度が初めてです。此の御方のお蔭で私は一命を拾ひ、その上姫君をも貰つて、今は第二の父上と呼ぶやうになつたので御座います。」

「では、わしがその姫君の父なる譯だが、あゝ、何言ふ妙な事だらう。親が子に詫びねばならぬは。」

「もうお言ひなさるな。この様に目出度く終りを告げたから、過ぎ去つた苦勞を思ひ出して御心を苦しめなさるには及びません。」ミプロスベロは言つた。そしてプロスベロは弟を固く抱きしめて、罪を許すに繰り返し繰り返し言つた。自分がミランの公國より追はれるやうになつたのも、ミランダ王子が偶然にもこの荒れ果てた島で出會ひ、戀に落ちて遂に娘がネーブルスの王位を嗣ぐやうになつたのも、皆、全能の神の御心より出でたのであると語つた。

プロスベロが弟を慰めようとして語つた是等の親切な言葉に、アントニオは益々恥ぢみ悔ひみに満たされ、さめくさ泣いて、はては、言葉も出ぬ程であつた。正直な老ゴンザロも此の楽しい仲直りを見て涙を流し、若き夫婦の上に幸あれかしと祈つた。

プロスベロはそこで、彼等の船が港に繋いであり船員も一人残らず無事に居る事又明朝は自分達親子も共にその船に乗つて故郷をさして出發する事なごを話した。

「程なく私の貧しい窟で心盡しの馳走を差し上げます。そして今晚は餘興として私が此の無人島に初めて上陸した時からのありし昔をお物語り致しませう。」

プロスベロはカリバンを呼んで窟の中の掃除をなし食事の用意をするやうに命じた。一同は此の醜い怪物の見慣れない風采を、野蠻な様子に非常に驚いた。プロスベロは之れが唯一の召使である話した。

プロスベロは島を去る前、エリエルを解放してやつた。エリエルは主人に至極忠實に仕へておつたけれども、常々から野の鳥の様に、緑の木蔭や、甘い果樹の間や、匂ひのいい花の中を、何にも束縛されずに跳び廻つて、無拘束な自由を娛しみ度いと言ふ望を持つてゐたので非常に喜んだ。

「わしの可愛いエリエルよ、お前は自由になつて嬉しいだらうが、今お前に別れるのは惜しい」



「ミプロスベロは自由にしてやる時に言つた。御主人様、有難う御座います。併しあなたにお別れ致します前に、追風と共にあなたの船についてお國迄お伴さして下さい。そして私が自由になりましたら、どんなに愉快に私は生きて行けるでせう。」と言つて、エリエルは次の美しい歌を歌つた。

蜂ミ一しよに花蜜を吸ひ

九輪ざくらの酒盞ちやくに臥て

臥床で梟の啼くのを聞かう。

大蝙蝠の脊に乗つて

夏の後追ひ愉快に愉快に

これから楽しく日を暮さう

枝に咲いてる花かけで。

プロスベロはもう決して魔法は使ふまいと決心して、魔法の書物と杖とを深く土中に埋めた。斯く敵に打ち勝ち、又弟やネーブルス王と和解するこゝを得た上は、唯故郷に歸つて自分の公國を取り返し、ネーブルスに歸るに直ぐ、ネーブルス王が盛大に行はうと計畫してゐる、ファージェイナン

ドミ娘ミの幸福な結婚式を見るより外には、何の望みもない幸福な身の上になつた。そして彼等は精靈エリエルの保護の下に愉快な航海を續けて、間もなくネーブルスの宮殿に着いた。

### 眞夏の夜の夢

アゼンスの市では市民は自分達の娘に、親が良いと思つた人であれば誰にでも、無理強ひに結婚させても構はないと云ふ法律があつた。若し親が娘の夫として撰んだ人ミ娘が結婚する事を承知しない場合には、父親はこの法律があるので、娘を殺してしまつてもかまはない事になつてゐた。併し娘達が時として親に對して強情を張るやうなこゝがあつても親達は自分の娘を殺さうと思ふやうな氣にはなれなかつたため、此の法律は減多に、いや決して適用されなかつた。但し此の市の娘達が兩親から、此の法律のために脅嚇された事は一度や二度では無かつた。

然るに此度次の事件が起つた。イージャスマ言ふ老人が、當時アゼンス市を治めてゐた公爵シシヤスの所へやつて来て、一人娘ハーミヤがライサンダーミ言ふアゼンス人を受してゐるため、親がアゼンスの貴公子デメトリヤスマ結婚するやうに命じても、従はないと言つて不平をこぼした。そしてイージャスマはシシヤスに正しい裁きを願ひ、この慘酷な法律を娘に執行して頂きたいと願つた



ハーミヤは父に従はない理由を以て、貴公子デメトリヤスはその以前私の無二の親友であるヘレナに戀を打明けた事があり、そのためヘレナは今もデメトリヤスを死ぬ程までに想つてゐるを申し立てた。ハーミヤが父の命令に背くにはこんな立派な理由があつたのだが、厳格な老親を納得させる事はできなかつた。

慈悲深い偉れた公爵シシヤスも、この國法を變へるだけの権力を持つてゐなかつたので仕方なくハーミヤに四日の暇を與へ、その間に善く考へ、その日の終りになつてもなほこの結婚を拒むならば、死刑に處するぞと言ひ渡した。

ハーミヤは公爵の面前から退くをすぐ、戀人ライサンダーの所へ行つて、自分の身に降り掛つた今の災難、即ちライサンダーを思ひ切つてデメトリヤスと結婚するか、さもなければ四日目には私は殺されねばならぬを訴へた。

ライサンダーはこんな亂暴な報知を聞いて非常に苦しみ歎いたが、ふも自分にはアゼンスから少し離れた所に住んでゐる伯母のある事を想ひ出した。其所ならば此の慘酷な法律もハーミヤを拘束する譯には行かない。(此の法律は市の境を越えれば執行されなかつた。)ライサンダーはハーミヤに今夜父の家を抜け出して、自分こそ一所に伯母の家へ行つてそこで結婚しようを話し「あなたも市

から數哩離れたあの愉快な森の中で出會ひませう。あそこは私達が楽しい五月にヘレナさんと一緒によく散歩した處です。」とライサンダーが言つた。

此の思ひつきにハーミヤは喜んで賛成した。そして自分が市から逃げ出す計畫に就いては、友達のヘレナの外は誰にも打明けなかつた。ヘレナは(若い娘は戀故に馬鹿な事をよくやるものだが)大變淺はかにも此の事をデメトリヤスに告げに行つた。友達の秘密を裏切つて何の利益になる譯でもなかつたが、唯自分の薄情な戀人の後から森まで行けるのが嬉しいと言ふ位な愚かな考へからであつた。ヘレナはデメトリヤスがハーミヤの後を追うて森へ行くと言ふ事をよく知つてゐたからである。

ライサンダーとハーミヤとが出會ふ約束をした此の森は、豆仙人と言ふ名でよく知られてゐる小さな妖精達のお氣に入りの棲家であつた。

そして此の妖精達の王様オベロンと女王のチタニヤは、その小さな家來共と一緒に此の森の中で眞夜中の酒盛りをして居た。

併し此の時、妖精の王様と女王との間に哀しい爭論が始まつてゐた。王夫婦は此の楽しい森の木の葉がくれの小路で、月の光に照らされながら出會ふやうな事は絶えてなく、口論ばかりするので



小さな妖精共はしまいには團栗の殻の中に這ひ込んで、怖れの爲めに縮み上つてゐた。

此の不幸な争論の原因は、チタニヤが友達の子供である小さな取替子を、オベロンに拒んで與へないからである。女王は子供をその母親が死んだ時、その乳母から盗み取つて来て、此の森で育ててゐるのである。

ハーミヤミライサンダーが此の森で出會ふ事になつてゐた其晩に、チタニヤは侍女達をつれて散ろ歩きをしてゐたがそのとき、丁度妖精の侍臣どもを召しつれたオベロン王に出會つた。

「高慢家のチタニヤ、悪い所で出會つたね。この月夜に。」と王様が言ふと

「何ですつて、嫉妬やきのオベロン。妖精共よ跳んでお行き。私達は決してあの人等と一緒に遊ばない筈なんだから。」と女王はやりかへした。オベロンは

「お待ち、向ふ見ずの妖精。わしはお前の殿様ぢやないか。何故おまへは夫に逆らはうとするのだ。わしは小姓にするためにお前の小さな取替子をお呉れと言ふて居るばかりぢやないか。」と言つた。

「お諦めよ、あの子はお前の王國全部をだつて取代へはしませんよ」と女王は言つて、非常に怒りながら王の所を去つた。

「ふん、勝手に行くが良い。あすの夜明け迄にはこの仕返しにお前を苦しめてやるから。」と王は啖呵を切つた。

オベロンはすぐさま、彼の最も寵愛してゐる樞密顧問官のバックを呼びにやつた。

バック(又はロビン、グッドフェローとも呼ばれた)は、近所の村でいつも滑稽な悪戯ばかりやつてゐる、敏捷ないたづら者の妖精であつた。時には製酪場へはいり込んで乳の上皮を抄ひ取つたり又時に、軽い空氣のやうな身體を攪乳器の中に跳び込み、その中で奇妙な舞踏をやつてゐる間は、女共が何んなに働いても無駄骨折で、いつ迄経つてもクリームがバタにはならなかつた。又手造酒の樽の中でバックがいたづらをやつて遊んでゐる間は、村の若衆たちの酒は、きつこ出来損なふにきまつてゐた。人の良い村人等が寄り合つて甘い酒を呑んだりする時にも、バックは焼蟹か何ぞのやうに酒盃の中へはいり込んで、或る年寄りのおかみさんが呑まうとするに、口許で跳ね上つて鞆だらけの顔の上へお酒を打ちまいたりする。そして、その直ぐあとで同じお婆さんが仔細らしい顔をして、近所の人達に哀れつほい陰氣な話をしようとして腰掛けるに、お婆さんの下からバックが二本脚の椅子をすつこひいたりするものだからたまらない。そのお婆さんは可愛相にすつてんどうとひつくり返る。そこで浮世話をしておつた連中は腹をかかへてぎつと笑ひ出し、今迄にこん



な可笑しい事は無かつたなど口々に言ひあつた。

「バックよ此處へ来い」ミオペロンはこの陽氣な夜のあばれ者に言つた。「娘達が『不精な戀草』」と呼んでをる花を取つて来てお呉れ。あの紫色の小さな花の汁を眠つてゐる者の目蓋の上に滴らして置く。覺めた時始めて見たものに見さかひもなく惚れてしまふ効目があるのだ。予はその花の汁をチタニヤが眠つてをる時、その目蓋の上に少しばかり滴らして置かう。さうする目目を醒した時見えた者、例へそれが獅子であらうミ熊であらうと、いたづらな猿、忙しない短尾猿、その他何であらうミ夢中になつて戀に落ちてしまふのだ。それから其のまじなひをあれの眼から消す前に――他の草を使へばすぐ消される――あの子供をチタニヤから渡させてわしの小姓にしてはう」

心から惡戯好きのバックは、此の主人の考へ付いた惡戯を非常に悦んで、花を探しに飛んで行つた。そしてオペロンは、バックの歸りを待つて居る間に、デメトリヤスとヘレナとが森に這入つて來たのに氣が付いた。

デメトリヤスが何故自分に從いて來るのかとヘレナを責め、さんく惡口を言つたのや、ヘレナがデメトリヤスの以前の愛や、自分に對して打明けた真心なきを言ひ出して、物靜かに諫めてをるのなきを、すつかり立ち聞きした。男は(彼が言つたやうに)ヘレナを野獸の餌食にでもなるがいい

ミ言はんばかりに女を後に殘して逃げ出した。さうするミヘレナはデメトリヤスの後から力の限りに追ひ駈けて行つた。

常に眞の戀人に親切な妖精の王様は、ヘレナを大層不憫に思つた。そして、ライサンダーが言つたやうに、彼等はおそらく月夜に此の楽しい森を歩くのを常として居つたのだから、オペロンもヘレナがデメトリヤスから愛されてゐた幸福な時代を見たであらう。それはともあれ、バックが紫の小花を持つて歸つて來た時、オペロンは寵臣に言つた。「その花を少し別に取つて置け。此の森へアゼンスの佳人が來てゐるが、女は愛する男から振られてゐるのだ。それで若しお前がその男が眠つてゐる所を見付けたならば、その戀の露を少し男の眼に滴らすのだ。併し注意して男が目を覺した時一番に、その捨てられた婦人を見るやうに、その女が彼の側に居る時にせなければいけない。その男はアゼンス風の服を着てゐるからお前にでもすぐ見分けられるだらう。」そしてバックは、此の仕事を器用にやると約束した。やがてオペロンはチタニヤに見えぬ姿となつて、その寢室に行つた。その時チタニヤは寢仕度をしてゐた。寢室に言つても、立麝香草や黄花の九輪草、香の良いすみれなきの咲れ亂れ、上にはマスクローズやエグランティン等の花の間に忍冬等がまじひついで、自然の天蓋を作つてゐる堤の上であり、チタニヤは其處で夜の僅かの時間を眠るのであつた



寢台掛は玳瑁塗の蛇の皮であつてそれは極く小さなものではあつたが妖精がくるまるには十分であつた。

王は、チタニヤが妖精共に、自分が眠つてゐる間に爲すべき仕事を應揚に吩咐してゐるのを見た。「お前等の幾人は麝香薔薇の毛蟲を取つておやり。他の者は蝙蝠退治に行つて、あの革のやうな翼を取つて来ておくれ。それで豆仙人達の上衣を作つてあげやう。又他の者は、あの夜な夜な鳴く喧ましい梟が、私の近くへ来ないやうに番をしてゐておくれ。けれども最初私が寢付くまで歌を歌つておくれ。」

そこで妖精達は次の様に歌ひ出した。

ほつ／＼模様の、舌が二つのお蛇さん、

きてはいけない。刺々だらけの蝟、

蠖むしよ／＼、足なし蝨むしよ、悪戯すな。

来るなよ／＼、お仙女王さまのお傍へは。

妙音鳥まごころよ節面白く、歌、歌へ。

ルラ、ルラ、ルラバイ、ルラ、ルラ、ルラ、ルラバイ。

此方の大切なお仙女王さまにや

羨も、障りも、魔も附かぬ。

そんならおやすみ、ルラバイ。

此の美くしい子守歌で女王を寢かし附けた妖精達は、女王から吩咐かつた大切な仕事をはたす爲めに其處を去つた。オベロンはそこで靜かにチタニヤの側へ寄り、目蓋に戀の露を滴らした。次の様に言ひながら！

目醒めの時に見た者を

眞實戀しと思ひ込め。

話變つて、ハーミヤは、デメトリヤスとの結婚を拒むと死刑になるから、是れを逃れようとして、其晩父の家から逃げ出し、森に這入つた時、丁度愛するライサンダーが、伯母の家へ一所に行くために待つてゐるのを見附けた。併し二人が森の路を半分程も行かない前に、ハーミヤは非常に疲れてしまつた。ライサンダーは、自分の爲めならば命をも惜まないごまでに深い愛を證據立ててをる、この佳人を非常に愛してゐるので、ハーミヤを説いて朝まで柔かな昔の生えた堤の上で眠らせ、自分はそこから少し離れた所に横になつたが、間もなく二人とも深い眠りに落ちた。バックは二人



を見付け出した。そして立派な青年が眠つて居り又其着てゐる服がアゼンス風であることや、その側に美くしい婦人の眠つてゐるのを見て、これこそオベロンが探ね出せし命じた、アゼンスの娘と其不實な戀人だと思ひ込んで終つた。そこでバックがこの様に二人きりで人里離れた所に居るのでから、男が起きた時に始めて見るのはこの女より外にあるまいと考へたのも全く無理のない話である。そこでバックはもうぐずぐずせず男の眼蓋へその紫の小花の汁を滴らし込むだが折も折そこにヘレナが通り掛かつたのである。そしてライサンダーが眼を開いた時始めて見たのはハーミヤではなくヘレナであつた。そしてまことにをかした話だが、その戀藥の効能の強かつたため、今迄のハーミヤに對する戀は總て消え去つて、ライサンダーはヘレナへの戀に落ちてしまつた。

ライサンダーが眼を醒した最初にハーミヤをさへ見てゐたなら、バックのやつた失錯も無事に濟んだであらうに。いくらライサンダーでもあの信實な佳人ハーミヤをこれ以上に愛する事は出来なかつたであらうから。併し可愛相にライサンダーはこの立妙な戀藥のために眞實な戀人ハーミヤの事を忘れて他の婦人を慕ふ様になり眞夜中の森蔭に獨り眠つてゐるハーミヤを置き去りにしてしまつた。

かくして、不幸な事件は起つた。前にも言つた通りヘレナは、デメトリヤスが自分を捨てて荒々

しく一目散に逃げ出したので、男に追ひ付かうとして非常な努力はしたがこの不均衡な競走を長く續けて行く事は出来なかつた。長距離競走では男は女よりもよく走るものだ。ヘレナは程なくデメトリヤスを見失つてしまひ、そして落膽しながら寄るべくなく森を彷徨うてゐた時、ライサンダーの眠つて居る所へ來たのである。「おや、ライサンダーさんだ。地面に！死んで居るのか、眠つて居るのか」ミヘレナは靜かにライサンダーに觸りながら「もしもし、生きてらつしやるのなら起きて頂戴よ」と言つた。この聲にライサンダーは眼を醒し、そして「戀藥が利き始めたのだ」すぐ様大けさな戀や賞讃の言葉で、ヘレナの美くしさはハーミヤよりも、鳩と鴉とが違ふ程優れてゐるが、ヘレナの爲ならば火の中を駆け抜けでもするとか、そんな風の戀人らしい話を立て續けに語つた。ヘレナはライサンダーが友達のハーミヤの戀人である事も、結婚すると言ふ固い約束をして居る事も良く知つてゐるので、斯んな風に言ひ掛けられた時に、非常に怒り出した。夫れはライサンダーが自分を揶揄つてゐるのだと思つたからだ（彼女としては道理な事である）。「あ、情ない。何の因果で私はこんなに皆から嘲弄されるんだらう。私がデメトリヤスさんから一寸でも優しい目附で見てもらつたり、親切な言葉をさへ聞かされない丈で十分ぢやありませんか。もうそれで澤山ぢやありませんか。その上あなたにまでこんな輕蔑した様な調子で口説かれたりして、ライサンダーさん。



私はあなたはもつこ誠のある紳士だまばかり思つてゐました。」と言ひながら非常に怒つてヘレナは駈け出した。するとライサンダーは、未だ眠つてゐるハーミヤのまごなまご全く忘れてしまつて、ヘレナの後を追つて行つた。

ハーミヤは眼を覺して、一人其所に取残されてゐるのを知つて驚き悲しんだ。ライサンダーに何んな事件が起つたのか、又何處に行つたのかも知らずに、森の中を彷徨つた。然るに一方、デメトリヤスはハーミヤや、戀の競争者であるライサンダーを、彼方此方探ね倦んだ末、疲れ切つて熟睡してゐるまご、オベロンに見出された。オベロンはさつきバックから聞いた事によつて、バックが間違つた男の眼に戀藥をつけた事を知つて居た。まごころが今、最初に考へてゐた當人に出會つたのですぐに戀藥をデメトリヤスの眼蓋につけた。間もなく眼を覺したデメトリヤスの眼に最初に映つたのは今まで逃げ回つてゐたヘレナであつたので、ヘレナに向つて戀の契ひを述べ始めた。丁度此時、ライサンダーはハーミヤに追ひ掛けられながらやつて來た。(バックの不幸な失錯のために、今度はハーミヤが戀人を追ひ掛けねばならぬ番になつた)斯くしてライサンダーもデメトリヤスは二人共同じ機能のある藥の力のために一時にヘレナに對して戀を語り始めたのである。

驚きのあまりヘレナは、デメトリヤスもライサンダーも、又嘗ては無二の親友であつたハーミヤも、皆が一味になつて彼女を擲擄つてゐるのだま考へた。

一方、ハーミヤの驚愕もヘレナに劣らなかつた。デメトリヤスもライサンダーも以前はあれ程までに自分を愛してゐたのであつたのに今ではヘレナの戀人となつてしまつたのが一切譯が判らず、然も又其様子が何うしても戯談だまは思へなかつた。

これまで一番親しかつたハーミヤもヘレナまでが喧嘩を始めるといふ騒になつてしまつた。

「まあ意地の悪いハーミヤさん。ライサンダーさんにあんな馬鹿な賞讃をさせて私を苦しめさせ、又あなたに戀して居たデメトリヤスさんはいつちも私を足蹴に迄しようましてゐる人であるのに、私を女神だまか水神だとか、絶世の美人だの、此の世ならぬ美しさだなどと言はせるのは、皆あなたでせう。あなたが私を擲擄ふためにあの人にそんな事を言ふ様に言ひつけなければ、是まで私を嫌つてゐる人が何うしてそんな事を言ふものですか。男達も一味になつて可愛相な友達を嘲笑するなんて、何まいふ意地の悪いハーミヤさんだろ。あなたは私達の學校時代の事をもうお忘れになつたの？。いつも、私達二人は同じ稽古縫ひをするとして、同じ蒲團くつしんに座つて、同じ歌を歌ひながら、同じ花を縫つたぢやないの。そしてまるで双子の櫻實さくらんぼの様に、滅多に離れた事もない程にして育つたぢやありませんか。それに、情誼も娘らしい嗜もあつたものぢやない。男達も一緒になつて、可



愛さうな友達を嘲弄するなんて」ミヘレナは憤りだした。

「わたし驚いてしまつたわ。貴女がそんなに真面目になつてお憤りになるなんて。私は決して貴女を馬鹿になんぞしてゐません。貴女こそ私を馬鹿になさるんでせう。たんとさうなさい。根氣よ、真面目な顔をしておゐてなさい。そして私が後向いた時に舌を出して、互に目交めまはせをして、散々私をお笑ひなさい。あなたに少しでも慈悲か徳義か禮儀があつたなら、こんなに私を笑ひの種にはなさなかつたでせうに」ミハーミヤはやりかへした。

二人が斯んな悪口を言ひ合つてゐる時に、デメトリヤスとライサンダーミは、二人を残してヘレナの戀の爲めに決闘をしようと森の中に行つてゐた。

デメトリヤスミライサンダーミの居ない事に氣のついた二人は、そこで別れて又お互の戀人を探ねながら、うろくミ森の中を彷徨つた。

二人が立ち去るや否や、バツクと共に今の爭論を聞いてゐた妖精の王は、バツクに言つた。

「バツク、これはお前の失錯だ。それともお前はこれを故意にやつたのか。」

「お信じ下さい陰影の王様、全く私の間違です。アゼンスの服装で見分けるにおつしやつたでせう。併し此の爭論は益々面白うなりますから私は後悔どころか却つてうれしくてたまりません」。

「お前も聞いたらう、デメトリヤスとライサンダーミは決闘をするに都合の好い場所を探しに行つたのだ。予はお前に命ずる。今晚は深い霧を降らしてあの喧嘩好きの戀人達が、お互が見分けられなくなる程暗の中を迷はしてやれ。お前がお互の聲色を使つて、お互に競争者の聲だと思はせて置いて、何うしても相手がついて來なければならぬ様な悪口を言ふのだ。そしてお前は二人がもう一步も歩けない程疲れる迄これを續けねばならぬ。そして二人が眠つて了つたのを見とゞけた上で、草の汁をライサンダーの眼に塗れ。さうすれば今度、目を醒した時には、ヘレナミの新らしい戀なごはすつかり忘れてしまつて、元の様にハーミヤに對する愛情に歸るだらう。それで二人の婦人達もお互に愛する男ミ幸福に暮す事が出来るのだ。そして一同は此の事件を惱み多かりし一場の夢だつたを悟るだらう。バツク、お前はこれを急いでやつて來い。予はこれから行つて、チタニヤが何んな奴ミ戀に落ちてゐるかを見て來ねばならぬ。」

チタニヤはまだ眠つて居た。オベロンは森の中で道を失つた道化者がチタニヤの側に、同じ様に眠つてゐるのを見た。「此奴がチタニヤの戀人になるのだらう。」と言つて道化者の頭の上から驢馬の頭をかぶせた。さうすると生れ付きこんな頭をしてゐたかと思はれる程よく似合つた。オベロンは極く靜かに、驢馬の頭をかぶせたのであるが、道化者はその爲めに眼を醒ましてしまひ、今オベロン



がやつた事には少しも気がつかずに立上つて、妖精の女王が眠つてゐる寢室の方へと歩き出した。  
「まあ私は何ごいふ立派な天使を見るのだらう」ミチタニヤが言つた。眼を開いた時には紫の小花の汁が利き始めてゐた。

「あなたはほんとに才色兼備の方でせう」

「さうでもねえだよおかみさん。今此の森から出られるだけの智慧がありや、今うんご役に立つんだけさ」と馬鹿道化者は答へた。

「この森から出たがつたりしちやいけないのよ」ミ心を奪はれた女王は言つた。

「私は唯の妖精ぢやないのよ。私はあなたを愛して居る。私と一緒にいらつしやい。侍女ごもに言ひ附けて何でも御用をさせますから。」

そこで女王は妖精を四人ばかり呼び出した。豆の花と蜘蛛の巢ひかりしと芥子の種しの四人である。

「このお方に善くお仕へするのだよ。散歩の時には先に立つて飛び、或は前で跳り廻つて見せるのだ。まあ私の側へお座りなさい。可愛いあなたの毛だらけの頬をなぶらせて頂戴。美しい驢馬さん。あなたの奇麗な大きい耳に接吻さして頂戴。」

「豆の花は何處にゐる。」と驢馬の道化者は、妖精の女王の甘い戀には耳を借さないで、召使が出

來たので得意になつて言つた。

「はい何の御用。」

「わしの頭を搔いてお呉れ。」

「蜘蛛の巢は何處にゐる。」

「はい此處に居ります。」

「蜘蛛の巢君。あすこの藓の頂點にゐる赤い見苦しい蜂を殺して来てお呉んなせえ。そして蜘蛛さん、奴さんの蜜袋を持つて来ておくんなせえ。あんまり威勢よく跳廻るこいけましねえだよ。蜜袋を破らねわ様に氣を付けねえさ、蜜が溢れてお前さんが押潰されちや大變だからな。芥子の種は何處だい。」

「はい此處に居ります。何ぞ御用で御座いますか。」

「何んでもねえんだ。芥子の種公。豆の花公を助けて私の頭を搔いて呉れ。わしあ顔中毛だらけだもんで、散髪師へ行かにやならねわだ。」

「ねわ、可愛い人、何か喰べたくは無くつて。わたしの許には大膽な妖精が居るから、栗鼠の所へ行つて、蓄め込んでゐる新らしい栗の實を取らして來ませうかね」と女王は言ふ。



「それよりも、わしは乾豆が手に一杯ほしいだよ。」

驢馬の頭をかぶぜられたものだから、驢馬見た様なものが食べ度くなつたのである。

「併しお願だから、放つて置いてもらひてえな、眠くなつて来ただから。」

「それぢやお寢み。わたしが両手で抱擁して上げるから。まあ私どんなにあなたを溺愛してるか知れなくつてよ。」

道化者が女王の手に抱かれて寝てしまつたのを見すまし、妖精の王様はその前に現はれて、驢馬なごに愛を捧けてゐるのを非難した。

女王は實際手の中に、自分が作つてやつた花輪を頭につけた驢馬を抱いてゐたので、これを否定する譯に行なかつた。

オベロンは暫時女王をからかつた末、又取替子の事を言ひ出した。女王は新らしい戀人と一緒にゐる所を見付けられた事を恥ぢてゐたので、王の命令を斷る譯には行かなかつた。

常から長い間、小姓にするために欲しいと思つてゐた子供を得たあごで、王様は面白い計畫のために恥かしい状態に陥つてゐるチタニヤを憫れんで別な草花の汁を女王の眼に注いでやつた。

そこで妖精の女王は直ちに正氣に歸つて今はもうこの奇妙な怪物を見るのも嫌だと言ひながら、何

故あんなに溺愛してゐたのかを怪しんだ。

オベロンは又道化者の頭から驢馬の首を取つてやり、元のまゝ馬鹿な頭に戻してうたゝねをさして置いた。

オベロンとチタニヤは今は仲直りが出来たのでオベロンはあの戀人達の話や、眞夜中の爭論のこごなごを語り聞かし、それから女王は王と一緒にこの事件の結末を見に行つた。

妖精の王様と女王は、お互にあまり距てない草の上に戀人達とその佳人達が寝て居るのを見付けた。それはバックが、前の失錯の償をするために非常な努力で忠實に、彼等を互に知らさない様にして、皆を同じ場所へ寄せて置いた。そして注意してライサンダーの眼に王様が呉れた解毒薬をつけて効能を消して置いたのである。

ハーミヤは最先に眼を覺し、見失つてゐたライサンダーが直ぐ近くに寝てゐるのを見附けて寝顔を見ながら急に氣が變つたことを不思議相に考へて居た。ライサンダーは次いで眼を開いて愛するハーミヤを見た時妖精の魔藥で曇つてゐた理性を取り戻し、その理性と共にハーミヤに對する愛をも回復した。そこで二人はその晩の事柄を話し出した。あれが本當の事件であつたのかそれとも、二人とも同じ様な怖ろしい迷の夢を見てゐたのだらうかなごと怪しみながら。



ヘレナとデメトリヤスもその時眼を醒した。ヘレナはぐつすり眠つたので憤怒のために混亂して居た気分も少しは靜まつて居た。そしてヘレナはデメトリヤスが尙も自分に戀を告白するのを聞いて喜んだ。しかもその言葉が、驚いた事には又嬉しい事には、ヘレナにはほんこの戀だと思はれ出した。終夜、さまよひ廻つてゐた、此の美しい娘達は、もうお互に競争者ではなくて、元の様な親しい友達になり、前に云ひ合つた失禮な言葉を互に許し合ひ、これからどうすれば一番良いのだからかみ皆で靜かに相談をし始めた。併し相談は直ぐにきまつた。即ちデメトリヤスはもうハーミヤの事をきれいに思ひ切つてしまつたのだから、一生懸命ハーミヤのお父さんを説き付けて、既に取きめられたあの慘酷な死刑の宣告を取り消させる様に努力しようと思つた。デメトリヤスが此の斡旋のためにアゼンスの市へ歸る仕度をしてゐた時、不思議にも、ハーミヤの父イージャスが、家出した娘を探しに森の方へやつて來た。

イージャスはデメトリヤスがもう娘との結婚を望んでゐないと言ふ事を聞いてはライサンダーミの結婚に反對しないばかりでなく、ハーミヤの死刑の執行日であつた四日目の日に、結婚さしてもよいと言ふ許しを與へた。そして其の同じ日にヘレナは今愛し愛されて居るデメトリヤスと喜んで結婚する事となつた。

この戀人達の仲直りの見ぬない見物人であつた妖精の王と女王とは、王の盡力のお蔭で二組の戀人達の仲が圓く治まつたのを見て非常に喜び、そして親切な妖精共は來るべき結婚の日には妖精の國中をこぞつて躍り廻つて祝盃を上げる事に決めた。

若し讀者の中の誰か、この妖精やこの惡戯話を信ぜられぬとか、有り得ぬ事だとか言つて反對するものがあるならば、唯諸君は、眠つてゐた間に夢を見てゐたので、此等の事件は凡てその夢の中で見た幻影に過ぎなかつたのだと思つてもらへばよい。そして私は此の美しい何の害にもならない眞夏の夜の夢に對して、小言を言ふやうな譯の判らない讀者は一人もないことを望んでをる。

### 冬の夜ばなし

シシリヤ王リオンチーズミ、淑徳の譽高い王妃ハーマイオネとは、非常に仲睦じく暮してゐた。王が此の世に優れた王妃を愛してゐた時には、何一つ満足されない願とはなない程に幸福であつた。併し唯一つありこすれば、學校友達であるボヘミヤ王ポリクシニーズミ、も一度出會ひ、自分の妃にも紹介したいものだと言ふ願であつた。リオンチーズミポリクシニーズミは、子供の時から一緒に育つてゐたが、父の逝去と共に、二人も自分の國を治めるために呼び戻され、それ以來は長い



間出會ふ機會がなかつた。併し二人は屢々贈物や、手紙や親交の使節などをこり交してゐた。

ボリクシニーズは幾度もく誘はれるので、到タリオンチーズを訪問するため、ボヘミヤからシシリヤ宮廷を訪れることゝなつた。

最初はこの訪問こそリオンチーズにこつて例へやうのない喜びであつた。それで王は王妃にこの竹馬の友を特別に世話するやうにこ奨めた。この昔馴染の親しい友達に出會つたので、王の幸福は凡て満たされ盡したやうに見えた。二人は昔の事どもを話し合つた。學校時代や青年時代の悪戯なごをも思ひ出して、そこに侍坐して興を添へてゐた王妃にも物語つた。

長い逗留の後、ボリクシニーズが歸國の仕度を始めた。ハーマイオネは夫の願ひにより、夫と共に口をそろへてボリクシニーズに、もう少し逗留するやうにこ奨めた。

併し此の時既にこの貞淑な王妃の悲しみが始まつたのである。こ言ふのはボリクシニーズは、リオンチーズに引き留められた時には斷つて置きながら、ハーマイオネの優しい言葉にこうく出發を數週間延ばす事になつたからである。此のこ以來リオンチーズは、友人ボリクシニーズの廉潔信義の人となり、徳高い王妃の優れた性質をもよく知つてゐたにも拘らず、どうする事も出来ない嫉妬の心に捕はれてしまつた。

王妃が夫の格別な望によつて、唯慰めるためにボリクシニーズを大事にするこ、その度毎に王の嫉妬は増すばかりであつた。リオンチーズは今まで愛に満ち信義に厚い友達であり、又此上もない善良な夫であつたのに、急に野蠻人より思はれない悪魔のやうな心になつてしまつたのである。リオンチーズは或日貴族の一人である、カミローを召び、胸中の疑惑を打明けて、ボリクシニーズに毒を飯ませるやうにと命じた。

カミローは善人であつた。そして王の嫉妬が實際根も葉もないこを良く知つてゐたので、ボリクシニーズに毒を飲ませないで、王の悪計を知らせ、一緒にシシリヤ國外へ逃げ延びる様にと説いて同意させた。そこでボリクシニーズはカミローの助けに依つて無事にボヘミヤに着くこが出来た。その時以來カミローはその國の宮廷に仕へて住むことなり、ボリクシニーズの無二の親友となつて寵遇を受けた。

然るにボリクシニーズの逃亡は、一層嫉妬深いリオンチーズを怒らした。リオンチーズはすぐ様王妃の居室に行つた。王妃はその時王子マミリヤスミ一緒に座つてゐた。王子はお母様を喜ばせるために一番好きなお話の一つを語り始めようこしてゐた。王はそこへ這入つて来て王子を連れ去りハーマイオネを牢獄に打ち込んでしまつた。



マミリヤスは、未だいたけない子供であつたけれども、母上を深く愛してゐたので、母がこんな  
に辱められたのを見、又牢に入れられるために自分の側からつれ行かれたのを知つて、深く心を  
痛めた。そして時の経つにつれて物思ひに耽り、母のこのみ心配して食慾も進まず、眠りも減り  
遂にはそのために死んでしまはないかと思はれる程であつた。

王は王妃を牢に入れるに、クリオミニーズミディオンと言ふ二人の貴族に命じてデルフォスへ遣  
り、其處でアポロー神宮の神託を伺つて、王妃が王に不實であつたか何うかを決める様にと吩咐け  
た。

ハーマイオネが牢に入れられてから間もなく、王妃は女の兒を産んだ。そして哀れな王妃は可愛  
らしい嬰兒を見て非常に心を慰めた。そして王妃は言つた。「氣の毒な囚人よ、私もお前と同じ様に  
罪がないんだよ」云。

王妃にはシシリヤの貴族アンチゴナーナスの妻であるポーライナと言ふ氣高い氣質の親切な友達が  
あつた。そして此婦人は王妃がお産をされたと言ふ事を聞き、すぐに牢屋へ行つて、王妃の侍女エ  
ミリヤに逢ひ「エミリヤさん、お願ひですから王妃様に、私をお信じ遊ばしてお姫様をお預け下さ  
いますならば、わたしは屹度王様にお眼にかけませう。無邪氣なお姫様を御覧になれば、お氣がさ

んなに和らぐか知れませんか」云言つた。

「お情け深い奥さま。私はあなたの尊い御親切をすぐ王妃さまにお傳へ致しませう。王妃さまも  
つい今まで、誰かこの子供を王様のお眼に掛けて呉れる程の友達さへも居ないものかなさおつしや  
つて居られました。」云エミリヤは答へた。

「それぢやね、私が王様に手強く、王妃様のお辯護を申し上げますとお傳へ下さい。」

「尊い王妃様へのあなたの御親切に對して、神様のお恵が永遠にあります様に。」  
とエミリヤは言ひながら王妃の所へ行つてその事を話した。すると誰もこの嬰兒をその父王の所  
へ抱いて行つて呉れる人はあるまいと心配してゐた所なので、非常に喜んでポーライナに任せる事  
にした。

ポーライナは、夫が王の怒りを怖れて妨げようと思つたにも拘らず、此の生れたばかりの嬰兒を  
抱き、勇氣を出して王の前に出て行つた。そしてその嬰兒を王の脚下に置いて、王妃のために雄々  
しくもその無實を辯護した。そして手厳しく王の無道を責め、無實の罪に泣く王妃と姫君とを憐み  
給へと哀願した。併しその心よりの諫言も、唯王の不快を増したのみで、遂に王は夫のアンチゴーナ  
スに命じて、ポーライナを王の面前よりつれ去らした。



ポーライナは出て行く時、其小さな嬰兒を父王の脚下に残して置いた。王が一人になられたら、これを見てその無邪氣で寄る邊なき様子に同情を寄せられるだらうと思つたからである。氣立てのよいポーライナの考へは間違つてゐた。ポーライナが出て行くや、否や無慈悲な王はその夫アンチゴーンナスに命じ、この嬰兒を船に乗せて行き、何處か人里離れた海岸に置去りにして殺してしまへと吩咐けた。

アンチゴーンナスはボヘミヤ王を助けた、人の良いカミローは違つて、王の命令通りに急いで嬰兒を船に乗せ、何處か人の居ない海岸が見附かり次第、そこに置き去りにしようと思つながら漕ぎ出して行つた。

王は王妃の罪を確信してゐたので、アポローの神宮へ神託を聞きにやつた二人の歸りを待つ事さへせず、まだお産の床から起きもせず、嬰兒を失つた悲哀から充分回復もしてゐない王妃を、宮仕へしてゐる貴族達の面前で裁判するために引き出した。國中の大名や裁判官や貴族達は王妃を審判するために集つた。そしてこの不幸な王妃が臣下の前に判決を受けるために囚人として立つてゐた時、クリオミニーズミディオオンとが駆け歸り、王に嚴封してある神託を差出した。そこでリオンチーズはその封を切つて大聲に神託を読み上げよと命じた。次の様な言葉であつた。

「ハーマイオネは貞潔なり、ポリクシニーズに罪科なし。カミローは忠臣なり。リオンチーズは猜疑心深き暴君なり。若し捨てたる其子にして發見せられざらんか、王はその嗣を絶たん。」

併し王は此の神託に少しの信用をも置かうとしなかつた。そしてこれは王妃の友達がこしらへた作り事だと言ひ切り、裁判官達に王妃の取調べを續けて裁判をする様に命令した。其時、まだ其の言葉も終らぬ中に一人の侍臣が駆け込んで来て王子マミリヤスは母后が生死にかゝる裁判をされてゐる事を聞いて悲しみと恥辱の爲に衝心して、今亡くなられたと王に報告した。

ハーマイオネは深く寵愛してゐた王子が、自分の不幸を歎き悲しんで、遂に落命したと聞いて氣絶した。リオンチーズもこの報知に心を貫かれ、不幸な王妃を同情し始め、ポーライナや侍女達に命じて、王妃をつれて行かせ手厚く介抱をさせた。併し間もなくポーライナは歸つて来て、王妃の崩御を王に報じた。

王はその報知を聞き、始めて王妃に對してした慘酷な行ひを後悔した。そして王はあの慘忍な行ひが、ハーマイオネの心臓を破つたのだと悟り、王妃の無罪であつた事を信じた。そしてかの神託は眞實であり（若し捨てた其子にして發見せられざらんか）とあつたのは、海に運ばした嬰兒の事であらうと考へた。王子マミリヤスが死んでしまつたから、王には嗣が絶つてしまつたのである。



王は國と交換してでも、棄てさせた兒を探し出したいと願つた。そして親らは只管後悔の念にかられて、歎息の思出に後悔の悲しみこの裡に數年を送つた。

幼ない王女を乗せて海に乗り出した船は、風雨のために打流されて、ボリクシニーズの國であるボヘミヤの海岸に漂流した。アンチゴーンナスは上陸して嬰兒を置き去りにした。

アンチゴーンナスは、王に復命するためにはシシリヤへ歸つて來なかつた。それはアンチゴーンナスが船へ歸らうと急ぐ途中に、森の中から現れた一匹の熊のために、八つ裂にされてしまつたからである。よこしまな命令に従ふたものには正しい天罰である。

此の王女は非常に高價な着物をまごひ寶石なごを着けてゐた。王妃が嫌を王の前へつれて行かせた時に、大層立派な装束をしてやつたからである。アンチゴーンナスは王女の外套に紙片を附し、それにはバーディタ（亡き人）と書いて置いた。これは暗に高貴の生れであり不運な者である事を示しておいたのである。

此の哀れな捨兒は羊飼に見附けられた。羊飼は人情のある男だつたので、その小さなバーディタを家につれて歸り、妻もまた大切にして之を育てたが、貧乏の淺間しさには、王女についてゐた寶玉類を隠して、何處でそんな寶玉類を得たかを誰にも知らせないために、住み馴れた土地を捨て、

他へ移り行き、バーディタの寶石の半分で羊の群を買ひ、今では金持の羊飼になつてゐた。そしてバーディタを自分の娘として育てたので、バーディタも自分が羊飼の娘でないなどは夢にも思つてゐなかつた。

小さなバーディタもはや大きくなつて、愛らしい娘になつた。そして普通の羊飼の娘としてより以上に、何の教育も受けてはゐなかつたが、母から受け繼いだ天稟の麗質はその教育されない心はいやが上にも光輝あらしめた。その振舞を見ただけならば誰でも父王の宮廷で育つたのだと言つても疑ふものはなかつたらう。

ボヘミヤ王ボリクシニーズにはフロリゼルと呼ぶ一人の王子があつた。此の若い王子がたま／＼羊飼の家の側で狩をしてゐた時、その老人の子供だと言ふ娘を見た。バーディタの美しくさ、慎み深さ、女王の様なものごしを見てその場で戀する様になつた。夫れから間もなくドリクレスと言ふ名前で、普通の紳士の風を装ひ、絶えず羊飼の家を訪れるやうになつた。フロリゼルが餘り度々宮廷から出て行くのでボリクシニーズは怪しんで、侍臣に吩咐けて王子を見張りさせ、終には羊飼の美しい娘を戀してゐるのだと言ふ事を知つた。

— 49 —  
そこでボリクシニーズは、リオンチーズの狂暴から自分の命を救つて呉れたあの忠義なカミロー



を呼びにやつた。そして自分と一緒にバーデイタの親父だと言ふ羊飼の家を訪ねて呉れるやうにミ頼んだ。

王ミカミローとは共に姿を變へて羊飼の老人の家へ行つた。其の日は丁度羊毛刈祭で大勢の者が集まつて居り、また此のお祭には誰彼の差別なしに招く習慣であつたから、王達二人は見馴れぬ者ではあつたけれど、中へ這入つて皆ミ一緒にお祭をする様にと請はれた。

家の中には歡樂喜悅とが満ち溢れ、食事の用意も出來て居り、田舎祭の餘興なごも、どつさり準備が整つてゐた。家の前の草原では若者や娘達が踊りを踊つて居り、戸口の所では他の一團の若者達が行商人からリボンや手袋や玩具なごを買つてゐた。

此の盛んなお祭の最中に、フロリゼルミバーデイタは隅の方に靜かに座つてゐた。そして陽氣な踊や遊戯などに加はるよりも、お互に話をしてゐる方がずつミ楽しさうに見えた。

王は非常にうまく變裝してゐたので、王子の眼でさへそれを見分ける事が出來なかつた。そこで王主従は二人の話が聞える様な近くまで近寄つて行つた。單純ではあるが優雅なバーデイタの話し振りには、ボリクシニーズも驚かすには居られなかつた。王はカミローに囁いて言つた。

「全く田舎に稀な可愛らしい村娘だ。あの娘のする事なり様子なりには、卑しい羊飼の娘とは思

へない氣高い所がある」

「全くあの娘は牛乳や乳精（乳精）を取る娘仲間の女王でございます。」

「おい親父さん」と王は老羊飼に問ひかけた。「お前さんの娘と話をしてゐるあの奇麗な若者は誰だい。」

「ドリクルスミか言ふんですよ」と老人は答へた「あの男はわしの娘が好きで仕様がねむと言つて居りますが、本當の所を言へば何方の方が一つキツス分だけでも餘計に惚れてゐるだけか解りましねえだよ。若しあの男が娘を手に入れりや、思ひ掛けもねえ幸福にあり附きますだ」その幸福とはバーデイタの寶石の残りの事である。爺はその半分で羊の群を買ひ、残りの半分をバーデイタの結婚の時と思つて大切にしまつて置いたのである。

ボリクシニーズはそしらぬ顔で王子に話し掛けた。「さうだい若い衆さん、お前さんは何か思ひつめなさる事があるのか、お祭も何も忘れてしまつてる様だね。わし達の若い時分にや、無暗ミ物を買つて戀人にやつたものだ。それにお前さんは玩具の一つも買はないで、行商人を歸してしまひましたね。」

自分の父親に話しかけられてゐるなごは思ひもよらぬ王子は「お年寄さん、彼女はあんなつま



らないものはちつとも欲しがらないのです。彼女が欲しがる物は唯一つ私の胸にしまつて錠が下してあるんです。」と答へ、そしてバーデイタの方へ向き直つて言つた。「お、バーデイタ、お聴き、このお年老の前で、何うやら戀の經驗がおありの様だから……私の本當の心をこの老人にも聞かしてあげよう。」そしてフロリゼルはこの見知らぬ老人に、自分がバーデイタと嚴かな結婚を誓ふ、その誓の證人になつて呉れと頼んで、「さうぞ結婚の證人になつて下さい」と言つた。

「若い衆、それよりか離婚の證人にならう」王は假装を解いて王子に近寄り、身分の賤しい娘なき、婚約した事を叱責して、娘の事を「羊飼の餓鬼」だの「羊のわな」なき、散々悪口を言つた上、これ以後この若者に出會つたりなどして苦しめる様なことがあれば、娘も父親の羊飼も共に黷殺しにしてやるぞと嚇し附けた。

王は非常に怒りながら羊飼の所を立ち出で、カミローに王子フロリゼルをつれて後から従いて來る様にと命じた。

王が去つた後ポリクシニーズの罵言のために、バーデイタは却つてその氣高い性質に呼び覺されて言つた。「私達はたゞへ賤しく貧しい身分であつても、少しも怖れ悲しみませぬ。私は一度も二度ももう少しで申し上げようと思つたのです。王様の御殿にばかりお陽様はお照らしになるのではな

くて、私共の小屋にでも同じ様に光を惠んで下さいますつてね。」それから「この夢はもう覺めました。女王さまの眞似なんかは、もう決してしません、さうぞお立ち去り下さい。私はこれから羊の乳搾りなきをして、泣いて暮しませう。」と悲しげに言つた。

親切な心のカミローはバーデイタの様子を氣高く、又禮儀正しい事に心を奪はれた。そして王子が父王の命令でも尙戀人を思ひ切る事が出來ない程、深く娘を愛してゐる事を見て取り、相思の二人を助けてやらうと考へ、それと同時に心の中に秘めてゐた豫てよりの計畫も實行しようと思つた。

カミローはシシリヤ王リオンチーズが心から後悔してゐる事を前から聞いて知つてゐた。今でこそポリクシニーズの寵臣になつてはゐるが、今一度前王に逢ひ又自分の生家にも歸り度いと言ふ願を止める事が出來なかつた。そこでカロミーは相思の二人へ、自分と共にシシリヤの宮廷へ行く事を勧め、其處へ行けばシシリヤ王に願つて、ポリクシニーズが良く思案した末二人を赦し、結婚を許可するまで保護してもらはうと約束した。

此の申出に二人は非常に喜んで賛成した。そしてシシリヤへ落ち延びる萬端の準備をしてゐた。カロミーは、羊飼の老人にも同行する事を許した。

羊飼はバーデイタの残りの寶石や赤ん坊の時の着物や、外套についてゐた紙片まで持つて行つた。



愉快な航海の後、四人は無事にリオンチーズの宮殿に到着した。死んだハーマイオネや失つた子供達に就て今迄歎いてゐたりオンチーズは、非常に喜んでカミローを迎へ、王子フロリゼルを鄭重に歓待した。フロリゼルが自分の妃だと言つてバーデイタを王に紹介した時には、王は凡ての注意はバーデイタに奪はれた。然も亡くなつた自分の妃、ハーマイオネも生き寫しなのを見て、王の歎きは亦新たになつた。然し自分が王女をあのように酷く殺してしまはなかつたならば、きつこ今頃はこんなに美しい娘もなつてゐたらうにと思ひながら、フロリゼルに言つた。「それから、又私は貴殿の勇敢なお父様との交際や友情をも失つたのであるが、今ではも一度お目にかゝりたくてたまらぬのです。」

羊飼の老人は王がバーテイダに非常な注意をはらつた事や、その一人の娘を生れたばかりの時分に棄てた事を聞くに及び、バーデイタが棄て、あつた時の様子や、又寶石其他高貴の生れらしい證據品のあつた事や、自分が拾つた時なごを思ひ合せて見るに、何うしてもバーデイタこそ、王の棄てたと言ふ嬰兒と同じだと思はない譯に行かなくなつた。

羊飼の老人は、フロリゼルやバーデイタや、又カミローや忠義なポーライナが居る所で、王に嬰兒を見附けた時の有様や、アンチゴラスが熊に殺されて死んだ事情等を物語つた。老人が示した

高價な外套は、王妃が嬰兒を包んでゐたのと同じ物である事、寶石も王妃が嬰兒の首に結んでやつたものである事等を、ポーライナはよく覺てゐた。更に老人が取り出した紙片を見てポーライナは、夫の筆蹟に違ひないと言つた。そこでバーデイタが王の一人娘である事はもう疑ふ餘地がなくなつた。併し夫が死んだと言ふ悲しみと、神託が本當になつて王の嗣となる可き、行衛の知れなかつた王女が見附かつたと言ふ喜びとの境に立つたポーライナの心はこんなであつたらう。王はバーデイタが紛ふ方なき王女である事を知つた時、こんなに立派になつた我が子を見る事も出来ないで死んでしまつた王妃を憶ひ出して、悲しみに胸ふさがり、長い間言葉さへ出なかつた。が、唯「お、お前のお母さんは、お前のお母さんは」と言つたのみであつた。

ポーライナは此の悲喜交々たる場合に、急に王に向つて、妾は最近伊太利の大藝術家ジュリオ、ロマノに、新たに塑像を作らせました。その像は王妃様に大層良く似てゐますから、若し陛下がそれを御覧になるために家まで御臨幸になるならば、きつと亡くなられた王妃様であると思はれるに違ひありませんと言つた。そこで皆は打揃つて見に行つた。王は王妃の像を見たくてたまらず、バーデイタは生れてまだ見た事のない母上が、こんな人であつたかと非常に心を躍らせてゐた。

ポーライナが有名な塑像を納めてある室の幕を引くに、全くハーマイオネ其人としか思へない程



よく似てゐたので、王の悲しみは甦つてしばらくは物も得言はず、身動きさへ出来なかつた。

「陛下、お言葉のないのは結構で御座います、深く御感心遊ばした證據で御座いますから。王妃さまによやお似申しておるでは御座いませんか。」

終に王は言つた。「この通りだつた。予が始めて言ひ寄つた時も、あの様な威嚴を以て立つてゐた。併しポーライナよ、ハーマイオネはこの像の様に年を取つちや居なかつた。」

「さう御覽になりますのならば、益々彫刻家の技術が偉れてゐるので御座います。今迄生きてゐるやつたらと言ふお姿を現しましたのですから。併しもう私は幕を閉ぢなければなりません、さもないとお氣のせいで動く様におほしめすまいけませんから」

「幕を引くな。おれはいつそ死んでしまひ度い。御覽！カミロー、全く息をしてゐる様に見ゐるぢやないか。あの眼が動く様に見ゐる。」

「私はもう幕を引かなくてはなりません。陛下は餘り感動してゐらつしやいますから。今に生きてゐらつしやるなごとおつしやり兼ねませんもの。」

「お、ポーライナよ。この上二十年も斯う思はせておいてくれ……が、何うも像の方から微風そよかぜが来る様に思ふ。どんな名人だつて息まで作り着ける事が出来るだらうか。笑つて呉れるな。接吻

をするから。」

「陛下、お待ち遊ばせ。お口元の彩具はまだ乾いて居りません。繪具でお口が汚れます。幕を引きませう。」

「いや、向ふ二十年間は幕を引いてはならん。」

此の比ない、母の像の下に跪いて、黙つたま、尊敬の念を以て打仰いでゐたバーディタは、言つた。「いつまでも、斯うしたま、で、お母さんを見てゐたい。」

ポーライナは王に言つた。「感動をおとめにならねば、私は幕を引きませう。で御座いませんと、もつと驚愕遊ばす事が起ります。それを御承知ならば、わたくしはあの像を本當に動かせて、一段を降りてお手を取らせませんが、よう御座いますか。併しさう致しましたら、妾が魔法を使ふなどとおほし召すでせうが、勿論そんなものでは御座いません。」

「何、お前があれを動かせるつて？何う言ふ事をさせても予は喜んで見よう。何を言はせても予は喜んで聞かう。動かせる位なら、物を言はず事も出来るに相違ない。」

そこでポーライナは、豫め用意して置いた靜かな嚴な音楽を始める様に命じた。その時一同の非常に驚いた事には、彫像が臺から降りて来て、王を抱擁しその上話を始めて、王と新らしく見附



かつた愛兒バーデイタミの祝福を祈つた。

なにも王の首にすがり付き、王とその愛兒ミを祝福したとて決して不思議ではない。決して驚くには及ばない。此の彫像こそ眞の生きたハーマイオネ其人であつたからである。

ポーライナは當時王妃の命を救ふ唯一の方法は、これより他に無いと思つたので死んだミ偽を傳へたのであつた。その時以來ハーマイオネは氣立の佳いポーライナと一緒に、バーデイタが生きてゐたと言ふ事が知れる迄、決して王に知らせないつもりで暮してゐたのである。王が自分に對して與へた迫害は、盡く許してゐたが幼兒に對する殘酷な行をば許す事が出来なかつたからである。

死んだミ思つてゐた妃が生き返り、亡くなつたと思つた娘が見附かつたので、長い間歎いてゐたリオンチーズも、此上ない幸福な身となつた。

國中到る所で聞かれるのは祝賀ミ愛に満ちた言葉のみであつた。斯くして喜びに溢れた王と王妃ミは、賤しい境遇にゐた王女を、愛して呉れた事をフロリゼルに感謝した。又王女を助け育てた羊飼の老人をもねぎらつた。カミローミポーライナも忠實に努めてゐた事が、こんなに良い終りを告げる時まで生きてゐたのを、互に喜び合つた。

此の不思議な思ひも寄らぬ喜びは、ボヘミヤ王ボリクシニーズがこの時宮殿へやつて來たので、

全く申し分のないものとなつた。

ボリクシニーズが、その王子ミカミローとがゐない事に氣が附いた時、カミローが豫てシリヤへ歸り度いと思つてゐた事を知つてゐたので、きつと彼方へ逃げたに違ひ無いと思ひ、全速力で追つかけて來たのであつた。そして丁度リオンチーズの一生の中で一番幸福な時に、出會ふ事となつたのである。

ボリクシニーズも共々に喜んだ。リオンチーズから受けた無實の嫉妬に對してその友を許し、二人共もこの子供時代の様な厚い友情を以て親交を結んだ。そしてもう、ボリクシニーズも王子ミバーデイタとの結婚に反對をする恐れもなくなつた。バーデイタはもう「羊飼餓鬼」ではなくて、シリヤ王の嗣となつてゐたからである。

斯くして長い間辛抱強く耐へ忍んで來た王妃の徳は報ひられた。此の貞淑な王妃はリオンチーズやバーデイタと共に、母の中の母、王妃中の王妃ミして、最も幸福な月日を送つた。

### から騒ぎ

メシナミ言ふ所の宮殿に、ヒーロオミ言ひ、ベアトリスと言ふ二人の令嬢が住んでゐた。ヒーロ



オは大守リオナトの娘であり。ベアトリスはその姪であつた。

ベアトリスは陽氣な性質であつたので、いつも快活な悪戯をして、物靜かな性質の従妹ヒーロオの、氣を晴らさせるのが好きであつた。氣輕なベアトリスにこつては、何んな事が起つても、唯樂しく面白く思はれるばかりであつた。

この話が始まる時分の事であつた。丁度その時終つた戦争からの歸り路に、メシナを通り合せた軍隊中の身分の高い青年達が、リオナトを訪問した。青年達はこの戦争で勇敢に戦つて武名を擧げた。その中には、アラゴン王子のドン、ペトロや、その友達、フロレンスの貴族クラウディオや、そしてバドウアの貴族で、亂暴な然も頓智のあるベネディックも一緒に來てゐた。

このお客達は前にもメシナへ來た事があつたので、大守は懇ろに客をもてなし青年達を古い友達や知人として、娘や姪にひきあはせた。

ベネディックは室に入るや否や、もうリオナトや王子達と元氣よく話し始めた。何んな談話の時にも仲間外れにされてゐる事の嫌ひなベアトリスは、ベネディックを遮つて、

「ベネディックさま、あなたがいくらお喋りになつても、誰も聞いてゐる人なんかありませんよ」

と言ふと、ベネディックもベアトリスに劣らぬお喋り屋ではあつたが、此の傍若無人な挨拶に

不快を催し、身分の佳い令嬢が斯う多辯なのはあまり見つこもよくないと思つた。そして此の前メシナへ來た時にも、ベアトリスがいつも自分にばかり戯談を仕掛けた事などを思ひ出した。人をかからふ事の好きな人程、他人から揶揄はれる事を嫌がるものである。ベネディックもベアトリスもこの例に洩れなかつた。それで、此の前の時も、此の二人の鋭い皮肉屋が出會ふ度に、二人は恐ろしい揶揄戦をやつたので、其度毎に二人は不快な別れをするのが常であつた。そんな譯で今ベアトリスが、誰もあなたの言つてる事なんか聞いてやしないと言つて、彼の話を中斷した時、ベネディックは今迄この婦人がゐた事に氣が附かなかつた様な風を裝つて、

「やあ、意張り屋の令嬢、あなたはまだ生きてゐらつしやつたのですか。」

と酬ひ、又もや戦争をおつばじめて、長い間やかましい議論の花を咲かせた。その間にベアトリスは、ベネディックが今度の戦争で非常な勇氣を示して稱讚された事をよく知つてはゐるが、あなたの殺した位の人間なら私が皆食べて見せようと言ひ、又王子がベネディックのこゝを、

「王子様の道化役」

— 61 —  
だと言つた。此の一言はベアトリスが前に言つたどの言葉よりも深く、ベネディックの胸にこたへた。前にあなたが殺した位の人間なら私が皆食べて見せようと言つて、彼を臆病者だと言つたのに



對しては、自分が勇敢である事を知つてゐたので少しも氣に止めなかつたが、道化役と罵られた事程此の皮肉屋にこつて腹の立つ事はなかつた。皮肉といふものは時として當りすぎる事があるからである。そこでベネディックは、ベアトリスが自分の事を「王子様の道化役」こ言つた時から、全くベアトリスを惡む様になつた。

優やかなヒーロオは高貴なお客達の前では黙つてゐた。クラウディオが、しばらく見なかつた間にヒーロオが急に美しくなつたのを注意深く見守り、令嬢の立派な姿を（令嬢は非常に美しかつた）見されてゐた間に、王子は滑稽なベネディックミベアトリスとの對話を聞いて非常に喜んでゐた。そしてリオナトに囁いた。

「仲々快活な婦人だね。ベネディックには持つて來いの妻君だ」

「殿下、さうしまして、若し二人が結婚して一週間も居たなら、きつこお互に喋り過ぎて氣狂になつてしまふでせう」

と斯様にリオナトは此の二人が氣の合つた夫婦にはなれないと思つてゐたが、王子は此の二人の鋭い皮肉屋がお互につり合つてゐると言ふ考へを捨てる事が出来なかつた。

王子がクラウディオと一緒に宮殿から歸つてから後、王子はベネディックミベアトリスとの結婚

の事を考へてゐたばかりでなく、あの集りの中に、外にも結婚の事を考へてゐた者があつた事を知つた。クラウディオは、その心の内に何を畫いておるかこ言ふ事が王子にはつきりと判る様な風にヒーロオの事許りを話した。王子はそれを喜んで、クラウディオに、

「お前はヒーロオを愛してゐるのかね」

こ言ふこ、

「お、殿下、私が此の前メシナへ参りました時には、好であれど戀してゐる暇が無いと言つた風の、軍人風の眼で令嬢を見てゐましたが、今度は幸福な平和時代なので、今迄は戦争の考へで埋まつてゐた場所へ、優しい微妙な考へが群がつて來ました。そしてその考へは凡て私に、若いヒーロオの美しくしさや、自分が前から令嬢を愛する事等を想ひ起させるのです。」

ミクラウディオのヒーロオに對する戀の告白を聞いて王子は、すぐ様リオナトに、クラウディオを女婚とする様に頼んだ。リオナトは此申出に賛成し、王子は優しいヒーロオをたやすく説きつけて、優れた才能を持ち、立派な人格のある貴族クラウディオの申込を聞き入れさせた。そしてクラウディオは、親切な王子の助けに依つて、リオナトを説いてすぐにヒーロオとの結婚式の日取を決めた。



クラウディオが美しくい令嬢と結婚するには、もう數日を待てばいゝのであつたが、若い人に有り勝ちな、何事に依らず自分が決心してゐる事件が終るまでは、非常に待遠しいものである。クラウディオもその間が非常に長いと言つて不平をこぼした。そこで王子はその時間を短かく思はせるために、愉快的な遊びをして、ベネディックとベアトリスがお互に戀に落ちるやうな、うまい計畫をしようぢやないかと言ひ出した。クラウディオは非常に賛成して王子の思ひ附きに仲間入りした。そしてリオナトも援助をする約束をなし、ヒーロオさへも自分の従妹に良い夫をすゝめる位の優しい仕事ならばいくらでも賛成しようと言つた。

王子が考へ付いた計畫と言ふのは、男子達はベネディックにベアトリスが戀してゐると信じさせ又ヒーロオはベアトリスにベネディックが戀してゐる言ひさせようと言ふのであつた。

王子、リオナトとクラウディオの三人は、先づその計畫に取りかかり、佳い機會を覗つてゐたが、丁度ベネディックが四阿ちやまに腰掛けて靜かに讀書してゐた時、王子と助手達は四阿の蔭の木立の中で、皆の話しがすつかりベネディックに洩れ聞える程近くに座つて、色々無駄話をした末、王子は言つた。

「ね、リオナトさん、此の間あなたが言つてましたね、あなたの姪のベアトリスがベネディックを戀してゐると。あの娘が男を戀しようなきゝは思ひもよりませなんだがね。」  
と言ふと

「え、私もその通りで御座りますよ。殿下、表面上の様子では嫌つてゐるとしか見へないベネディックに、あんなに惚れてゐる言ふのは全く不思議でなりません。」

「リオナトが答へた。クラウディオはこれに合槌を打つて、ヒーロオの言つた話に依るとベアトリスは、ベネディックが若しあの人を愛さなかつたら、きつと悶え死んでしまふだらうと思はれる位、熱心にベネディックを愛してゐるさうだと言ひ、リオナトとクラウディオとは、ベネディックは凡ての婦人達、特にベアトリスに對して嘲笑ばかりしてゐる男の事だからこゝても駄目だらうと言つた。」

王子は皆がベアトリスに非常に同情しておる様に、聞えよがしに言つた。

「ベネディックに此の事を話した方が良くはないだらうか。」

「何う言ふ譯です。そんな事を言へばあの男はきつと擲擧つて、あの可愛想な婦人をもつとひどく苦しめるでせうよ。」

クラウディオが言つた。王子は、



「若しあの男がそんな事でもすれば、首を締めて殺しても佳い位だ。ベアトリスは秀でた立派な婦人であり、ベネディックに戀しておる事を除けば、萬事に優れた智慧を持つておる」

と言つた後、友達に向ふへ歩いて行く合圖をして、今洩れ聞いた事をベネディックに熟考させるために、四阿に残しておいた。

ベネディックはこの會話を非常な熱心を以て聞いてゐた。ベアトリスが自分を戀してゐると聞いた時に獨り言を言つた。

「そんな事が有り得るだらうか？何うしてそんな風向きになつたのだらう。」

一同が行つて終つたあとで、一人でこんな風に考へ始めた。

「これは別に魂膽のある筈がない。皆は非常に眞面目だつたし、ヒーロオからその事を聞いたのだと言ふし、令嬢に同情して居つた様でもあつた。俺に戀をするつて、そしてその戀に報ひねばならんて！俺は結婚する事などは考へてもなかつたが、俺も一生獨身で送るのだと言つた時にも結婚せなければならぬ様になるなどは考へて居なかつた。皆は令嬢は徳があり美しいと言つた。そしてその通りだ。そして俺に戀なんぞする事を除けば仲々賢い。なに、あの女の戯談の事などは大した問題ぢやない。あゝ、ベアトリスが今向ふからやつて来る。是は、仲々別嬪だ。何か戀して

ゐる様な兆があるか何うかを探り出してやらう。」

ベアトリスは近寄つて来て、いつもの様に突慥貪に言つた。

「嫌々ながら、あなたに食事を報せに参りました。」

ベネディックは今迄に無い叮嚀な調子で答へて見ようと言ふ様な氣になつて、

「美しいベアトリスさん。誠に御苦勞さま、有難う存じます。」

そして二言三言へらず口を利用してベアトリスが去つた後、ベネディックは令嬢の言つた亂暴な言葉の内に、親切な心が隠されてゐるのを見たと思つた。そして大聲で言つた。

「若し、自分があの人を庇つてやらなければ自分は悪黨だ。若しあの人を愛さなければおれは猶太人だ。さあ行つてあの人を寫眞を貰つて來よう。」

斯う言ふ風にこの紳士は自分のために擴けられてゐた網にうまくかゝつた。今度はヒーロオがベアトリスを揶揄ふ番である。そこでこの目的を果たすためにヒーロオは、二人の侍女アースラママアガレットとを呼びにやつた。そしてママアガレットに言つた。

「ねママアガレット。お前客間へ走つて行つて頂戴。あすこにベアトリスが王子様やクラウディオと話をしてゐるだらうから。そして耳に嘯いて言ふんだよ。私ミアースラとが果樹園の中を歩なき



「から、あなたの事ばかりを話し合つて居らつしやいます。そしてこつそりと、あの太陽に熟れた忍冬まひつらが恩知らずの戀人の様に、日の射すのを遮つてゐる四阿まで来る様に謀らつて頂戴。」

ヒーロオがマーガレットにベアトリスを來させる様に命じたこの四阿は、ベネディックがつい先程まで熱心に噂を聞いてゐたその同じ美しい四阿であつた。

「かしこまりました。きつと直ぐにおつれ申します。」ミマアガレットは答へた。

ヒーロオはアースラを伴つて果樹園の方へ行き

「アースラや、ベアトリスが來たなら、私達はこの小路を行つたり來たりして、ベネディックの事ばかりを話さなければいけないよ。そして私があの人の名を言つたら、お前はあの人を何の男よりも偉いと言ふ風に出来るだけ褒めるんだよ。私はベネディックが何んなにベアトリスを戀してゐるか言ふ事を話すから。さあ始めよう。向ふにベアトリスが、たけりの様に身を屈めて、私達の話を聞きにやつて來る様だから。」

やがて二人は始めた。ヒーロオはアースラが前に何か言つたのに答へる様な風に、

「いゝえ、本當だよアースラ。あの方はあんまり横柄過ぎるよ。然し内心では岩に住んでゐる野飼の鳥の様に内氣で全く近付けない人よ。」

「でもベネディック様が、ベアトリス様に心から戀してらつしやる言ふのは本當でせうか」

「王子様もさうおつしやるし、私の夫クラウディオもさう言ふのよ。そして私にその事をベアトリスに告げろつておつしやるのだけれど、私は皆様にさう言つたの。若し皆がベネディックさんを愛するのなら、ベアトリスにそれを知らせてはなりませんね。」

「本當にさうで御座います。あの方はきつと戀してゐる言ふ事を知つたら、擲擲つてしまひなさるでせうから、知らせるのは却つて良くないでせう。」  
とアースラが言ふと。

「本當の事を言へば、私はベネディックさんの様に賢くて、品があつて若くて立派な姿をしてゐる男の方はこれ迄に見た事がないわ。それにあの方はベネディックさんの悪口ばかり言ふのよ。」

「さうです。さうです。あんなに咎め立てするのはあんまり褒めたものでもありませんね。」

「さうだとも。然し誰があの人にそんな事を言へるものかね。若し私がそんな事を話したら、屹度私を馬鹿にしてしまふだらうよ。」

「いゝえ、そんな事はありますまい。あの御方だつてベネディックさんの様な、あんな立派な紳士をはねつけなざる程物の見さかいが付かない言ふ筈がありませんもの。」



「ベネディックさんは名聲赫々たる勇士だよ。本當に私の主人のクラウディオを除いたなら、イタリイ中にあんな人は又もあるまいだらうよ。」

そこでヒーロオは召使に話を變へる様に合圖をすると、アースラは、

「お姫さまあなたの御結婚は何時で御座います。」

「ご問ひ、ヒーロオは明日クラウディオと結婚する事を告げ。これから一緒に行つて、明日着る着物を新らしい服の中から選ぶ相談相手になつてくれと頼んだ。此の會話を息をこらして熱心に聞いてゐたベアトリスは、二人が去つた時叫んで言つた。

「私の耳に火を放けられた様だ。そんな事が本當だらうか、輕蔑や嘲笑は逃けて行け、處女の誇りよ、左様なら。ベネディックが私を戀するつて私はそれに報ひよう。私の荒々しい心をあなたの愛する手で和けて下さい。」

此の二人の敵同士が心を改めて、新たに親しい友達となり、又氣輕な王子の面白い計略に欺かれて、二人が戀し合ふ様になつてから始めて出會つた所を見るなごは、大層愉快な事だつたに異ひない。然し今はヒーロオの運命が急に逆轉した事を語らなければならぬ。明日は結婚式だと言ふその日、ヒーロオとその善良な父に新らしい悲しみが起つたのである。

王子には母の異ふ弟があり、兄の王子と一緒にメシナへ來てゐた。此の弟は（名前はドン、ジョンと言つた）陰氣な、いつも不平ばかり言つてゐて、常に悪事を巧らむ事にばかり苦心してゐる様な男であつた。此の弟は兄の王子を憎み、王子の友達だからと言ふのでクラウディオをも憎んでゐた。そこで、唯クラウディオと王子とを不幸に陥れてしまふ言ふよこしまな考へから、ヒーロオとクラウディオの結婚を妨げようと思ひ出した。弟は今度の結婚に就ては王子もクラウディオ自身と同じ様に、熱心になつてゐる言ふ事を知つてゐたからである。そして此のよこしまな目的を果たすために、自分と同じ様に心の曲つたボラチオと言ふ男を、澤山の褒美をやるからと言つて雇ひ入れた。此のボラチオはヒーロオの召使マーガレットに交際を求めてゐたが、その事を知つてゐたドン、ジョンは、ボラチオに命じて、マーガレットにその晩ヒーロオが寢てしまつた時分その寢室の窓から顔を出して、ボラチオに話をすると約束させた。そしてクラウディオにその女がヒーロオであると思はしめるために、ヒーロオの服を着て出る様に命じた。さう信ぜしめようと言ふのがこの悪い計畫の目的であつた。

ドン、ジョンは一方、王子もクラウディオの所へ行き、ヒーロオは浮氣な女で、眞夜中に自分の寢室の窓から他の男と話をしたりなごしてゐる言つた。しかもそれが結婚すると言ふ前日に起つ



「た事なのである。だから自分と一緒に今晚、ヒーロオが窓から男と話すのがよく聞える所まで行かうと申し出た。二人は賛成して弟と一緒に行く事にした。そしてクラウディオは、

「若し今晚私が見付けたならば私はもう結婚しなくても構はない。そして明日結婚する筈になつてゐる式場で、あの女に恥をかかせてやらう。」

と断言し、王子も

「私もあの人を得る爲には援助をしてあげたのだから、私も一緒になつて辱かしてやらう。」と言つた。

ドン、ジョンがその晩二人をヒーロオの寢室の側までつれて行つた時、ボラチオが窓の下に立つてゐるのが見えた。そしてマーガレットがヒーロオの窓から身をのぞかせて、ボラチオと話してゐるのも見えた。マーガレットはヒーロオが着てゐたその同じ着物を着てゐたので、王子もクラウディオと共に、それがヒーロオだと信じ切つた。

クラウディオが此の秘密を見破つた時（と思つただけなのであるが）の怒りと言ふものは例へる物もない程であつた。無邪氣なヒーロオに對する愛はすっかり一時に憎みに變つてしまつた。そして前にさう言つた様に明日教會で娘の秘密をあばいてやらうと決心した。王子も、此の高貴なクラ

ウディオと結婚するといふその前の晩に、自分の窓から他の男と話をしたりなどする様なみだらな婦人に對しては、何んなに酷い罰を下しても未だ足りないと思つたので、すぐこれに賛成した。

次の日皆が結婚の式に集つて、クラウディオとヒーロオとが牧師の前に立つてゐた。そしてその牧師が結婚の宣誓をするために前に進み出た時、クラウディオは非常に興奮した句調で無實のヒーロオの罪を述べ立てた。ヒーロオはクラウディオの言ふ思懸けない言葉に吃驚しながら、もの靜かに言つた。

「まあそんな亂暴な事をお言ひになつて、あなたお氣はたしかなのですか」

リオナトは全く驚愕して王子に言つた。

「何故あなたは黙つてゐらつしやるのです」

「何を言へとおつしやるのです。私は親友に價値の無い女と結婚させようとした事を恥かしく思つてゐるのです。リオナトさん、私は名譽にかけて誓ひます。私自身と私の弟と此の哀れなクラウディオとは昨晚眞夜中にヒーロオが自分の寢室の窓から他の男と話してゐたのを實際に見たのです。」

「ベネディックは此の思ひがけない事件を聞いて驚いた。

「まるで結婚式になつてゐるやしない。」



「本當に、お、神様」ご悲痛の極に達したヒーロオが答へた。そして此の不運な婦人は氣絶して倒れた。皆は死んだものと思ひ込んだ。王子とクラウディオは止まつて、ヒーロオが蘇生するか何うかを確かめもせず、又リオナトを絶望の淵に陥れて置きながら、そんな事を一切構はずに教會から出て行つてしまつた。二人共怒りの爲に此んなに無情になつてゐたのである。

ベネディツクはベアトリスと共にヒーロオを助けるために止まつてゐた。

「一體何うしたんだらう」

「なくなつたのでせう」

ご自分の従妹を愛してゐたベアトリスは非常に悲しみながら答へた。そして又従妹の氣高い主義を知つてゐたので、今聞いたヒーロオを陥れるやうな事柄は何一つ信じなかつたが、氣の毒な父はさうではなかつた。父は娘の不名譽を信じた。そして死人の様に倒れてゐる娘の前で、もう二度ご眼を開いて呉れるなと言ひながら、悲歎に暮れて居るのを見るのは如何にも憐れの極であつた。

併し老牧師は賢い人であつて、人間の性質を良く見極めてゐた。そして注意深く令嬢が呪の言葉を聞いてゐた時の顔色を見守つてゐた。その時娘の顔色が急に恥辱のために眞赤になり、やがて天使の様な純白に歸つた事を知つてゐた。令嬢の眼の中には、王子が言つた様な、處女としての神聖

を傷けるやうな悪行があつたごは思へない清い焔が燃えてゐるのを見破つた。それでこの老牧師は悲んでゐる父親に言つた。

「若しこゝに倒れて居られる令嬢が或る惡むべき間違ひのために無實の罪を蒙つておるのでないならば、私を馬鹿とお呼びなさい。私の學問も、私の觀察も、私の年齢も、私の威徳も、又は私の傳道をも凡てを信じて貰はなくても構ひません。」

ヒーロオがやつご息を吹き返した時、牧師は娘に言つた。

「お嬢さん。あなたが疑はれておる對手の男とは誰なのですか」

「あの人は知つてゐて私を責めるのでせうが、私はそんな人は全く知りません。」

さう言つて父親の方を向いて

「お、お父さま、若しもあなたが、私が男ご眞夜中に話をしたごか、又は昨晚誰かご言葉を交したごかいふ證據がありますならば、私を追ひ出し、私を憎み、そして私を弑殺しにして下さつても結構で御座います。」

「王子とクラウディオは何か妙な感違ひをしてゐるに相違ない。」

ご老牧師は言つた。そしてリオナトに勧めてヒーロオが死んだご二人に告げさせた。二人が立去



つた時ヒーロオはまだ氣絶してゐたから、二人は易々それを信するだらうと言つたのみならず、父に獎めて喪服を着させ、娘のために記念碑を建てたり、埋葬の儀式を残らずやるやうに申し添へた。

「そんな事をするに何うなるんです。一體何のためにそんな事をするのです。」

「娘さんが死んだと言ふ事を知らせたならば、問責が憐憫に變るかも知れません。さうなれば良いが、私の望んでゐるのは唯それ丈の事ではありません。自分の悪口のためにヒーロオが死んだといふ事を聞くに、ヒーロオの命と言ふ觀念がクラウディオの想像の中へうまく喰ひ込んで行くでせう。そして若しクラウディオの心の中に愛があつたとすれば、悲しみの情を生じ、例へ自分ではあの問責は眞實であると考へてゐても、あんなにひどく罵らなければよかつたにと悔むでせう。」

ベネティツクも言つた。

「リオナト様。牧師の忠告にお従ひなさい。私は何んなに王子やクラウディオを愛してゐるかは御存じでせうが、それでも私は名譽にかけてこの秘密は他言致しませぬ。」

リオナトは斯ふいふ風に説き付けられ、納得しながら悲しげに言つた。

「私はもう悲しさで心が一ぱいですから、何んな事にも従ひませう。」

親切な牧師はリオナトとヒーロオを慰め勞はる爲に他處へつれて行き、あとにはベアトリスとベネティツクが唯二人残つてゐた。

これが二人きりで會つた最初の會合であつて、友人達が慰みに計畫し、非常に面白い結果を豫想してをつたものであつたが、肝心の友人達はもう苦惱のために氣が轉倒して、その心からは、凡ての愉快な考へは消え去つてしまつてゐる様に思はれた。

ベネティツクの方が先づ口を切つた。

「ベアトリスさん、あなたはさつき泣き續けてゐたのですか。」

「え、これからも未だしばらく泣き續けるでせう。」

「確かに、私はあなたの美しい従妹が間違へられてゐるのだと信じてゐます。」

「若しも誰かが私の従妹の罪を晴らして呉れるなら、私は何んなにでもお禮をしますのにね。」

「さうしたら、そんな友情を示せませうか。私は世界中で一番あなたを愛します。不思議ぢやありませんか。」

「私もあなたと同じ様に、世界中で一番あなたを愛してゐると言ふ事が出来ればよいのですが……然し私を信じないで下さい。と言つて私は嘘を言つてゐるのでもありません。私は告白してゐるの



もなければ、又否定してゐるのでもありません。私は従妹の爲に悲しんでゐるのです。」

「私の劍に誓つて言ひます。あなたは私を愛してゐます。そして私もあなたを愛してゐる。断言します。さあお言ひなさい。あなたの爲なら何でも致しませう。」

「クラウディオを殺して下さい。」

「は、それだけは廣い世界を買つても出来ませぬ。」

ミベネディックは言つた。それは友人のクラウディオを愛してゐたし、又クラウディオが瞞されてゐたのだと信じてゐたからである。

「私の従妹を識り、罵り、辱かしたクラウディオは悪黨ぢやありませんか。お、私が男であればいゝのに……」

「まあお聞きなさい、ベアトリスさん。」

ミベネディックが言つたが、ベアトリスはクラウディオの辯護は少しも聞かうとしなかつた。そして自分の従妹の復讐をして呉れ、強請り續けた。

「窓から外の男ミ話をする位當り前の事です。可愛想なヒーロオさん、あの人は誣ひられてゐるのです。譏られてゐるのです。害なはれてゐるのです。お、私が男であればクラウディオをこの

儘にして置かぬのに。誰か私に代つて男になつて呉れるお友達が欲しい。勇氣は禮儀だとかお世辭なきに代つてしまつたのか。希望を持つ男となる事が出来なければ、悲歎をもつ女として死んでしまひたい。」

「ベアトリスさんお待ちなさい。私はこの手に誓つて、あなたを愛します。」

「私は愛されるなら、あなたの手で誓を立てたりするよりも、その手を何か外の事に使つて下さい。」

「あなたは心から、あのクラウディオがヒーロオを譏つてゐるのだと思つてゐらつしやるのですか。」

「さうですとも、私が考へたり、魂を持つてゐたりするのと同じ様に確かな事です。」

「よろしい私は引き受けました。私はあの男と決闘をさせよう。あなたの御手に接吻して出掛けませう。此の手で私はクラウディオに高い價を拂はせやう。私はあなたにお便りを致しますから私の事を思つて下さい。さあ、行つてあなたの従妹を慰めておあげなさい。」

ベアトリスが斯く心を込めてベネディックを説き、怒氣を含んだ言葉でベネディックの仁侠の精神を動かし、ヒーロオに味方して、親友クラウディオと戦はうとさへ決心させてゐた間に、リオナ



トも亦、娘が受けた恥辱に對して劍を以て答へよき王子とクラウディオに決闘を申込んだ。そして娘はその爲めに歎いて悶死してしまつたと斷言した。然し二人はその父の年や悲歎を氣の毒に思つて

「まあ御老人、我々と戦ふ事だけはやめて下さい。」

ミスカしてをる所へベネディックも亦駈けて来て、クラウディオにヒーロオに與へた恥辱に對して劍を以て答へよき、決闘を申込んだ。クラウディオは互に「ベアトリスがこんな事をさせたのだね」と言ひ合つた。クラウディオは、今の場合決闘に依つて勝負を決するより外に、ヒーロオの無罪を證明するだけの、天に恥ぢない正義を持つてゐなかつたので、ベネディックの挑戦を受けない譯には行かなかつた。

王子とクラウディオが未だベネディックの挑戦に就て話し合つてゐた時、一人の長官がボラチオを罪人として王子の前へつれて来た。ボラチオがドン、ジョンに頼まれてした悪戯の事を仲間の一人と話し合つてゐる所を聞かれてしまつたのであつた。

ボラチオはクラウディオや他の人達の居る前で王子に逐一白狀した。皆がヒーロオに違ひないミ誤解してゐた窓から自分ミ話をしてゐた婦人は、主人の着物を着てゐたマアガレットであつた事を

語つた。クラウディオや王子がヒーロオの無實を信じたのは言ふ迄もない。そして多少疑を抱いてをつても自分の悪事が既に露見した事を知つて、兄の正しい怒りを避けるために、ドン、ジョンがメシナから逃亡したと言ふ事を聞いては最早や少しの疑ふ餘地もなくなつた。

クラウディオの心は自分が誤つてヒーロオを責め、自分の殘酷な罵詈を聞いて憤死したのであると考へて、非常に胸を痛め、自分の愛してゐたヒーロオの幻像が、戀し初めた時と同じ様に美はしく眼に浮んで来た。そして王子から、「今ボラチオから聞いて腸を割られる様な氣はしなかつたか」と尋ねられたのに答へて、「ボラチオが白狀してゐる間自分は毒を吞まされてゐる程に苦しかつた」と言つた。

そこで後悔してクラウディオは、リオナトに向つて、自分が令嬢に與へた侮辱を許して頂きたいと願つた。そして自分が婚約した妻に對する、誤つた罪狀を信じた罰として何んな刑罰を自分に處せられても亡き妻のために喜んで受けようミ約束した。

リオナトが下した刑罰といふのは、娘が死んだ爲め自分の嗣ミなつた、ヒーロオに非常によく似てゐる従妹と明朝結婚をせよと言ふのであつた。クラウディオは老人に對して言つた嚴かな約束を守つて、若しそれが黒人であらうとも、その見知らぬ婦人ミ結婚しようと斷言した。然しクラウデ



イオの心は悲しみに満ち、その夜はリオナトが建てたヒーロオの墓場で、悔恨の涙を流しつゝ泣き明かした。

明くる朝になつて、王子はクラウディオを伴つて教會へ行つた。そこには既に老牧師やリオナトや姪達が第二の結婚式を擧げる爲めに待ち受けてゐた。リオナトはクラウディオに約束の花嫁を引合せた。花嫁はクラウディオに見つからない様に假面をかぶつてゐた。クラウディオは此の面をかぶつた婦人に言つた。

「あなたの御手を下さい。この聖い牧師の前で、若しあなたが結婚して下さいますならば、私はあなたの夫となりませう。」

「私が生きて居りました時分には、あなたの先妻でありました。」と言ひながらこの見知らぬ婦人は覆面を取つた。實は姪ではなくリオナトの本當の娘ヒーロオ自身であつた。死んだと思ひ込んでゐたクラウディオが何んなに喜び驚いたかは大抵想像が出来るだらう。クラウディオは喜びの餘り夢ではないかと自分の眼を疑つた程であつた。王子もこれを見て同じ様に驚きながら叫んだ。

「この方がヒーロオさんですか、ヒーロオさんは死んだ筈ぢやありませんか。」

「然し殿下、誹謗が生きておる間、娘は死んでおりました。」

ミリオナトは言つた。

老牧師は式が終つてから此の奇蹟の様な話を説明しようとして約束して、式を始めようとしてゐた時ベネディックがそれを遮つて、自分も今一緒にベアトリスと結婚したいと言ひ出した。ベアトリスはこの結婚に少し躊躇したので、ベネディックはヒーロオから聞いたのであるが、あなたが自分を非常に戀してゐると言ふ事を楯にとつて要求した。そこで愉快な説明をせなければならなくなつた二人はお互に甘くかつがれて、戀してもゐないのに戀し合つてゐるのだと信じさせられてゐた事、そしてこの出鱈目の戯談から二人が本當の戀人になつてしまつた事なきを知つたが、戯談から出来上つた二人の愛情は、この眞面目な説明でも破られない程に強いものになつてゐた。そしてベネディックは自分で結婚を申込んだからには、世界中がこれに反對して何と言はうとも、聞き入れまいと決心し、樂しげにこの戯談をとりあけてゐた。そしてベアトリスが自分を戀してその爲に死にかかつてゐると聞いたから可愛想になつて、ベアトリスを救つてやる事にしたのだと言ふに、ベアトリスは、自分は非常に説きつけられたので、半ばはベネディックを救ふつもりで承知したのであると抗議した。ベネディックが肺病にかゝつてゐた言ふ事を聞いてゐたからである。そこで二人の才人達は仲直りをしてクラウディオとヒーロオが結婚した後、夫婦になつた。話を終りまですれ



ば、悪計を巧んだ弟のドン、ジョンは、逃げる途中で捕つてメシナへつれ戻された。この陰氣な不平家にまつては、自分の計畫が破れて、メシナで行はれる大宴會の楽しい様子を見るだけでも、充分に強い刑罰であつた。

### お氣に召すまゝ

フランスがまだ封建時代で幾つかの小さな國々（公國とも呼ばれてゐた）に分れ諸侯が支配してゐた時分、その諸侯の一人に、自分の兄である罪のない公爵の領地を奪ひ取り、その兄を追放してしまつた僭主がゐた。

さて、其領地から追放せられた公爵は、忠義な僅かばかりの家來をつれて、アーデンの森に隠れてゐた。そして人の良い公爵は、自分のために親ら進んで逃亡して來た、親切な家來共も暮してゐたが、一方、悪い僭主は公爵や家來達の領地や扶持を横領して益々富裕になつた。併し公爵達は馴れるに従つて次第に、以前の榮華な氣苦勞の多い宮廷の生活よりも、今の氣樂な暮しの方が餘程良い様に思はれ、一同は此處で英國に昔住んでゐたと言ふロビン、フツドのやうな生活をしてゐた。そして毎日宮廷から貴公子達が此の森へやつて來て、時の經つのも忘れて遊び戯れる様は、黄金時

代に生きてゐた人の様にも思はれ、若者達は夏になるに大きな森の木の葉蔭に寝轉んで、野鹿の面白い遊戯を見て暮した。そして若者達は、前からこの森に住んでゐたらしい斑のある鹿を好いてゐたので、鹿肉の御馳走を食べるために、無理に殺してしまふといふ様な事は、可愛想に思つてしなかつた。併し冬の寒い風が吹き初めて、自分の不幸な運命をひしく、己身に感じさせる時なども、公爵はぢつと我慢して言つた。

「予の體に吹きつける寒風は、予には眞の顧問官だ。風は追従をせず、予に有りの儘の状態を知らせて呉れる。風は鋭く身を刺すが、それでもあの無道なものや恩知らずなどよりはまだましぢや。人々は不仕合と言ふ事を厭ふ様だが、逆境からも滋味は味はれる。丁度高貴な藥に使ふ寶石が、毒ある醜い蝦蟆がまの頭から取られるやうなものぢや。」

と斯う言ふ風に我慢強い公爵は自分が見る凡てのものから、立派な教訓を見出しその教訓に従つて生活し、皆で獵をして生物を殺したことなどを後悔した。公爵にまつては木々は皆物を言ひ、流るゝ小川は書物であり、石や岩が説法をする。萬事萬物皆良い教訓である。

此の追放された公爵にはロザリンドと呼ぶ一人娘がゐた。僭主フレデリック公爵は兄公爵を追放した時にも、その娘だけは自分の娘シリヤの友達にするために、宮廷に留めて置いた。此の二人の



令嬢の間には、父親同士が不和になつても、その爲に少しも妨げられなかつた程堅い友情があつた。シリヤは自分の父親がロザリンドの父を追放した不義の償として、ロザリンドに出来る限りの親切を盡した。ロザリンドが父の追放された事や、自分がそのよこしまな僭主に頼つてゐる事なごを考へて、物思ひに沈む時には何時も、シリヤは一生懸命になつて慰め勞はつた。

或日の事、シリヤは平常の様に親切にロザリンドに、

「ね、お願ひだから、ロザリンドさん、陽氣におなりなさいね。」

と言つてゐる時、一人の使がやつて来て、今相撲が始まりかけてゐるから、若しお前達が見度いと思ふなら、すぐ宮殿の前の廣場まで来るやうにとの公爵の傳言を傳へた。シリヤはロザリンドが喜ぶだらうと思つたので、見に行く事に決めた。

今でこそ相撲は田舎の道化者しかやらないだらうが、其の時分には宮廷でもよくやつたもので、美しい貴婦人や王女達も觀覽したものである。やがてシリヤとロザリンドがこの相撲を見に行つた。二人の勝負はきつこ悲惨な光景に終るだらうと思つた。と言ふのは、長い間相撲の修業をやり、今迄にも澤山な人三勝負をして相手を殺した事のある、大きな強い男と、未だ年齒もゆかぬ相撲をあまりこつた事のない、青年三が、今や勝負を始めやうこしてゐたからである。そして見物人も皆

あんな男とやればきつと殺されてしまふだらうと思つてゐた。

公爵はシリヤとロザリンドとが來たのを見て言つた。

「お、娘と姪か、そつこ來てゐて相撲を見ようこいふのか。面白くもなからうぜ、あまり相手が不釣合すぎるから。氣の毒だからあの青年を説諭して止めさせたいものだ。お前たちからも説得して見たらよからう。」

二人は此の慈悲深い役目を爲すことを非常に喜んだ。最初シリヤが此の勝負を思ひ止まる様にこそ若者に言ひ、續いてロザリンドも同じ様に親切にすゝめた。二人が非常に情深く、今始めやうこしてゐる勝負の危険な事を諄々と説いたのだが、その優しい言葉に従はうこせず、若者は却つて此んな立派な貴婦人達の眼の前で、自分の勇氣を示して名を挙げやうこ決心した。若者は、二人が一層彼を哀れに思つた程靜かに町重にシリヤとロザリンドの懇談を次のやうに言つて斷つた。

「お姫さまがたの折角のお言葉に背くのは誠に相濟みませんが、どうかその美しい優しいお目でわたくしを後援なすつて、勝負させて見て下さいまし。負けた所が不幸者が、たかが一人恥辱を蒙るに過ぎないのです。殺されたところで、いつそ死にたいと願つてゐる者が、只一人死ぬに止まるのです。友達に迷惑を掛ける事ありません。泣いてくれる友達でもないのですから。世間の損



害にもなりません、てんで無財産なのですから。只世の中に生きてゐるといふだけの男ですから、居なくなりやその空虚ぐらゐは、すぐ優秀な人間な人間で塞いで呉れます。」

やがて相撲の勝負は始つた。シリヤは若者が怪我しない様にと願つた。ロザリンドはそれ以上に願つてゐた。友達もなく、一層死に度いと若者が言つたので、ロザリンドは自分の身の上と同じ様に不幸である事を考へて、非常に若者に同情した。若者が相撲をこつておる間のロザリンドの心配は非常なもので、全く此の時戀に落ちてゐたと言つてもよい位であつた。

美しい貴婦人達が若者に親切を示したので、若者は急に元氣付き力が増して、人間業とは思へない事を行ひ、遂に相手を見事に投げつけた。相手はしばらくは物も言はず身動きも出来なかつた程怪我してゐた。

フレデリック公爵は見知らぬ若者が非凡の勇氣と技倆とを示したので非常に喜び自分の部下にしようと思つて、その名前を家系を尋ねた。

若者は名をオオランダと言ひ、ローランド、ド、ボイス卿の末子であるに答へた。

オオランダの父、ローランド、ド、ボイス卿は數年前に死んだが、生きてゐた時は、前公爵の忠臣であり親友であつた。それで、フレデリックはオオランダが追放した兄の親友の子供である事

を聞いて、勇敢な若者に對する好意は不快に變り非常に不機嫌でその場を立ち去つた。併し公爵は兄の友達の名を聞いた事は嫌つたが、若者の勇氣には全く感心してゐたので、立去る時に、オオランダが誰か他の者の子供であれば良かったと言つた。

ロザリンドは此のお氣に入りの若者が、父の友達の子供であつたのを非常に喜び、シリヤに言つた。

「わたしの父はロザリンド、ド、ボイス卿を愛してゐました。あの若い人をあの方の息子さんだと知つてゐたら、私は泣いてまでも止めて、先刻の様な冒険はさせなかつたでせうに。」

二人は若者の方へ歩み寄り、公爵が急に不快を示したので若者が當惑してゐたのを見て、氣を引き立てる様な親切な言葉を言つた。そしてロザリンドはもう歸らうとした時、勇敢な青年に何かもつと優しい事を言はうと振向いて、首飾を外しながら言つた。

「あなた、さうぞこれを身につけてゐて下さい。今の様な不自由な身の上でなかつたなら、もつと價のある物を上げたいのですけれど。」

二人ぎりになつてから、ロザリンドはオオランダの事ばかりを話し續けたので、シリヤは從妹が美しい若い力士に戀に落ちたのだと悟つた。



「どうして、さう急に戀に落ちてしまつたの。」

「父公爵はあの人のお父様を大層愛してゐましたもの。」

「だからあなたが其息子さんを愛するといふ理屈が立つんですか、そんな風に言へるなら、わたしはあの人を憎まなけりやならんわ。わたしの父があの人のお父さんを憎んでゐたんですもの。けれどわたしオオランドーさんを憎まないわ。」

フレデリックはローランド卿の子供を見て、兄の前公爵が貴族の友達を多く持つてゐた事なごを思ひ出して不快になつてゐた。その上自分の姪が、淑徳並び高い譽められ、またお父さんは佳人だつたなき人々から敬愛されるのを常々から面白からず思つてゐたので、今や公爵の悪心はむらくと湧き起つた。フレデリックは、シリヤミロザリンドとがオオランドーの話をしてゐた時その室に這入つて行つて恐ろしい顔をしてロザリンドに、すぐ此宮殿を立去つて、亡命してゐる父の所へ行つてしまへと命令した。公爵はロザリンドを娘の爲にと思つたればこそ止めて置いたのだごシリヤに言ひ、何んなにシリヤが辯護しても無駄だつた。

「引留めておいて下さいと私がお願ひしたのぢやありませんでした。御自身の御慈悲でなすつた事です。其時分はわたくしは、あの方の價值を知るにはまだ餘りに少さ過ぎました。けれ共今は知

つてゐます。私達は一緒に寝もし、起きもし、習ひもし、遊びもし、食べましたのですもの、何うしても今は離れて暮すこゝは出来ません。」

「あいつはお前などの手に合ふ代物ぢやない。あいつのあの優しさ、あの堪忍強さが頗る愚民共の心を魅するのだ。で、奴等はあいつに同情する。あいつを辯護するなどごはお前は馬鹿だ。お前はあいつがるなくなれば、もつと立派にも美しくも見ゆるのだ。だから黙つてゐろ。一旦言ひ渡した嚴命はもう取消すこゝは出来ぬ。あいつは追放したのだ。」

シリヤは、父を告げただけ説いても、ロザリンドを止める事が出来ないのを知つて、氣高くもロザリンドと一緒に往かうと決心した。そしてその晩父の宮殿を拔出し、家來達と一緒に追放された公爵、即ちロザリンドの父を探ねて、アーデンの森の方へへ行つた。

二人が出發する前、シリヤは今自分達が着てゐる様な立派な着物を着たまゝ、で若い女が旅行する事は危いと考へた。それでシリヤは田舎娘の風をして自分達の身分が判らない様に仕ようと言ひ出した。ロザリンドはそれよりか一人が男の風をした方が、もつと安全だと言つたので二人はすぐさうする事に一致した。ロザリンドの方が脊が高かつたので、田舎の若者の服を着て、シリヤは田舎娘の風をする事になつた。そして二人は兄と妹と言ふ事にして、ロザリンドはガニミードと呼び、



シリヤはアリエナと言ふ名を用ひる事に決めた。

斯う言ふ風に姿を變へ、お金や寶石を用意に身に附けて、二人の美くしい令嬢達は、公爵の國境を越けてすつこく遠くにある、アーデンの森へと長い旅路に上つた。

ロザリンド嬢は（今はもうガニミードと呼ばなければならぬのだが）男の服を着たので男の様な勇氣まで身に備はつた様に思へた。シリヤは、辛い思ひで幾里も幾里も行く間にも、ロザリンドに厚い友情を示したので、新らしく兄になつたロザリンドも、快活な氣分を奮ひ起して、優しい村娘アリエナの大膽な兄である本當のガニミードの様に、その心からの愛に報ひた。

二人が終にアーデンの森に来てからは、もう都合の良い旅宿も、途中で受けた便宜もなくなつてしまつた。道々常に陽氣に面白い話や楽しい言葉で妹を樂ませてゐたガニミードも、今はお腹が減つたのこ、長旅の疲れで弱り果て、アリエナに疲れ切つた事や、もう男の様な氣持に何うしてもなれないで、女のように泣き出したいなどこ白狀した。アリエナも亦、もう歩く事が出来ないと言ひ出した。然しガニミードは又心を取り直して、男は女を弱いものとして慰め勞はるのがその義務であると思ひ出した。そして元氣よささうに妹に言つた。

「さあ元氣におなりよ、アリエナ私達のアーデンの森への旅行ももうすぐすむから。」

然しながら偽りの男らしさや附元氣は、さう長くは續かなかつた。現在アーデンの森には來てゐるが何處に父公爵が居られるのやら判らず、二人の冒險も或は哀れな終りを告げはしないかと思はれた。それはもう二人共全く生氣を失つて、飢の爲に死にさうだつたからである。けれ共幸な事には、二人が疲れ切つて何の希望もなく、殆んど死に類して草の上に坐つてゐた時、一人の田舎男が丁度その路を通りかかつたので、ガニミードは元氣を出して、も一度男の様な調子で話し掛けた。

「おい羊飼さん、どこか休息をさせて、物を食べさせて呉れる所が此の森の中にあるならどうか案内して貰ひ度いものだね。勿論代價を拂ふよ。好意でさうしてくれ、ば格別だが。こゝにゐる若い娘は、私の妹だが旅の疲れでおそろしく弱つて、息も絶え絶えになつてゐるのだ。」

その男は、自分は唯羊飼の召使に過ぎないのみか、主人の家も今では人手に渡らうとしてゐる位だから、何うせ食べられる物こてもないだらうが、まあ一緒に來られるれば出来る丈の待遇はすると答へた。やつと救ひの希望が見え始めたのに元氣付いて、二人はその男について行つた。そしてガニミードとアリエナの二人はその羊飼の家と羊とを買ひ取り、その男を下男として召かゝへる事にした。斯んな事で幸にも小奇麗な小屋が手に入り、食料等も充分にあつたので、公爵が森の何の邊に住んでゐるか、判るまで此處に住む事に決めた。



二人は旅の疲れを休めてゐる間に、此の新らしい生活が氣に入る様になつた。そして本當の羊飼男と羊飼女の様な氣にさへなつてゐたものゝ、時々には自分は以前ロザリンドと言ふ娘であつて、父の友達ローランド卿の息子である勇敢なオオランドーを非常に愛してゐた事なきを思ひ出した。そして戀人のオオランドーこそ、二人が辛い思ひをして通つて來たあの遠い路を距て、彼方にあるとは思つてゐたのだが又何だかやはりこのアーデンの森にゐるらしいと言ふ様な氣になり出した。全く不思議な事にはその通りになつた。

「オオランドーはローランド、ド、ボイス卿の末子であつたが、父は其死ぬる時（オオランドーは極く小さかつたので）長兄のオリバーに頼み、オオランドーに良い教育を施し、古い家名を汚さない程の者に育て上げよと託したのであつた。併しオリバーは餘り良い兄ではなかつた。父の遺言に従つて弟を學校へも入れずに、家に置いて何も教へず放つて置いたが、オオランドーの性質や、心の高潔な所は立派な父によく似てをり、少しも教育は受けなかつたが、注意深く育て上げた若者の様に怜悯に見えた。然るにオリバーは弟の立派な人格と威嚴のある風采とを嫉んで、遂に弟を殺さうと思ひ、そのため人々に色々弟を説きつけさせ、前にも言つた様に澤山の人を殺した事のある名高い力士と勝負をさせる事にしたのであつた。オオランドーが友達も何もない身の上だから、一層

死んだ方がましだと言つたのは、兄が冷酷だつたからである。

悪い兄の陰謀を裏切つて弟が見事に勝つた時には、兄の嫉妬と悪心とは止まる所を知らなかつた。そして遂にオオランドーが寢てゐる時にその室を焼いてしまはうと呪つた。この呪咀を亡き父の忠僕であつて、オオランドーがローランド卿に良く似てゐるので、非常に敬愛してゐた老人が立聞きした。老人は、オオランドーが公爵の宮殿から歸つて來るのを待ち受けてゐて、自分の若主人が非常な危険にゐるので、オオランドーを見るなり激しく焦りながら叫んだ。

「お、優しい若旦那様、お、大事の若様、お、先殿様のお形見さま。なぜあなたはお徳があるんです。なぜさう優しくつて、逞しくつて、勇敢でゐらつしやるんです。なぜ物好きに公爵さまのお抱へ力士なんかを投げ倒す様な馬鹿な事をなさつたのです。あなたの手柄話はもうとうにこつちに聞けて居ります。」

— 95 —  
オオランドーは一體何の事を言つてゐるのか判らなかつたので、何うしたのかと尋ねた。そこで老人は邪見な兄のオリバーが、弟の人望を嫉み、今又公爵の宮殿で勝負に勝つて得た名聲を聞いて、その晩に弟の室に火を放つて、殺してしまはうと計つてゐるのであると物語つた。そして直ぐ様急いでこの危険から脱れる様にと勧めた。その上オオランドーは金を持つてゐない事を知つてゐたの



で、アダムは（良い老人の名であつた）少しばかりの貯金を持つて来て斯う言つた。

「私の手に金が五百クラウンあります。お父様に御奉公して、やつこの事で溜めた金です。齡がいつて足腰が立たなくなつた時の用意にと思つてゐた金です。これを持つてゐらつしやいませ。鴉をさへ不憫がりなさる神様、さうぞこの老人を安心させて下さい。……さ、こゝに金が御座ります。みんな差上げます。お伴をさせて下さいませ、齡はとつても未だ達者でございます。どんな御用だつて、仕事だつて若い者並に勤めますから。」

「お、善良なお爺さん。昔の忠實な奉公人の形見とはお前の事だ。お前は今の世には勿體ない人間だ。とにかく一緒に掛けて、さうしてお前の若い時分の貯へがなくならないうちに、何とか生計の道を捜し當てよう。」

そこで忠僕を敬愛されてゐる若主人とは一緒に出發した。二人は何の道を行けば好いのかも判らず彷徨ふ内、到々アーデンの森にやつて來た。そしてそこで二人は、ガニミードミアリエナが困つたと同じ様に食物がなくなつて難儀した。二人は人の家でもないものかと探し廻つたが到々飢ゑ疲れで氣を失ひさうになつた。アダムは遂に、

「旦那様、もう迎も歩かれませんか。ひもじくて死んでしまひます。」

と言ひながら其處に倒れてしまひ、其處を自分の墓にするつもりで主人に別れを告げた。オオランダは老人がこんな弱つたのを見て、自分の腕に抱き上げ、快ささうな木蔭につれて行つた。

「元氣をお出しよ、アダム爺さん、死ぬなんぞと言ふものぢやないよ。」

オオランダは何か食物はないかと探しに行き、偶然にも公爵達が住んでゐる森の方へ出た。その時公爵は友達等と一緒に食事を始めようとしてゐる所で、公爵は天蓋かのひのそれではなく、或る茂つた大樹の葉蔭の草の上に坐つてゐた。

オオランダは飢のために自暴自棄になつて、劍を抜き武力を以て食物を取らうと決心した。

「ま、待て。もう食ふ事はならぬぞ。俺にその食物が要るんだから。」

と叫んだ。公爵は窮迫のために左様な不敵の行爲をするのか、それとも又まるで作法を辨へて居らぬのかと尋ねた。そこでオオランダは飢え死にさうなのであると答へると、公爵は席に就いて食べよと言つた。オオランダは公爵がそんなに優しく言ふのを聞いて、自分の劍を收め無作法にも食つてはならぬなぞ、嚇した事を恥ぢ赤面しながら言つた。

「失禮してまことに済みませんでした。實は、斯ういふ荒れ果てた森の中の事ですから、萬事が野蠻だらうと思つて、わざと高飛車に出て見たのでした。斯様な森の中の小暗い木蔭で時の過つ



も構はないでお暮しのあなた方にも幸福な日はありましたか。あなた方は嘗ては都にもお住みで、教會堂へ人を集める鐘の音をも聞かれ、歴々の盛宴にも招かれ、あなた方の目蓋から流れる涙をもお拭ひなすつた事があつて、慈悲憐愍の何たるかをも心得ておいでなさるのなら、私は深く只今の無禮を耻入ります。」

「いかにも、お前さんの言ふ通り、私達にも榮華な時代はあつた。今でこそこの荒れ果てた森に住んではゐるが、昔は都會にも住み、又聖い鐘の音が教會堂へ人を寄せるのをも聞き、又歴々の宴會へも招かれ、慈悲が醸した涙を拭つたこともあつた。だから席に就いて何なりと、欲しいと思ふものを取つておあがりなさい。」

「實は一人の可哀想な爺がゐます。全くの忠義な心から疲れた足を引ずつて、わたくしに従つて來た奴です。まづ、彼に——老いゝ飢との二つの苦みで死にかけてゐる彼に——食はせた上でなければ、わたくしは一口だつていたゞきませぬ。」

「ぢや探して來なさい、あなた方が歸つて來なさる迄は、私達は何にも手をつけずに待つてゐよう。」

ミ公爵は答へた。オオランドーは、食物を喰べさす爲に牡鹿が仔を探し廻りでもする様に探しに

行き、すぐアダムを腕に抱いて歸つて來た。公爵は、

「さあさ、其爺さんをこゝへおろして、二人ともおあがりなさい。」

こ言ひ、皆で老人に物を喰べさせ氣を引き立てたので、老人も氣を取戻して、元の様に丈夫になり元氣付いた。

「公爵はオオランドーの身分を尋ねた。そしてかれが自分の親友ローランド卿の末子である事を知り、自分の部下とした。オオランドーと忠僕とは公爵と一緒に森で暮す事となつた。」

オオランドーが森へ來たのは、ガニミードとアリエナが羊飼の小舎に來て（前にも言つた様に）その小屋を買つてから數日と経たない頃であつた。

ガニミードとアリエナとは、その森の木々にロザリンドの名が刻み付けられ、そこにロザリンドに宛てた戀の小唄が結んであるのを見付けて非常に驚いた。そしてこれは一體何うした事だらうと森を歩いてゐる時に、二人は偶然にもオオランドーに出會ひ、ロザリンドの與へた首飾をオオランドーが今も尙首に掛けてゐるのを見た。

— 99 —  
オオランドーはこのガニミードが彼の氣高い謙遜と寵愛とによつて、自分の心を捕へその爲に自分が終日その名を木に刻み付け、その美しくしさを讃へる戀唄を作つてゐる、あの美しいロザリン



ドであることは夢にも知らなかつた。が、この美しい羊飼の若者の優雅な様子が入つたので、話をし始めた。オオランドーはガニミードが愛するロザリンドに良く似てゐることは思つたが、この若者にはあの令嬢の様な威厳のある舉措が少しも見えなかつた。ガニミードは幼い時分に、男の子や殿方の間で常に見てゐた様な、無遠慮な態度を真似て、随分意地悪や戯談をまぜて或戀人の話をオオランドーに聞かせたからである。『この森の中に誰かゝゐて、若木の幹を削つて「ロザリンド」を言ふ名を刻み付ける男がある。山楯に戀歌を書いて懸けて置いたり、木苺に哀れつほい文句をぶらさけたりしてゐる。これもこれもロザリンドといふ女を賞讃してゐるまさあ。あんな事をする男に出會つたら、一番意見してやらうと思ふんでさ。戀わづらひを治す爲にね。』

オオランドーは自分が、あなたが今話してゐるその男であると白状し、ガニミードにその意見とやらを言つて呉れど頼んだが、ガニミードが與へる治療法といふのはオオランドーが毎日、ガニミードとその妹アリエナミが住んでゐる小屋へ來なければならぬと言ふのであつた。そして言つた。「それから、私がロザリンドの様な姿になるから、あなたもロザリンドにすると同じ様な風に私を口説かなけりやいけない。それで私は氣まぐれな婦人達はその戀人にする様な勝手放題な事をするさ、遂にはあなたはそれで、もう戀なんぞは馬鹿らしくなるやうになるんです。それが私の戀の

治療法なんです。」

オオランドーは此の治療法を大して信用はしなかつたが、毎日ガニミードの小屋へ來て、戀人遊びをしようと約束した。そして毎日オオランドーはガニミードとアリエナを訪問し、羊飼のガニミードをロザリンドと呼んだ。そして毎日若い人達が婦人と話す時に好んで使ふ、美しい言葉や詔ふ様な話をした。併しオオランドーがロザリンドに對する戀わづらひを、少しでも良くした様な兆候は見えなかつた。

オオランドーは（ガニミードこそ本當のロザリンドであるとは夢にも知らなかつたので）此んな事は皆根のない遊戯だとは思つてゐたけれど、調子に乗つて思ふ存分に自分の心にある愛情の凡てを語つた。それで、此の立派な戀の言葉が戀してゐる當人に語られてゐる言ふ、秘密を知つて一人悦んでゐたガニミードも、自分の空想が満されるのでオオランドーと同じやうに喜んだ。

斯んな風に若い人達は楽しい月日を送つた。人の良いアリエナは、そんな風に、ガニミードが愉快にしてゐるのを見て、馬鹿氣た戀遊びを勝手に續けさせて置き、オオランドーから聞いて判つた森の中の公爵の住家へ行つて、早くロザリンドとしてその父に面會するやうにこは獎めなかつた。或る日ガニミードは公爵に出會つた。そしてしばらく話をした。その時公爵はガニミードにお前の



先祖は誰だぞ尋ねた。ガニミードはあなたと同じ様な好い身分だと言つたので、公爵は微笑した。この羊飼が公爵の家の者だとは思つてもゐなかつたから。ガニミードは自分の父が、丈夫で又幸福さうに見えたので満足して、凡てを打明けるのは二三日延ばす事にした。

或る朝オオランドーは、ガニミードを訪問しようとして行く途中で、一人の男が地上に倒れてゐるのを見付けた。その首には大きな青い蛇が巻きついてゐたがオオランドーが近づくのを見て草叢の方へ逃げ込んでしまつた。オオランドーが近寄つて見ると又そこには雌獅子が蹲まつて、頭を地につけて獲物を狙ふ猫の様に、眠つてる男が起きるのを待つてゐた。(獅子は眠つたり死んだりしてゐる者は決して食はないと言ふ話である) 丁度オオランドーは神様のおほしめしで、蛇と獅子との危険にゐる男を助ける爲に送られたかの様であつた。そしてオオランドーがこの二重の危険の間に眠つてゐた男の顔を見た時、それが自分を酷くいじめ、その上火を放つて焼殺さうとまでした兄のオリバーであるのに氣が付いた。それでオオランドーはよつほぎこの儘兄を飢えた獅子の餌食に残して置かうかとも考へたが、兄弟の愛情と彼の良い性質とが兄に對する最切の怒りよりも強くなり、遂に劍を抜いて獅子と戦つて殺し毒蛇と獅子との危険から兄の命を救つた。がオオランドーは獅子と闘つてゐる間にその鋭い爪で、片腕を引裂かれた。

オオランドーが獅子と闘つてゐる最中にオリバーは眼を醒し自分があんなに酷い目にあはした弟のオオランドーが、自分の命を投出してまで、兄を救ふ爲に猛獸と戦つてゐるのを見て、恥と後悔の念に攻められ、今までの自分の無道な行を悔悟し、涙を流して今迄になした罪惡を許して呉れる様にご願つた。オオランドーは兄がそんなに悔いてゐるのを見て、その場で之を許し互に抱き合つた。其の時からオリバーは本當の兄弟らしい愛情を以つて、オオランドーを愛した。オリバーは實は弟を殺さうと思つて此の森へやつて來たのであつた。

オオランドーの腕の傷からは澤山な血が出て、ガニミードの所まで行くだけの力もなくなつたので、兄にガニミードの所まで行つて——その人を自分は戯れにロザリンドと呼んでゐると言つた。——今迄の出來事を告げるやうにたのんだ。

オリバーは小屋へ行つて、ガニミードとアリエナにオオランドーが自分の命を救つて呉れた次第を話した。そして勇敢なオオランドーの行爲や、天の助けで自分が救はれた事などを語り終つてから、二人に自分はオオランドーの兄であつて、前には弟を酷い目に合はせたが、今はもう仲直りした事をも語つた。

オリバーが眞心から自分の罪を悔い悲しんだのを見て心の優しいアリエナは非常に深い印象を受



けた。そしてその瞬間からその男を戀する様になつた。そしてオリバーも亦、自分が話した自分の罪のための胸の苦しみに同情して呉れる娘を見て、急にその女を戀し出した。併しアリエナとオリバーの心に戀がしのび寄つてゐる間にも、二人はガニミードの世話をするために忙がしかつた。其譯はガニミードはオオランドーが恐ろしい危険に入つて、獅子の爲に傷けられた事を聞いて、氣絶したのである。それでも氣を取り戻した時には自分がロザリンドになつたつもりで居るものだから、氣絶の眞似をしたのだと胡癡化してガニミードは言つた。

「弟さんのオオランドーに言つて下さい、仲々巧く氣絶の眞似をしたつてね。」

併しオリバーはガニミードの顔色が餘り青白いのを見て本當に氣絶したのだと思ひ、又若い男にしては餘り弱過ぎるのを不思議がりながら言つた。

「全く眞似なのなら、うんと勇氣を出して、男になる眞似をなさいよ。」

「さうしてゐますの、けれども、實際、女に生れ附いた方が當然だつたのでせう。」  
とガニミードは正直に答へた。

オリバーは弟の所へ長い間歸つて來なかつた。そして話さねばならぬ事をうんち持つて歸つて來た。兄オリバーはガニミードがオオランドーの負傷を聞いて氣絶した事の外に、自分が何うして美

くしいの羊飼の娘アリエナと戀に落ちたか。そして始めて會つたのにも拘らず、自分の求婚を喜んで承知して呉れた事をも話したのである。又弟に、既に決定した事のように自分はアリエナと結婚して羊飼となり此處に止まらねばならぬから、國にゐる財産や家は皆お前にやる事に決めたと言つた。

「賛成します。明日にも式をお挙げなさい。其席へ公爵さんを始め御家來一同を招きませう。早く行つてアリエナさんにその準備をおさせなさい。アリエナは今獨り居ります。あれあそこへ、兄さんが來ましたから。」

オリバーはアリエナの所へ行つた。ガニミードは友達の病氣を見舞ひに來たのであつた。

オオランドーはガニミードが、オリバーはアリエナとの間に急に出來上つた戀の話をし合つてゐた時、オオランドーは自分の兄に明日あの羊飼の娘と結婚する様に奨めたと言つた、その上何んなにか自分がその同じ日にロザリンドと結婚し度いか知れないと附加へた。

ガニミードはその結婚を非常に好いと認めた。若しオオランドーが、口で言つてをると同じ様にロザリンドを心でも愛してゐるのなら、その願を叶はしてやると言つた。ガニミードは明日になれば、本當のロザリンドを、つれて來るやうにしようと言つた。勿論ロザリンドもオオランドーの結婚を喜んでゐるから。



實際から言へば全くあり得ない此の話も、ガニミードが本當のロザリンドであるのだから、何の苦もなく出来る譯であつたが、ガニミードは有名な魔法使であつた伯父さんから習つたと言ふ魔法の力を借りて、それをやつて見るのだと言つて置いた。

戀に夢中のオオランドーは、自分が聞いた事を、半ば信じ半ば疑つてゐたので、ガニミードに正氣で言つてるのかと尋ねた。ガニミードは答へた。

「命にかけて眞面目です。ですから晴着を着て、公爵やお友達を結婚式にお招きなさい。明日は、あなたさへロザリンドさんご結婚する氣なら、きつとロザリンドさんも來るに決つてをりますから。」  
オリバーはアリエナの承諾を得てゐたので、翌朝オリバーと、アリエナとは共に公爵の所へ行つた。オオランドーも勿論一緒であつた。

二組の結婚式をするために一同は集つてゐたのであるのに、其處には花嫁が一人しか來てゐないので、皆は不思議がつたり、憶測したりしてゐた。そして殆ど大抵の者はガニミードがオオランドーを擲擄つてゐるのだらうと思つてゐた。

公爵は斯んな奇體な方法でつれて來られると言ふ小娘が、愛嬢ロザリンドであると聞いて、オオランドーに、あの羊飼の男が約束した様に、本當にやれると信ずるか何うか尋ねた。オオランドー

「が何う考へて好いのだか判りませぬと答へた時、ガニミードが這入つて來て、公爵に若しお嬢さんを私がつれて來たら、あなたはオオランドーご結婚する事を許しますか尋ねた。」

「さやう、姫と共にやる可き王國が、たごへ幾つあらうごも。」

と王は答へた。ガニミードは又オオランドーに言つた。

「それからあなたは、必ずお嬢さんご結婚するごお言いですね。私が連れてさへ來れば。」

「確にします、たごへ私が王國を幾つ貫つて、その國王になつたとしても。」

ガニミードとアリエナは一緒に外へ出た。ガニミードは自分の男の服を脱ぎ棄て又元の女の服を着て魔法でも何でもなしにすぐにロザリンドになつた。アリエナも田舎娘の服を脱いで元の高價な着物を着けて、何の苦もなしにシリヤに變つてしまつた。

二人が座を外してゐる間に、公爵はオオランドーに、羊飼のガニミードが自分の嬢に良く似てゐると言つた。オオランドーも亦、前からそう思つてゐたと告げた。

皆が何うなる事だらうと心配する間もなく、ロザリンドごシリヤが元の貴婦人の姿になつて這入つて來た。そして其時は魔法を使つたのだなごとは言はずに。ロザリンドは父の足下にひれ伏して祝福を願つた。一座の人々には姫がそんなに急に現れたと言ふ事は、全く魔法でもつてやつたご



より思へない程不思議な事であつた。併しロザリンドはすぐ父の足下より立上つて、自分が追放された事から、森の中で、従妹のシリヤを妹の様にして、羊飼に化けて暮してゐた事まですつかり話した。

公爵は既に與へた許可を是認し、茲にオオランドーミロザリンド、又オリバーミシリヤとは一時に結婚の式を擧げた。そして此の森の中では、斯様な場合に常に宮殿でやつた様な行列や、華麗な式を行ふ事は出来なかつたけれども、こんな楽しい結婚の日はこれまでに嘗て無かつた。そして美しい木の涼しい蔭に坐つて、皆が楽しく御馳走を喰べてゐた時であつた。丁度この善良な公爵と眞の戀人達の幸福を、何一つ不足のない様にするかと思はれる程、意外な使者が公爵の舊領地から遣つて來て、其の吉報を齎らした。

弟の僭主は娘のシリヤが逃げた事を非常に怒り、又毎日々重要な地位にある人々が、追放された正しい公爵の味方なるために、アーデンの森へ行く事を聞いて兄がその逆境に於ても尙人々から尊敬せられるのを非常に嫉み、兄を捕へ、その家來と一緒に切り殺さうと思つて、自ら大軍の先頭に立ち森を目がけて進軍した。が不思議な神の攝理に依つて、この惡心の弟は途中で改心をしてしまつた。夫れは弟の公爵が、丁度この森の端れまで來た時、仙人の様な一人の年を取つた隠者に

出會つた。公爵はその老人と長い間話をしてゐる間に、到々すつかり自分の悪い計畫を思ひ止まつてしまつて、其の後は心より後悔して、自分のよこしまに依つて得た領土を棄て、残りの生涯を僧院で暮さうと決心した。そしてこの決心と同時に、何よりも先づ兄へ自分が長い間横領してゐた領土を返し、又兄の家來達の領地や扶持をも元通りに戻すと言ふ使者を遣はしたのであつた。

此の吉報は——思ひ掛けなかつたので、又それだけ皆に喜ばれたのであるが——丁度申し分のない時に來て王女達の結婚の宴樂と歡樂とを一層高めた。シリヤは従姉のロザリンドに、父君の得られた幸福を祝し、又自分の父が領地を返還したため、自分はもう嗣ではなくなつたけれ共、ロザリンドが新に嗣となつた事を心から喜び祝つた。此の二人の従姉妹達の友愛はかくまで立派であつて嫉みや羨みなどは露ほごもなかつた。

今や公爵は放浪生活の間自分と共に暮した忠義な家來達に報酬を與へる時が來た。家來達も亦逆境を忍耐し辛捧して來た甲斐あつて遂に平和と榮譽との内に、正しい公爵の宮殿に歸る事が出来るのを此上もなく喜んだ。



ペロナの市にバレンタインとプロチウスと言ふ二人の若い紳士が住んでゐた。二人の間には何物に依つても妨げられない堅固な友情がもう長い間續いて居り、二人は共に學び、共に研究し、又暇な時には常に一緒に遊んでゐた。但し唯一の例外はプロチウスが自分の戀してゐる婦人を訪ねる時のみであつた。彼が此の戀人への訪問と美しいジュリアに對する熱情とだけが、二人が一致し得ない唯一の話題であつた。まだ戀の經驗を持たぬバレンタインは、時々友達がジュリアの事ばかりを話し續けるのであき／＼して、時にはプロチウスをからかつておさげまじりに、熱狂的な戀を嘲弄したり、又プロチウスの様にそんなに不安な希望や恐怖を抱いた戀人になるよりも、現在自分の送つてゐるやうな自由で幸福な生活を喜んで居たから、そんな馬鹿らしい戀なきを考へる頭を持つてゐないとさへ斷言した。

ある朝バレンタインはプロチウスの所へやつて来て僕はミランへ行くから、暫く別れなければならぬと話した。友達と別れるのを好まなかつたプロチウスは色々と理窟を言つて彼のミラン行を思ひ止まらせやうとしたが、

「無理に止めてくれ給ふな、プロチウス君。僕はのらくら者の様に故國にゐる青年時代をなまけつぶしたくない。郷土に執着する青年に限つて郷土らしい才智しかない。若し君の愛情が君の尊敬

してゐる美しいジュリアの姿に縛られてゐないのなら、僕と一緒に外國に行つて世界の驚異を見物するやうにすゝめるんだが、併し君はジュリアさんの戀人だからその戀を續け給へ。そして君の戀が益々佳境に進む事を望む。」

と彼は言つた。

二人は互に變らない友情を以て別れた。

「バレンタイン君、では御壯健で。旅行中に何か特に注意に價する様な珍らしい物を見た時には僕も一緒に来ておればよかつたのにさ、僕の事を思ひ出して下さい。」

ミプロチウスは言つた。バレンタインは其の日すぐにミランへ出發した。プロチウスは友の出發した後、机に向つてジュリアへの手紙を書いて、それを自分の戀人に渡して呉れる様にとジュリアの召使ルセッタに頼んだ。

プロチウスが愛してゐると同じやうに、ジュリアもプロチウスを愛しては居たが、氣位の高い負けぬ氣の女だつたので、さう易々と戀人に従ふ様では處女の威嚴を損するさへ考へて居た。そこで男の愛情に對しては冷淡な風を裝ひ、いつもプロチウスに對しては少なからず不安を抱かせてゐた。

ルセッタがジュリアにプロチウスからの手紙を差出した時、ジュリアは受取らうともしないで、



下女が左様な手紙などを受取つたのを叱り、室を立ち去れと命じた。ミは云へジュリアは手紙の中に何んな事が書いてあるのか見度くてならず、女中を再び呼び戻し、そしてルセツタが其室に這入ると「今何時か」と外のことを尋ねた。主人が時間よりも手紙の方を餘程知りたがつてゐる事を良く承知してゐたルセツタは其間には答へないで又前の手紙を差出した。ジュリアは女中が、自分が本當に望んでゐる事を知つてゐる様な舉動をしたのが癪に觸り、手紙をすたく／＼に引きさいて床の上に投げつけ、又も女中に此所から出て行けと命じた。そしてルセツタが、室を出て行きがけに手紙の破片を拾はうとしたので、それを持つて行かれては大變だと思つて、怒つた風をして言つた。

「出てお行き、さつさと出してお行き。紙片など放つて置けば好いぢやないか。お前は私を怒らさうと思つてそんなものを弄くつてるのだね。」

ジュリアはあきで、ちぎれた紙片を出来るだけうまくつなぎ合せ、初めて「戀に傷つきたるプロチウス」といふ言葉を綴り出した。すたすたに破れた、——或はジュリアの言ふやうに、傷いた（この表現は「戀に傷いたプロチウス」といふ句から思いついたのである）破片から、あれやこれやと苦心して綴り合せた戀の言葉を惜しみながら、ジュリアはこの戀の言葉に向つて、お前の傷が治るまでは自分の胸を寢床代りにして抱いてゐてあげよう。又引裂いた償ひとして、どの破片にもキツス

してあげよう、と真心から言つた。

ジュリアはこんな風に優しい女らしさ、子供らしさで話し續けてはゐるが、手紙は何うしても元通りにつき合はせ得なかつた。自分が短氣にもあんなやさしい戀文を裂いてしまつた事を悔ひ、今迄に書いた事がない程心の籠つた手紙をプロチウスに送つた。

プロチウスはこんな愛の籠つた返事を受取つたので非常に喜びこれを讀みながら叫んだ。

「楽しい戀、楽しい水莖の跡、楽しい人生！」

と夢中になつて讀んでゐる最中に父親がやつて来て、

「おい／＼。誰から來た手紙を讀んでるのです」

と老紳士が尋ねた。

「お父様、友人のバレンタインがミランから寄こしたのです」

「その手紙を貸して御覽、何んな報知が書いてあるか讀みたいから」

「いえ、別に何も書いてありやませぬ、お父さま。唯友達がミランの公爵に非常に愛されてゐて、毎日寵愛を蒙つてゐる言ふ事。君が一緒にゐてこの幸福を分つ事が出来ればよいのに、書かしてあるだけです」と非常に驚きながら言つた。



「で、お前はそれを何う思つてゐるのか」

「お父さまのお考へ次第です。友達のお考へ次第にはなれませんから」

プロチウスの父は丁度今その事に就て友人と話し合つてゐた所であつた。その友人はプロチウスの父が何故自分の子を、他人の様に外國へやつて修業をさせないのかを訝かりながら勵めた。

「或人は自分の子の運命を試すために戦争にもやつたり、或は無入島発見のために遠方へ行き、或は外國の大學へ勉強に行く人もある。それにプロチウスにはバレンタインの様な佳い友人もあり今はミランの公爵の宮廷へ呼ばれて行つて居る。あなたの御子さんは何んな事でも出来ます。若い間に旅をさせてあげなけりや、年をこつてから本當に後悔なさるでせうよ」

プロチウスの父はこの友達の忠告を最もだと思つてゐた。それにバレンタインがプロチウスに、「一緒にゐてこの幸福を分つ事が出来れば良いのに」言つてゐるのを幸、すぐに息子をミランへやらうと決心した。勿論この俄かな決心に就ては何の理由をもプロチウスに告げなかつた。この勝氣な老紳士はいつでも何の理由も言はないで息子に命令するのが習慣であつた。――

「予もバレンタインが望む様に仕た方が佳いと思ふ」

と言ひ、そしてプロチウスが驚いたのを見て附け加へた。

「予がこんな急に、お前をしばらくミラン公爵の宮廷へ送らうと決心した事を驚いてはいけない。予が思ふ通りを予がするだけの事さ。明日迄に出發の用意をしる。予は既に決めてしまつたのだから少しも猶豫はならぬぞ」

プロチウスは自分の父に逆らつても駄目である事を良く知つてゐたので、意見をのべたり、口論したりなどはしなかつたが、自分がジュリアの手紙に就て父に嘘を言つた事から戀人と別れなければならぬ様な悲しい結果になつた事を後悔した。

ジュリアも今、プロチウスが長い間、外國へ行つてしまふと言ふ事を聞いては、もう冷淡な風を装ふてゐる事が出来ず、互に心や戀の變らぬ誓をして、悲しい別れを告げ、其の印に永久に身を離さぬ約束しながら指輪を取り交した。プロチウスは斯んなにつらい別れをして、ミランへ旅立ち其所で友達のバレンタインに出會つた。

プロチウスが、父に出鱈目な想像のまゝを言つた通りに、バレンタインはミラン公爵から非常な寵愛を受けて居り、その上に夢にも豫想しなかつた様な事件が起つてゐた。と言ふのはバレンタインは今日迄あんなに誇りにしてゐた自由を棄て、プロチウスと同じ様に激しい戀の奴隷となつてゐたのである。



バレンタインに、こんな不思議な變化をさした相手は、シルビアといふ、ミラン公爵の娘で、シルビアも亦バレンタインを戀してゐた。併し二人は自分達の戀を公爵には秘密にしてゐた。夫れは公爵がバレンタインに非常な好意を示し、毎日の様に自分の宮殿へ招待なさしてはゐるが、自分の娘をツリオと言ふ侍従と結婚させやうと目論んでゐたからである。併しシルビアはバレンタインの様な立派な考へに優れた性質を持つてゐないツリオを嫌つて居た。

或日二人の戀の競争者、ツリオとバレンタインとが一度にシルビアを訪れ、バレンタインはツリオの言ふ事を一々舉げ足を取つて嘲弄の種をし、シルビアを喜ばせてゐた。丁度その時公爵が室に這入つて来て、バレンタインに友達のプロチウスが到着したと告げた。

「私は友人が此處に来る事をそんなに望んでゐたか知れなかつたのです」とバレンタインはプロチウスの事を口を極めて褒めた。

「公爵閣下、私は懶けてばかりゐましたけれど、私の友達是非常な勉強家で、人格と言ひ性質と言ひ、又紳士らしい紳士の美德を備へてゐる點と言ひ何一つ申し分は御座いませぬ。」

「ではその人の徳に相應する様に良く歡迎しなさい。シルビア、私はお前に言つてゐるのだよ。それからツリオさん貴君も。併しバレンタイン君には別にさういふ必要もあるまい」

此時プロチウスが這入つて来た。バレンタインは次のやうに言つて友人をシルビアに紹介した。

「お姫さま、私も同様あなたの下僕としてお待遇下さいませ」

バレンタインもプロチウスが退出して二人ぎりになつた時、バレンタインは尋ねた。

「國では皆變りはありませんか。君の愛人は丈夫ですか。戀は益々順調に行きましたか」

「僕の戀の話はいつも君を退屈させる様だし、君は又戀の話なごあまり好まれない事を知つてゐるからよませう」

「あゝプロチウス君。僕はもうあんな生活を變へてしまひました。今では戀を呪つた事を後悔してゐます。戀を輕蔑した仕返しに戀が僕の眠つてゐた眼から眼を迫ひ出しました。お、プロチウス君！戀は力強い王様です。戀は僕を謙遜にしました。僕は戀程の悩みも此の世になければ、又戀程の悦びも此の地上にはないと白状します。戀の話でなければ嫌になりました。僕は今三度の食事も眠りも、凡て戀の名の爲めにする事さへ出来ません」

戀はバレンタインの性質を一變したことを知つたのは友人プロチウスにまつて大勝利であつた。併しプロチウスは既にバレンタインも「友達」ではなかつた。二人が語り合つてゐた時に（さうだ、二人がバレンタインの心の内に變化を起させたと言ひ合つてゐた時でさへ）その同じ全能の戀の神



が、プロチウスの心にも働き出したからである。今迄は眞の戀人として、又完全な友人として模範とも言はるべきプロチウスが、ほんの暫時、シルビアと會つただけで、既に虚偽の友となり、不信の戀人となつたのである。まことにプロチウスがシルビアを一眼見た時から、ジュリアに對する戀は全く夢の様に消へ去り、バレンタインとの長い間の友情だも尙ほ、シルビアに對する愛情を止めるだけの力がなかつたのである。生れ付き性質の良い人が、不正直になつた時にはいつもさうであるが、プロチウスはジュリアを振り捨て、バレンタインの競争者にならざる決心する迄には、少なからず躊躇したとは言へ、彼は遂に義務の觀念を打ち棄て、殆んど悔恨の念なしに、新らしい不幸な情熱に身を委せてしまつたのであつた。

バレンタインはプロチウスを信用して自分の戀の一伍一什をすつかり打明けた。そんなに注意深く二人の戀を父公爵に隠して居るかと言ふ事や、公爵から何うしても許しを得る望がないので、遂にシルビアを説いて今晚宮殿から逃げ出させて、マンツアへ墮落ちしやうとしてゐる事なきを話し夕暮になり次第宮殿の窓からシルビアをつれ出す時に使ふこいふ繩梯子をもプロチウスに見せた。

是は全く信ぜられぬやうな話だが、此の大切な秘密を友達から詳細に語り聞かれてから、プロチウスは公爵の所に行つて、今の秘密をすつかり話してしまはうと決心したのである。

この虚偽の友、プロチウスは、公爵の氣を引く爲めあらゆる技巧をもつて、その話を飾り、今述べやうとする事は友情としては隠して置かねばならぬのであるが公爵から示された、御厚意に黙視するに忍びないので、又この御恩寵を蒙つた義務が、私をしてお知らせさせるのであつて、世間的な利益のためにするのでない前提して、繩梯子の事や、バレンタインがどういふ風にしてその繩梯子を長い外套の下に隠すかといふ事まで、バレンタインが話した一部始終を公爵に物語つた。

公爵はプロチウスを驚くべき完全無缺な人だと思ひ、そして不正な行動を隠して置くよりも、むしろ友達の計畫を發いた方が好いと思つた事を、非常に賞讃した上此の秘密を誰から聞いたかといふ事は決してバレンタインに知らせないで、自然にバレンタイン自身にその計畫を曝露させる様な方法を取らうと約束した。そのため公爵はその晩、バレンタインが来るのを待ち受けてゐた。間もなくバレンタインが宮殿の方へ急いでやつて来るのが見えた。そして何か外套の下に包んでゐるものがある様に見えたので、公爵は繩梯子に相違ないと思つた。

公爵はバレンタインを呼び止めた。

「そんなに急いで何所へ行くのです。バレンタイン君」

「公爵閣下。外でも御座いませぬ。あそこに使の者が待つて居りますので、友達への手紙を渡し



に行く所で御座います」

と云つた。バレンタインの此の嘘も、プロチウスが父に言つた嘘と同様に成功しなかつた。

「何か重大な事でもあるのですか」

「いいえ別に。私が達者で、閣下の宮殿で非常に幸福に暮してゐる事を父に告げて呉れと書いてある丈です」

「ぢや別に大して急がなくても好い。暫時つき合つてくれ給へ。私に關係ある事件で一寸君に相談したい事があるから」

「言つて、公爵は巧みにバレンタインにその秘密を引き出す手懸りの話をし出した。自分は娘をツリオと結婚させようと思つてゐるが、娘が片意地で、父の命に少しも従はないと語り、

「今は私もあれが私の娘であることも考へず、又私があれの父であることも考へてゐないのです。君に云ふがあの娘の高慢さが、あれに對する私の愛を取り去つてしまひました。私の老後は娘の孝養心に委さうと思つてゐるが、私は此度妻を娶つて、あの娘は娘の好きな男に呉れてやらうと決心したのです。しかし私の財産は何もやらないから、自分の美しくさを持參金にすりやい、んだと思つてゐます」

「言つた。バレンタインは一體何うなる事かと怪しみながら答へた。

「で結局、閣下は私に何うせよとおつしやるのです」

「それでだ。私は美しくして内気で、年寄の繰言をうるさがない様な人と結婚したいのだ。その上求婚の風も若い時分は充分變つてゐるやうだから、何うして女を口説いたら宜いか言ふ事を君から教へてもらひ度いのだ。」

バレンタインは當時の青年が練習してゐる求婚方法の概略を話し、美しい婦人の愛を贏ち得ようと思ふ時には、何ういふ種類の贈物をするのがいゝか、度々訪問しなければならぬなど教へた。

公爵は自分が贈つた品物を婦人は受けつけなかつたこと、又父親が嚴重にしてゐるので、晝間はその娘には誰も近づく事が出来ないのだと言つた。

「ぢや夜訪ねれば宜いぢやありませんか」

「處が夜は娘の室の鍵が堅くかゝつてゐるのだ」

「公爵はうまく話を要點まで特つて來た。

バレンタインは何の氣なしに、夜になつてから繩梯子を使つて婦人の窓までのほれば宜しい、又



それに使ふのなら一つ佳いのを持つて來ませうと言ひ、最後に繩梯子を隠す爲には自分が今着てる様な長い外套を着ればよろしいと告げた。

「ぢやその外套を貸して下さい」

ミ公爵は長い話を拵えてやつこの事で外套を脱がせる所までこぎ着け、バレンタインの外套を掴んで、それを脱がせ、繩梯子ばかりでなくシルビアからの手紙をも見附け、それを直ぐ開いて讀んだ。手紙の中には二人の駆落の計畫が詳しく書いてあつた。公爵は自分がバレンタインに好意を示したにも拘らず、娘を奪ひ出さうとしたりなどして恩を仇で報ゆる不徳を責め、永久に宮廷及びミランの市から追放するに命じ、その晩すぐ無理矢理に宮廷から、追ひ出した。シルビアに一眼會はせる事もしないで。

プロチウスがミランでこんなバレンティンを邪魔してゐた間に、ベロナではジュリアがプロチウスの居ないのを非常に淋しく思ひ、遂にその惱みが控目な女の考へをも壓倒して、ミランにゐる戀人に會ふ爲にベロナを出發しよう決心させた。道中の危険を心配して女中のルセツタをも自分と同じ様に男の服を着せて旅に上つた。プロチウスの裏切りのためにバレンティンが市から追放されたのミ前後してミランへ到着した。

ジュリアは正午頃市へ入つて、或る宿屋に落ちついた。彼女は其時只愛するプロチウスのみが思ひの總てであつたので、すぐ宿屋の亭主と話をした。そんな事からでも何かプロチウスの様子が、少し位は聞かれるだらうと思つたからである。

宿屋の亭主は、ジュリアの風采から見て、確かに高貴の生れに違ひないと思ひ、此の若い美しい紳士から（亭主はジュリア達を紳士であると思つてゐた）そんなに親しげに話しかけられた事を非常に喜んだ。亭主は性質の宜い人だつたので、ジュリアが沈んだ顔をしてゐるのを見て、氣の毒に思ひ、客人を慰めるためによい音楽を聞きに参りませうと勧めた。その晩は一紳士が、其の戀人に窓下夜曲セレナードを奏するのであつた。

ジュリアが斯様に陰氣さうに見えたのは、プロチウスがジュリアの氣高い處女の誇りと、威嚴のある性質を愛してゐた事を知つてゐたから、自分がこんな輕卒な行爲をすれば愛人から輕蔑されるかも知れないと怖れてゐたからであつた。

ジュリアは亭主と一緒に音楽を聞きに行かうと言つたのを喜んで承知した。かういふ風にして、プロチウスに出會へるかも知れないと、心の中で思つてゐたからである。

併しジュリアが、亭主につれられて、宮殿まで來た時には亭主が思つてゐたのミは全く反對の結



果を生んだ。悲しい事には、ジュリアの戀人、輕浮なプロチウスが、シルビア嬢のために恰かも其時窓下夜曲を奏し、戀や賞讃の辭を述べてゐるところであつた。ジュリアはシルビアが窓の所からプロチウスに話してゐるのを洩れ聞いた。シルビアはプロチウスが眞の戀人を捨てた事や、友人バレンタインに對する不信の行爲を責め、彼の音楽や甘つたるい言葉などには耳を貸さうともしないで窓の所を立ち去つた。

シルビアは今も尙追放されたバレンタインに忠實であり、虚偽の友プロチウスの非紳士的な行ひを憎んでゐたからである。

ジュリアはこの實景を見て、絶望に陥つたことは言へ、なほ不實なプロチウスを愛してゐた。そしてプロチウスが最近召使を無くした事を聞いたので、親切な宿屋の亭主の助をかりて、プロチウスの小姓として住み込むことに成功した。プロチウスはこの小姓がジュリアとは知らなかつたので、手紙や贈物等を持たせて戀の敵シルビアの所に遣はし、然もペロナを去る時にジュリアから貰つた指輪までも持たせてやつたのである。

ジュリアが令嬢の所へ指輪等を持つて行つた時、シルビアは頭からプロチウスの求婚をはねつけたので、ジュリアは非常に喜んだ。そしてジュリア——と言ふよりも小姓のセバスチアンは、シル

ビアとプロチウスとの以前の戀や、捨てられた婦人ジュリアの事を非常に同情を寄せて物語り、自分はその婦人を知つてゐると言つた。良く知つてゐる筈である、話してゐる人は當のジュリア自身なんだもの。ジュリアが何んなに戀人を愛してゐるか、そして戀人の不親切な疎略を何んなに悲しんでゐるかを語つた後、少し言葉を濁しながら言つた。

「ジュリアは私位の脊で、顔色も似てゐます、眼の色も髪の色も私と少しも變りません。」

實際男の服を着たジュリアの姿は非常な美少年に見えた。シルビアは愛する男から無残にも捨てられた憐れな婦人に心から同情した。そしてジュリアがプロチウスから頼まれた指輪を差出した時拒絶して言つた。

「この指輪を呉れるなんてあの人は何と言ふ恥知らずでせう。私はそんなものは受取りません。ジュリアがそれをあの人の上に上げたのだと言ふ事を度々聞いて知つてゐますもの。私はお前があの婦人を氣の毒と思つてゐるので好きになつた。こゝに財布があるから、これをジュリアの爲めに使ふ様にお前に上げやう。」

と戀の競争者の口からこんな温かい言葉を聞いたので、變装してゐたジュリアの鬱いだ氣持は引き立てられた。



話變つて追放されたバレンタインは、名譽を傷けられ、追放者として父の家に歸る氣にもなれなかつたので、途方に暮れてしまつた。そして自分の大切な寶であるシルビアを残して來たミランから程遠からぬ、或る淋しい森を彷徨ふてゐた時、追剝が出て來て金を出せと嚇し附けた。

バレンタインは自分は不幸な身の上であり、今は追放された所で、特物と言へば着てゐるこの着物より外になく、金などは全く持つてゐないと言つた。

追剝共はバレンタインの難儀をしてゐる事を聞き、その氣高い風采と男らしい振舞とに動かされて、若し自分達と一緒に住んで、自分達の隊長即ち親分になつて呉れば、命令通りになるが、若し自分達の申出を拒むなら殺してしまはうと言つた。

自分の事は何うなつたつて構はないと思つてゐたバレンタインは、若し歸人や貧乏な旅人に暴行を加へないならば言ふ條件で、追剝共と一緒に暮し、その親分になることを承知した。

こんな風にして氣高いバレンタインは、昔のロビン、フッドの様に、追剝の親分になり法律を破る盜賊となつた。所がさうしてゐる間にシルビアに見附けられる様な事になつたのである。その次第は斯うである。

シルビアは父がツリオこの結婚を飽までも主張して、もう斷り切れなくなつたので、それを避け

る爲め、戀人が詫住居をして居る言ふ、マンツアまでバレンタインの跡を追つて行かうと決心した。併しそれは間違ひでバレンタインは未だ森の中に追剝共と一緒に暮してゐた。バレンタインは親分と呼ばれてはゐるが、掠奪の仲間には加はらず、又少しも與へられた權力をも、亂用せず、手下共が剥ぎ取つた旅人に對して慈悲を掛けてやれと命じた丈であつた。

シルビアはエグラモアと言ふ實直な老紳士を、道中の護衛役として伴れ、父の宮殿から逃げ出したがその途中、バレンタインやその仲間の盜賊共の住んでゐる森を通らなければならなかつた。その時追剝の一人がシルビアを捕へエグラモアをも捕へようとしたが老人は逃げてしまつた。

シルビアを捕へた追剝は、婦人が非常に恐れて居るのを見て、少しも怖れる事はない唯親分の住んでゐる岩窟へつれて行くだけである。そしてその親分といふのは高尚な人で、婦人に對しては常に同情を以てをる人であるから決して心配はいらぬと言つた。シルビアは自分が捕虜として盜賊共の親分の所へつれて行かれるのを愉快には思はなかつたが、「お、バレンタイン。あなたの爲に私はこれを耐へ忍びませう」と言つた。

追剝が婦人を親分の岩窟まで運んで行く途中に、プロチウスが出て來てそれを遮つた。プロチウスは未だ小姓に變裝してゐるジュリアを従へ、シルビアの逃げたのを知るにすぐに跡を追つて此の



森まで来て、シルビアを追剥の手から救つたのであつた。然も未だシルビアが助けてもらつた御禮をも言はない前に、又もや求婚のこゝを言ひ始め、不作法にも無理矢理に承諾をさせようとした。その時側に立つてゐた小姓（流浪のジュリア）は、プロチウスが今シルビアを救つた所なのだから少し位はプロチウスに好意を見せるかも知れないと思つて氣が氣でなかつた。所へ不思議にもバレンティンが不意に現はれて皆を驚かした。彼は婦人が捕へられたのを聞いてそれを助け、慰める爲にやつて來たのであつた。

プロチウスは自分がシルビアを口説いてゐる所を友達に見附けられたので非常に之を恥ぢ、その場で後悔の念に責められ、心からバレンティンに與へた自分の罪惡を謝したのである、昔の英雄の様に氣高く寛大な性質のバレンティンはその罪を許し、元の様に友達としてつき合ふのみならず、俠氣を出して急に思ひ切つて言つた。

「僕はもうすっかり君を許します。そしてシルビアに對して持つてゐた僕の好意をも凡て君に譲つて僕は思ひ切りませう」

處が主人の側に立つてゐた小姓のジュリアが、この思ひ切つた申出を聞いて、プロチウスが今の場合義理としてこれを拒絶する譯に行かない様な事になるのを氣遣つて氣絶したので、皆はその介

抱のために氣を取られてゐた。其時シルビアは、バレンティンがこんな寛大過ぎる友情をさう長く辛棒して居る事は出来まいとは思つてゐたけれ共、プロチウスに自分をやるまいふこゝには反對であつた。ジュリアは氣を取り靜めてから

「私はすっかり忘れて居りましたが、此の指輪をシルビアさんに渡す様に主人から命ぜられて居りました」

と言つて指輪を差出した。プロチウスは、その指輪をよく見ると、それは自分が嘗てジュリアから貰つた指輪——之れを小姓に持たしてシルビアに遣はした——その指輪との交換に、ジュリアに與へた指輪であるのを見て

「一體これは何うしたのだ。是はジュリアの指輪だ。お前は何うしてこんなものを持つてゐるのだ」  
「ジュリアが私に呉れました。そしてジュリア自身でそれを此處まで持つて参りました」と答へた。

—129—  
プロチウスは熱心に婦人の顔を見て、明かに小姓のセバスチアンがジュリア自身である事を知り然もジュリアが昔に變らぬ心や、本當の戀の證を示したので、彼の心には又ジュリアに對する愛が戻つて來た。そこでプロチウスは此の婦人を得てシルビアに對する凡ての希望を、その婦人を得る



にふさわしいバレンタインに譲つた。

プロチウスとバレンタインとが仲直りをして、互に忠實な令嬢達の愛を得た幸福を語り合つてゐた時、シルビアを追つてやつて来たミラン公爵とツリオとが現れて皆を驚かした。

ツリオは真先にシルビアに近寄つて捕へようとして言つた。

「シルビアは俺の者だ。」

これを聞いたバレンタインはキツとなつて

「ツリオ、下れ。若し今一度お前が、シルビアは自分の者だなどと言へば、その儘には生かして置かないぞ。シルビアは此處に立つてゐる。欲しければ俺と決闘をしてくれ。俺の戀人に息一つ觸つても承知しないぞ。」

と言つた。此嚇しを聞き、憶病者のツリオは尻込みして、シルビアの事等は何とも思はないし、自分を愛しても居ない娘を得る爲に決闘する様な馬鹿な事はしないと言つた。

優れて勇敢な公爵は非常に怒つてツリオに言つた

「お前の心の卑しさと墮落とが娘に對して今の様な醜い行爲をさせたのだ。だからこれ位の條件のために娘を捨て、しまつたのだ。」

そしてバレンタインの方を向つて言つた。

「バレンタイン。貴下は天晴な精神を持つて居られる。貴下こそ女王の愛を受けるに足る人だ。シルビアは貴下に差上げやう。貴下こそ十分にその價值がある」

バレンタインは公爵の手に叮嚀に接吻して、公爵から贈物として貰つた娘を感謝の意を表しながら受取つた。此の喜ばしい機會を利用して、バレンタインは自分が暫時森で一緒に暮した盜賊共を許す様にと、人の善い公爵に願ひ、若し彼等が心を悔ひ改めて正業に戻る事が出来るならば、あの中には仲々善人も居り、大に役に立つ人もをるゝ保證した。この盜賊共の多くは破廉恥罪のためではなく國法に觸れて、バレンタインと同じく國を追放せられた人達であつたからである。公爵は喜んでこれを許した。然るに茲に今一つ残つて居るのは、友を裏切つたプロチウスに命じて、自分がなした戀のへの罪惡を悔ひ改めしめるために、公爵の前で、自分のした道ならぬ戀や偽りの話を凡て懺悔せしめる事であつた。良心に目醒めたプロチウスに、皆の前で懺悔させると言ふ耻辱だけでも彼に對する充分な刑罰になるゝ判断したからである。それも終つて二組の戀人達はミランへ歸り、その結婚式は公爵の面前に於て、非常な勝利の喜びと歡樂とを以て行はれた。



## ベニスの商人

シャイロツクと言ふ猶太人がベニスの町に住んで居り、高利貸が商賣で、基督教徒の商人達に高い利息で金を貸して随分澤山の財産を貯めてゐた。シャイロツクは頑固な爺さんで、貸した金は、情け容赦もなく取り立てたので、凡ての善人達から嫌はれてゐた。中でもアントニオと言ふ若いベニスの商人は特に彼を嫌つて居り、シャイロツクも亦同様にアントニオを憎んでゐた。アントニオは困つて居る人達に金を貸して、利息を決して取らなかつたからである。さう言ふ譯で此の慾張りの猶太人と、なさけ深い商人アントニオの間には、非常な確執があつた。何時もアントニオはリアルト市場でシャイロツクに出會ふ度に、彼が高利貸をしたり他人に酷い行爲をする事を責めた。シャイロツクは常にそれを表面上は忍耐強く聞いてはゐたが、心の内では何時かその仕返しをしてやらうと考へてゐた。

アントニオは、非常に立派な暮をして居り、世に稀な親切な人で、倦む事もなく人の世話をして居た。實際アントニオは、當時イタリイに住んで居た人々の中で、最も良く昔の高潔な羅馬人の精神を現はして居る人の一人で、あらゆる市民達から敬愛されて居り、そして彼が心から愛し親んで

ゐた友人に、バツサニオと呼ぶ若いベニスの貴族があつた。此のバツサニオは、親から受けた財産、とても餘り澤山になかつたので、金のない若い貴族の例に洩れず、身分不相應に華美な生活をした爲めに、多くもない財産を殆んど使ひ盡してゐた。そしてバツサニオが金の入用の時には、いつも、アントニオが貸してやつた。二人は、全く一つの心を持ち一つの血が通つてでもゐる様に親しかつた。

或日バツサニオは、アントニオの所へ来て、自分が非常に愛してゐる金持の令嬢と結婚して、財産を回復しやうと思つてゐる事を告げた。その令嬢の父は最近になくなつたのであるが、娘に莫大な遺産を残して置いた。その父親が生きてゐる時分には、バツサニオは度々訪問した事もあり、令嬢は時々バツサニオに對して無言の好意を眼で示し、恰もバツサニオの訪ねて来るのを喜ぶと言ふ風に思はれた。然し彼はこの金持の令嬢の戀人となるにふさはしい服装を買ふだけの金を持つてゐなかつたので、今迄の親切に加へてもう三千兩だけ貸してほしいと頼んだ。

アントニオはその時手許に貸すだけの金を持つてゐなかつたが、間もなく商品を山の様に積んだ船が歸つて来る筈であつたので、金持の金貸シャイロツクの所へ行つて、船を抵當にして金を借りようとした。



アントニオとバツサニオとは一緒にシャイロツクの所へ行つて、此の猶太人に、好きなだけの利息を拂ひ、自分の航海中の船が着いたらその商品で返すと言ふ條件で三千兩を貸して呉れないかとのんだ。此の時シャイロツクは心の内で考へた。

「彼奴の舉足を取る事が出来りや、いつもの怨を晴らすここが出来る。きやつは我々猶太人を嫌ひやがる、金を無利息で貸したりなどして、然も場所もあらうに、大勢商人が寄り集つてゐる處で、おれの事やおれの商賣を悪口しやあがる。おれの骨折つて儲けるものを高利と呼びやあがる。あんな奴を許して置くやうぢやおれの國の者は罰當りだ」と。

アントニオは爺さんが考へ込んでるて答へないのを見て待ち切れなくて言つた。

「ね、シャイロツク、わかつたかね。金を貸して貰へるだらうね。」

「アントニオさん、あなたはわしの金貸や利子の事で、何度もう市場でわしの悪口雑言を言ひなすつた。わしはいつも唯肩をゆすぶつてじつと堪えてゐました。辛苦を忍ぶのはわしらの民族の運命だと諦めてゐたからです。あなたは、わしを非信者だの、嘯み犬だのと呼んで、此猶太服へ唾を吐きかけ或時は野良犬か何かのやうに足蹴になすつた。扱、今日お金が要ると言つてわしの所へ

お出でなすつて『これシャイロツク、金を貸して呉れ』と斯うあなたは言はつしやる。わしは何も返辭してよいのでせう『犬に金がありますかい、二千兩を野良犬が用立てるてな事が出来ませうか』それとも腰を低くかめて斯う言ひませうか『旦那様、あなたは先週の水曜日には唾を吐きかけて下さいました、又いつぞやはわたしを犬とおつしやつて下さいました。其御恩に報ひまする爲に、これ〳〵丈の金子を御用立いたしまするとね。』

するとアントニオは答へた

「此の後でもわしはお前を犬と呼び、唾を吐きかけ、又は蹴飛ばすかも知れない。お前が金を貸して呉れるなら、親切づくでなく、むしろ敵に貸すつもりで貸して呉れ。さうすれば、若し違約した場合には、敵打のつもりで公々然と罰金が取立てられると言ふものだ。」

シャイロツクは言つた

「まあ〳〵さう腹を立てなすつちや困る。わしはあなたの親友になつて、これから可愛がつて頂きたいのです。恥をかゝされた事を忘れてしまつて、當座の御入用を用立てるばかりでなく、其金に對しては總一文の利子だつて取らない量見です」

此の表面上、親切さうな言葉にアントニオは非常に驚いた。そしてシャイロツクは尙親切さう



に見せ掛けて、唯願ふ處はアントニオの同情を得たいのであるから、三千兩<sup>ヒザン</sup>を無利息で貸すと繰返し言つた。そしてアントニオに自分と一緒に辯護士の處へ行つて、若しアントニオが期日迄に金を拂はない時には、その罰として、彼の身體の肉を一ポンドだけ、シャイロツクが好きな所から切取つても異議はないといふ、ほんの戲談の證書に署名して呉れと言つた。

「よろしいとも。私はその證書に署名をして、猶太人も仲々親切だと言ひませう。」

バツサニオはアントニオに向ひ自分の爲にそんな證書に署名してはいけないと言つたが、アントニオはそれでも友達の言葉をきかなかつた。その期日が来る迄には自分の船がその借金の幾層倍も品物を積んで歸つて来る筈だつたからである。

此の話を聞いてゐたシャイロツクは言つた

「お、祖先のアブラハムさま。何といふ疑ひ深いのでしよう、基督教信者達は。自分達がひどいことばかりしてゐるから、他人もやつぱりさうだらうと疑ふんだ。ね、もし、バツサニオさん、よしんばあの方が期間を破つたまで、其罰金を取立て、それがわしに何の利益になります。人肉を一ポンド取立て、見た所で、羊や牛の肉だけの価値もなけりや利得にもなりません。ね、これから可愛がつてもらひたいばつかりに、親切をつくさうと言ふのです。それを受けて下さればよし、

そうでなけりや、あばようです。」

シャイロツクは、斯様に己れの親切心からだと言つたにも拘らず、バツサニオは自分の爲に、友達が冒険にも斯んな恐ろしい抵當の契約をしてはいけないから、さうかやめる様にと忠告したが、遂にアントニオはそれを退けて、それは唯、(猶太人の言ふやうに)戲談事だと思ひながら、その證書に署名した。

バツサニオが結婚しようと思つてゐる金持の世嗣は、ベニスから程遠からぬベルモントといふ所に住んでをり、名をボオシヤと呼んだ。その人格の優雅さと言ひ、その心がけと言ひ、昔羅馬時代のケートーの娘であり、ブルータスの妻であつた、あのボオシヤと何の劣る所も無かつた。

バツサニオは、友人アントニオが、自分の命を抵當にしてまで深切に、都合して呉れた金で立派な家來共を従へ、グレシヤノと言ふ紳士と一緒にベルモントへ出發した。

斯くてバツサニオは求婚に成功し、ボオシヤは直ちにバツサニオを自分の夫にするに承諾した。

バツサニオはボオシヤに、自分には財産がない事、誇るに足るものは唯、高貴の生れと、貴族の家柄だけであると告白したに對し、ボオシヤは

「あなたの尊い性質を愛してゐるのであり、又あなたの財産を當にしないでもよい程に金持でも



ありますが、只、自分があなたに相應する程、千倍ももつゝ美しく、萬倍ももつゝ金持であれば良かつたのにと思ふ」

「優しく叮嚀に答へた。そして謹み深いボオシヤは次に自分の缺點を言ひ出した。自分は教育もなく學問もなく、又訓練も足りない者であるが、まだ年も若いからこれから勉強するに語り、ボオシヤの優しい精神をバツサニオに任かせるから、萬事につけて指導、教育して頂きたいと頼んだ。

「わたしはわたしの財産は、今から貴下の所有になります、つい昨日迄は、わたしが此の廣い邸の主君であり、自身の女王でもあり、召使達の主人であつたのですけれど、今日からは直ぐに、此邸も召使達もこのわたしみづから貴下のものになるのでございます。此指輪を右のものと一緒にあげませう。」

「言ひながらバツサニオに指輪を渡した。

「バツサニオは、此の富裕な氣高いボオシヤが、自分の様な財産もない者を、淑やかな態度で受容れてくれた事に對する感謝と驚きの念に壓倒されて、茫然としてゐたため、自分をそれほごまでに尊敬してゐる婦人に對して、切れ／＼の戀の言葉や感謝を言ふより外には何うして自分の喜びを尊敬を表はして、のか知らなかつた程であつた。そして指輪を受取り決して身を離さないと盟つた。

た。

グレシアノは、そこでボオシヤの小間使であるネリツサは、二人の主人の側に侍つてゐるが、ボオシヤが非常にやさしく、バツサニオの従順な妻になると約束をした時、グレシアノは主人と令夫人に喜びを述べてから、自分も今結婚したいから許して頂きたいと言つた。

「よろしいとも、グレシアノその心當りさへあるならば」と答へた。

グレシアノは、そこで、自分はボオシヤ様の美しい小間使ネリツサを愛してゐる事、そしてネリツサも若し主人のボオシヤ様がバツサニオ様と結婚されたなら、妻にならうと約束した事なごを話した。ボオシヤはネリツサに本當なのかと尋ねるに、ネリツサは

「奥さまが御許し下さいますれば」

と答へた。ボオシヤは喜んでそれを許し、バツサニオも嬉しさに言つた

「グレシアノ、わたし達の祝宴が君達の結婚式を併せて更に光榮を加へる事になる」

④ 此の戀人達の幸福は此の時、アントニオからの怖ろしい報知を齎らした使者が到着したので妨げられた。アントニオの手紙をバツサニオが讀んだ時、顔色が眞青になつたので、ボオシヤは誰か親しい友達の死んだの知らせて來たのではないかと心配した程であり、あなたをそれ程までに悲し



ませる報知といふのは一體何ですかと尋ねた。

「お、ボオシャさん、こゝに書いてある數行の文字こそ、曾て紙を染めた最も不快な言葉なのです。わたしが最初貴嬢に結婚を申込んだ時に、わたしは少しも包まずお話しました。わたしの財産はわたしの血管中に流れてゐるものより外には何もありません。然し無一物だに申した時に、實は、無一物よりも尙悪い境遇であると申す可きでした。私は借金をしてゐたからです。」

バツサニオはそれから前に述べた様な事情をすっかり話した。自分はアントニオから金を借りた事、アントニオはそれをシャイロツクと言ふ猶太人から融通して呉れた事、そして期日迄に返還しなければ、肉を一ポンドだけ罰金に出すミアントニオが證書に署名した事等を話した後、アントニオの手紙を読んだ。その手紙は次の様に書いてあつた。

「バツサニオ君足下。小生の船は悉く難破致し、シャイロツクに對する證書も既に其期限を超え申候。これを支拂へば小生の命は之れなく候。願はくば最期に只一日貴君に見わたく候。但し是は便宜に任せらるべく、自ら進んで御光來の意あるにあらざれば、本書は決して貴君を強ひるものに御座なく候」

「お、あなた、何事を棄て、も御出立遊ばせ。私はあなたの過失から、お友達が毛一筋でも失

はれませぬ前に、二十倍程のお金を差上げませう。そんなに高いもので買つたのですもの。うん、あなたを愛してあげませう。」

ボオシャはバツサニオに自分の財産に對して法律上の權利を與へる爲めに、出發する前に結婚しようと言つた。そこでその日すぐに結婚した。グレシアノとネリツサも結婚した。バツサニオもグレシアノとは結婚式がすむすぐに、大急ぎでベニスへ行つた。着いて見るミアントニオは既に牢屋に投ぜられてゐた。

返還の期限は既に過ぎてゐた。残酷な猶太人は、バツサニオの出した金を受取らず、強情にアントニオの内一ポンドを取らうと言ひ張り、此の怖ろしい事件がベニスの公爵の面前で裁判される日が取決められてゐた。バツサニオは落付かぬ怖ろしい不安の裡にその裁判の日を待つてゐた。

ボオシャは自分の夫と別れる時、快活に、お歸りになる時にはその親友をつれて来て下さる様に願つたが、或はアントニオに不利な結果になりはしまいか、非常に心配した。そして一人になつた時、心の内に何うにかして自分がバツサニオの親友の生命を救ふ助けになる工夫はないかと思案した。ボオシャは、バツサニオに對しては、あの様に優しく、妻らしい優雅な調子で萬事、夫の優れた知識に服従すると言つたのであるけれども、今や尊敬する夫の友達が恐ろしい危険に遭遇し



てをるのを考へると、どうしても、ぢつとしてゐる事が出来なかつた。ボオシヤは自分の實力を少しも疑はず、只自分の正しいを以て完全な判断に従つて、直ちに自分自身でベニスへ行き、アントニオの辯護をしようこ決心した。

ボオシヤには辯護士をしてゐる親戚があつた。此のベラリオと言ふ人に手紙を書き、この事件をくわしく述べ、その意見を求め、尙之と共に辯護士の着る制服をも送つてくれる様に頼んだ。使は如何に辯護すれば宜いかと言ふ助言を認めたと手紙と、その準備に必要なものを悉く持つて歸つて來た。

ボオシヤは召使のネリツサと共に男の風をして、辯護士の服を着け、ネリツサを自分の書記として伴れて行つた。二人はすぐに出發して、丁度裁判のある言ふ日に、ベニスへ到着した。裁判はベニスの元老院に於てベニスの公爵や元老院議員達の前で開かれやうにしてゐた。ボオシヤは此の高等法院へはいつて、公爵にベラリオからの手紙を渡した。その手紙には、自分が出掛けてアントニオの爲に辯護したのであるが、病氣の爲に出られないから、此の若いバルサザール博士に（ボオシヤは、そんな名を用ひてゐた）自分の代理として辯護をさせていただき度いと言ふ趣が書いてあつた。公爵はこれを許可し、そして辯護士服を着、大きな鬘をつけて巧みに變裝してゐる男の若

々しさを不思議さうに眺めて居た。

扱て重大な裁判が始まつた。ボオシヤはあたりを見廻し、無慈悲な猶太人や、パッサニオをも見たがパッサニオは、ボオシヤが變裝してゐることは少しも氣が付かず、友達の危険と困難を心痛しながらアントニオの側に立つてゐた。

ボオシヤが引受けた骨の折れる仕事は、非常に重大であつたので、この優しい婦人も元氣づいて雄々しくも自分が遂行しようとして引受た義務を果さうこ決心し、先づ第一にシャイロツクに、ベニスの法律に依つて證書に書かれてある抵當を取る權利を認めると言つた。そしてシャイロツクは知らず、何んな心の人をも感動させるやうな優しさを以てボオシヤは慈悲の尊さを説いた。

「慈悲は恰も地上に降る雨の様なものであつて、二重の福音を持つて居る。即ちこれを與へるものに取つても幸福であれば、又これを受ける者に取つても幸福である。慈悲が君主の胸にあれば、その光は黄金の冠にも優る。慈悲は神その者の徳であるからである。従つて慈悲が、正義を和らければ和らげる程、かの地上の權力（君主）は神に近づくのである。」（そしてボオシヤはシャイロツクに、）お互が常に神の慈悲を祈つてゐる以上、やがて、私達は他人にも慈悲を施すべきである。」と説いたが、シャイロツクは唯證書に書いてある抵當を得さへすればよろしいと言ひ張つた。ボオ



シヤは尋ねた。

「商人は金を拂ふ事が出来ぬのか。」と。

バツサニオは猶太人に三千兩の金と、その上欲しければ欲しいだけ餘分の金をやらうと言つたが、シヤイロツクはそれを受取らず、只アントニオの肉一ポンドを呉れよと言ひ續けた。バツサニオは博學な青年辯護士に、法律を少し位枉けてもアントニオの命を救つて頂きたいと願つた。併しボオシヤは嚴格に、一度定められた法律は決して枉ける事はできないと答へた。シヤイロツクは、法律は決して枉げる可きでないと言つた、ボオシヤの言葉を聞いて、自分の肩をもつてくれて居ると思つて喜んで言つた。

「ダニエル様の再来だ。お、賢明なる裁判官様。私は閣下に信服します。若いにも似合はぬ名裁判官様だ。」

ボオシヤはそこで、シヤイロツクにその證書を見せよと言つた。そしてそれを讀み終つてから「この證書は、既に期限が切れてをるから、猶太人はこれによつて正當にアントニオの胸元から肉一ポンドを切り取る構利がある」と言ひ、更にシヤイロツクに向つて、

「慈悲を掛けてやれ。金を取つてわしにこの證書は裂かせて呉れ。」

と言つたが、慘酷なシヤイロツクは慈悲の破片をも示さうとしなかつた

「わしは魂にかけて誓言致しました。他人が何と言はうもこれを變へる譯にはまいりません。」

「ではアントニオ、是非に及ばぬ。其方の胸へシヤイロツクの刃物を受ける用意をせい。」

とボオシヤはアントニオに言つた。シヤイロツクは、肉一ポンドを切るのを喜んで長いナイフを研いでゐる最中、ボオシヤはアントニオに

「何か申し残す事はないか」

と言ふと、アントニオは靜かに、死ぬ覺悟はさうにして居るから、何も言ふ事はないと答へ、バツサニオに向つて

「バツサニオ君、握手を。御機嫌よう。僕が君の爲に斯う言ふ破目になつたからさう言つて歎いて下さるな。どうぞ奥さんへよろしく。そして何んなに僕が君を愛してゐたかを傳へて下さい。」と言つた。バツサニオは深い苦惱に悩みながら答へた。

「アントニオ君。僕は今現に生命よりも大切な妻を娶つてゐる。けねども、生命も、妻も、全世界も、僕に取つては、君の命以上に貴いものではない。僕は何もかも棄て、しまふ。みんな犠牲に



してかまはないからどうかして君を此の悪魔から救ひたいのです。」

ボオシヤはこれを聞いて、バツサニオがアントニオの様な真心のある親友に對して、自分の愛をこの様な強い言葉で言ひ現はした事を、少しも無理とは思はなかつたが、斯う言はぬ譯にはいかなかつた。

「若し細君が傍にゐて、そんな風に君が言つたのを聞いてゐたら、餘り有難がりもしないでせう。」

「また主人の眞似をする事の好きなグレシアノは、バツサニオと同じ様な事を言ひ度いと思つて書記の風をしてボオシヤの側に物を書いてゐたネリツサに聞ける様に言つた

「私にも妻があつて、非常に愛してゐるんですが、いつそ死んでしまつて天にゐて呉れたら、傳言にでも神様に直訴して、此狼のやうな猶太人の心を入替させて貰つたであらうに！」

ネリツサは言つた

「さういふ事は、細君に聞けない處か、空家ででも言はないと、家庭に風波が起りますよ。」

シヤイロツクはもう耐へ切れずに言つた

「時間が費ゐる計りです、さうか御宣告を願ひます。」

法廷にゐた凡ての人々は怖ろしい豫期の内にあつて、皆の心はアントニオへの同情で満ちてゐた。ボオシヤは猶太人に肉を計る秤器を持つてゐるかと思つた。

「シヤイロツク、其方自辯で外科醫を呼寄せて置け。傷口をとめぬぎ、出血の爲めに死んでしまふかも知れない。」

アントニオを殺し度い一心のシヤイロツクは答へた。

「そんな事が證書に書いて御座いますか。」

「證書には書いてないが、その位の情は、かけるのが當然ぢや。」  
然しシヤイロツクは只

「見附かりませぬ。證書に見えませぬ。」

と言つた丈であつた。

「では、このアントニオの肉一ポンドは其方の物である。法廷はそれを認め、法律が之を其方に與へる。」

「お、博學高明な裁判官、ダニエル様の再來だ。」

シヤイロツクは再び叫んだ。そして又長い刃物を研ぎ、鋭くアントニオを見ながら言つた。



「さあ覺悟しろ。」

其時ボオシャは叫んだ。

「しばし待て、猶太人。まだ申す事がある。此證書には、血は唯の一滴たりとも其方に與へると書いてない。明瞭に「肉一ポンド」のみ記してある。然る上は證書面通り肉一ポンドを取れ、併しながら若し之を切り取るに當つて、基督信者の鮮血を唯の一滴でも流すに於ては、其方の地所も家財も、ベニスの國法に依つて、悉く之をベニスの國庫に没收したすぞ。」

シャイロツクは、アントニオの血を少しも流さずに、一ポンドの肉を切取る事は全く不可能であつた。

證書に書いてあるのは肉一ポンドだけで血ではないと言ふ、このボオシャの賢い發見はアントニオの生命を救つた。そして滿廷の人々はこの青年辯護士の驚くべき頓智に感心し、賞讃の聲は元老院の隅々に鳴り響いた。其時グレシアノはシャイロツクの口調をまねて叫んだ。

「お、博學高明な裁判官様。さうだい猶太人。ダニエル様の再來だらう。」

シャイロツクは自分の慘酷な計畫が破られたのを知つて、悲しげな顔をしてそれぢや金を受取らうと言つた。バツサニオはアントニオが思ひ掛けなくも救はれたので無上に喜んで叫んだ。

「さあ金はこゝにある。」

併しボオシャは靜かに遮つた。

「待て、急ぐには及ばぬ。猶太人は科料以外のもの……をも受取る可きではない。だから、肉を切取る準備をせい、血は一滴も流してはならぬ。また肉は丁度一ポンドより以外、多くも少くも切取るに於ては、よしそれが、僅かに一分又は一厘ほぎの切れ端であるとも、いや唯髪の毛一筋だけの重目の差を秤皿の上に生ずるに於てはベニスの法律によつて、其方の命は無いぞ、そして其方の財産は悉く元老院に没收したすぞ。」

「元金丈を受取つて歸らせて貰ひたい。」

とシャイロツクは哀願しバツサニオは言つた。

「とうから渡さうとしてゐたのぢや、こゝにある。」

シャイロツクは金を取らうとした。その時ボオシャは又遮つて言つた。

「待て、猶太人其方には未だ用がある。ベニスの法律に依れば、外國人が當ベニス市民を殺さうとした場合には、その財産は國家に没收される規定である。而して其方の一命は、偏へに公爵の御仁慈にある。速かに土下座して公爵のお慈悲をお願ひ申せ。」



公爵はシャイロツクに

「吾々基督教信者の精神が其方など、異つてをること知らせるために、おまへの願を聴くまでもなく、其方の一命は助けてやる。然し財産の半分はアントニオに取らせ、他の半分は國家に收めるぞ。」

と言ひ渡した。然るに寛大なアントニオは、若し、シャイロツクが死後その財産を、娘とその夫とに與へる言ふ證書に署名したならば、自分の受取る可きシャイロツクの財産はシャイロツクに與へようと言つた。夫れはシャイロツクの一人娘が、アントニオの友達であるロレンゾと言ふ若い基督教信者で、父の許を得ずに結婚したので、猶太人は非常に怒つて娘を勘當してしまつたのをアントニオが知つてゐたからである。

猶太人はこれを承知した。そして、自分の復讐は斯く不首尾に終り、富は奪はれてしまつたので失望して「どうかお暇を下さいます。病氣で御座います。證書は後からお送り下さい、宅で署名いたします」言つた。公爵は「歸つてよろしい、が命令通りに致せ。若し其方が自分の慘酷を後悔し、基督教信者となるならば、國家へ没収する筈の他の半分の財産を許してやつてもいい。」と言ひ聞かした。

さるほごに公爵はアントニオを放免し法廷を閉ぢ、青年辯護士の賢明と機智に非常に感心して、食事に招いた。ボオシヤは夫より先にベルモントへ歸らねばならぬを考へてゐたので「ありますが、御座いますが、私はすぐに出發を致さねばなりませんから」と斷つた。公爵はボオシヤが止まつて一緒に食事をする暇のない事を非常に残念がり、そしてアントニオに向つて言つた「アントニオ。よく此の方に御禮を言ふがよい。お前は全く此の方のお蔭で助かつたのぢや。」

公爵や元老院議員達は法廷を去つた。そこでバツサニオはボオシヤに言つた「謹んで閣下にお禮を申し上げます、わたくし並びにわたくしの親友は、今日、閣下の賢明な御裁判によつて、一命にかかはりまする罰をまぬがれました。つきましては、猶太人に遣はしまする筈の此三千兩を喜んで閣下に贈呈いたしました。聊か御厚意に報ひ度い存じます。」アントニオも言つた「尙此後幾久しく、今日の御恩を記憶して、敬愛の誠意を表したいと存じております。」

ボオシヤは何うしても金を受けないと言ひ張つたが、バツサニオはあく迄も何か自分の感謝の印を受けて呉れ願つたので、ボオシヤは「あなたの手袋をいただきたい、記念として身に付けませう」と言つた。バツサニオが手袋をぬいだ時、ボオシヤは自分が與へた指輪が指にはまつてゐるのを見附けた。實は彼の手袋を呉れよと言つたのは指輪を貰つて置いて、今度バツサニオに會つた時



戯談に困らしてやらうと思つてゐたからである。そこで指輪を見るに直ぐ言つた「それからあなたの御好意に對して、その指輪をいたゞきませう。」バツサニオは彼が離せない唯一つの品を辯護士に望まれたので非常に困つた。そして當惑しながら、此の指輪は自分の妻が呉れたもので、決して離さない約束したものだから、さうしても差上げられません、その代りにベニス中で最高の指輪を、廣告で探し出して獻じませうと言つた。此の時ボオシヤは侮辱された様な風をして次の言葉を殘して法廷を去つた「貴女は乞食が、何ういふ取り扱ひを受けるかを、私にお教へになつたのです」

「バツサニオ君、指輪をあなたの方に差上げて下さい。奥さんの不快を招くだらうがどうかあの人のご功勞とわたしの友情を以てそれに代へて下さい。」とアントニオからも頼まれ、バツサニオは自分が忘恩者と思はれるのを恥ぢて、終に同意しグレシアノにボオシヤを追つて行かせて指輪を渡させた。同様にグレシアノに指輪を與へてゐた書記のネリツサも夫に指輪を望んだ、グレシアノも（主人と同様に、寛大であると思はれたため）それを與へた。その時婦人達は、家に歸つてから、夫が指輪をなくしたのを責め、きつゝ他の女にやつたのだらうと言つて、困らせる時の事なごを想像して笑ひ合つた。

ボオシヤは、家に歸つてから、善行をしたと自覺する時に必ず起る幸福な氣持に満されてゐた。

従つて見る物悉く愉快でないものはなかつた。月さへも今までよりすつゝ明るい様に思はれ、その月が雲間にかくれて、ベルモントの自宅から射してくる燈火を見ても亦楽しい想像に耽つてネリツサに言つた「あの燈火は客間から射してゐるのだが、あんな小さい燈火でさへこんな遠く迄届くんだよ。ちやうどこんな風に、善い行爲が悪い世を照らすのだね。」又家から聞えて来る音楽を聴きながら言つた「晝間聞くよりも何となく趣味が深いやうに思ふ。」

ボオシヤもネリツサも家に入つて、元の様に女の服を着け、夫の歸りを待つてゐた。夫もすぐアントニオをつれて歸つて來た。バツサニオはアントニオをボオシヤに紹介しまだ挨拶や歓迎の言葉が終らない内に、室の隅ではもうネリツサが夫と口論を始めて居た。

ボオシヤは「おやもう口論なの、さうしたのです。」と尋ねるにグレシアノは「奥様、ネリツサが私に呉れたつまらない、金鍍金の指輪に刃物屋の小刀に彫りつけてある様な『見棄てちや厭よ』なんて文句が彫つてあつた指輪の事です。」と答へた。

「文句や値段の事を言ふ必要はありません。貴下は、わたしが彼品をあけました時、死ぬ時までも身に附けてゐるに誓言なすつたぢやありませんか。それに今は辯護士の書記にやつたつて。私は知つてますよ、女にやつたにきまつてますよ。」



「この手に誓つて言ふ。全く若い男にやつたんだよ。小僧つ子で小さい、丈の低い少年なんだ。お前より高くはない位の、奇才縦横の辯護士で、アントニオ様の命を救つた青年辯護士の書記で、よく饒舌る奴で、報酬に是非彼品をくれと言つたんだ。わしは何うしても否言へなかつたんだ。」

「グレシアノ、それは貴下の方が悪い。ネリツサから初めてあげたものを、さう軽々しくお棄てなさるのは。わたしも夫へ指輪を一つ上げました。夫は、よし世界中の財寶を交換へても、決してあの品を手離す様な事はありません。」

「ミボオシヤが言ふに、此時グレシアノは自分の罪の言ひ譯をする爲に言つた。」

「バツサニオさまも、御自分の指輪を辯護士にお遣りなすつたんです。そこでその書記の小僧が、奴は書記をして書きものをしたのですから、わたしのを呉れと言つたのです。」

ボオシヤはこれを聞いて非常に怒つた風に見せて、指輪を與へた事を責めた。そしてネリツサの言つた事が本當で、自分も或る女がその指輪を持つてゐたのを知つてをる言つた。バツサニオは愛する妻がそんなに夫に反對するのを非常に悲しんで、非常な熱心を以て言つた「いや、私の名譽にかけて、婦人なんぞにやつたのではなく、法學博士に遣つたんです。三千兩を贈らうと言つたところが、何うしても受けないであの指輪をくれよと言つたのです。それを一旦は拒絶しました。すると不快な顔をして出て行つたのです。何うして其儘にして置けませう。ボオシヤさんそこで止む

を得ず、指輪を以てその跡を追つかけさせたのです。義理を思ひ、恥を思ふに、思知らずいふ汚名を受けるに忍びなかつたのです。恕して下さい。若しあなたがあの場におられたなら、あなた自ら、大恩ある博士へあの指輪を遣つてくれ、きつこおつしやつたに相違ありません。」

「斯う言ふ不幸な事になりましたのも、皆私が原因なのでございます。」とアントニオが言つた。

ボオシヤは、アントニオに、そんな事無關係にあなたを歓迎してゐるのですから決して心配して下さるなと言ふに、アントニオは「私はこの身體を一旦バツサニオ君の爲めに抵當に入れたのです。若しあなたの夫君が指輪をあげたあの人の御蔭がなかつたなら、もう夙に私は死んでゐるので。それゆへ、今度は、此の魂を抵當にいたしましたして、決してバツサニオ君が、二度ご約束を破らないといふ保證人になりますから、さうか枉けて御許しを願ひます。」と言ふとボオシヤは

「ではあなたを保證人にいたします。此の指輪を夫に渡して、前よりも大事にする様におつしやつして下さい。」と言つた

バツサニオはその指輪を見た時、自分が遣つたのと同じであるのを見て非常に驚いた。そこでボオシヤは自分が若い辯護士となり、ネリツサを書記にしてゐた事を話した。バツサニオは、表現する事の出来ぬ驚き喜びを以て、アントニオの命を救つたのは自分の妻の氣高い智慧と勇氣とで



あつた事を知つた。

そしてポオシヤは再びアントニオに歓迎の言葉を述べ、或機會で自分の手に入つたアントニオへの手紙を與へた。その中には、難船したと思つてゐたアントニオの船が、皆安全に港に着いた事が書いてあつた。續いて起つた思ひ掛けない幸運の爲に、この豪商の以前の怖ろしい話をすっかり忘れてしまつて、暢々とした氣持になり、指輪の惡戯や夫が妻を見分け得なかつたことなどを語り合つて大笑ひをした。グレシアノは喜んで朗讀する様な調子で誓の言葉を言つた。

一生苦勞しては何にもないが

ネリツサの指輪だけはなくしちならぬ。

### シムベリン

オウガスタス、シイザアが羅馬の皇帝であつた時代に、英國には(その時代ブリテン國と呼んでゐた)シムベリンと言ふ王がゐた。

シムベリンの最初の妃は、三人の子供(王子が二人と王女が一人)が未だ極く小さな時に死んでしまつた。そしてイモヂンと言ふ一番年上の娘のみ父の宮廷で育つたが、他の二人の王子は何うし

た廻り合せであつたか、子守の手から悪者に盗まれてしまつた。其時上の子は三つばかりで、下の子はほんの赤ん坊であつた。シムベリンは二人の王子が何うなつたものか、又誰が連れ去つたものを何うしても知る事が出来なかつた。

シムベリンは再婚をした。その二度目の妃は、心の曲つた奸惡な婦人であつて、シムベリンの先妃の娘イモヂンにとつては、まことに殘酷な繼母であつた。

妃はイモヂンを憎んでゐるたけれぎ、自分と前の夫との間に出来た(この妃もやはり再婚であつた)息子と結婚させ度いと思つてゐた。さうして置けばシムベリンが死んだ後、ブリテン國の王冠は自分の實子クローテンの頭上に落ちるだらうと思つてゐたからである。若し王子達が見附からなければイモヂン嬢が王の嗣となる事は明かであつたから。然し此の計畫はイモヂン嬢に妨げられた。王女は父王や妃の許しも得ない計りでなく知らないまに結婚してしまつたのである。

イモヂンの夫ポストユーマスは當時の最も偉い學者であり最も優れた紳士であつた。ポストユーマスの父はシムベリンの爲に敵と戦つて戦死した。その母も亦夫の死を悲しんだ餘り、まだ生れてから間も無い時に死んでしまつた。

シムベリンは此の孤兒の寄る邊なき身の上を哀れみ、ポストユーマスを(父親が死んでから生れ



た子供だったのでその名もシムベリンが附けてやつた。つれ歸り自分の宮廷で教育した。

イモヂンとポストユーマスとは同じ先生から學問を教はり子供の時からの遊び友達であつた。二人はその時分から既に深く愛し合つてゐたが、年々共に二人の愛情は増して、遂に年頃になつてから私かに結婚したのである。

妃はすぐ此の秘密を知つて失望した。妃は絶えず繼娘の行動を探らせてゐたので直ぐに王にこのイモヂンとポストユーマスとの結婚を話した。

シムベリンは自分の娘が、貴い身分をも忘れて臣下なご結婚した事を聞いて、非常に怒り出し、ポストユーマスにブリテン國を立ち去れと命じ、永久に國土より追放してしまつた。

妃は、イモヂンが夫と別れる悲しさに同情してゐる様に見せかけて、ポストユーマスが追放を受けて後の住居と定めた羅馬へ旅立つ前に、私かに會はせて上げやうとイモヂンに言つた。此の表面上は誠らしい親切も、實は自分の子のクローテンに關する陰謀をうまく進めようと思つてやつた事に外ならなかつた。ポストユーマスが追放された後で、二人の結婚は王の許しなしにやつたのだから、正當でないと説き伏せようと思つてゐたからである。

イモヂンとポストユーマスとはいとも哀れな別れを告げた。イモヂンは夫に今は亡き母からもらったダイヤモンドの指輪を與へ、ポストユーマスはその指輪を何んな事があつても離さないと約束した。そしてポストユーマスは妻の腕に腕輪をはめ自分の愛の證として大切に持つてゐる様に頼み、二人は互に、永久に變らぬ愛と貞節を誓つて別れを告げた。

イモヂンは父の宮殿に孤獨な失望の婦人として残され、ポストユーマスは追放後の住居を定めてゐた羅馬へ着いた。

ポストユーマスは羅馬に着いてから、女の事を話するのが好きな、陽氣な若い外國人達と知り合ひになつた。誰も彼も自國の婦人の事や、自分の戀人達を賞めてゐた。ポストユーマスも常に自分の妻の事ばかりを心に思つてゐたので、自分の美しい妻、イモヂン程徳の高い賢明な、心の變らない婦人は世界中に又とないと斷言した。

青年の中の一人、イアキモは自國の羅馬婦人以上に、ブリテン國の婦人を譽めるのに反對して、ポストユーマスがそんなにまで譽める妻の貞節も疑はしいものだと言つて、ポストユーマスを怒らせ、散々口論をした末、ポストユーマスはイアキモがブリテンへ行つて自分の妻、イモヂンの愛を勝ち得るか得ないかを試して見ようと言ふ申出を許した。二人はそこで賭をして、若し、イアキモがそのよこしまな計畫に成功しなかつたならば、巨額の金を差出すが、若しイモヂンの愛を勝ち得



て、ポストユーマスが自分の愛の證としてあんなに大切に保存して置いて呉れと願つて與へた腕環を貰つて來る事が出來たならば、その賭の代償として、イモヂンが彼と別れる時、愛の證としてポストユーマスに贈つた指輪を、イアキモにやらうと約束した。ポストユーマスは、イモヂンの貞節を斯んな事をして試しても王女の尊嚴には何の危険もないと思つた程、確かなものであると信じてゐた。

ブリテンに着いた後、イアキモは宮廷に招ぜられ、夫の友達として、イモヂンから町重な歓迎を受けたが、イアキモが戀を語り始めると、王女は輕蔑して退けてしまつた。そこで、イアキモは直ぐこの無禮な計畫の成功は覺束ないと悟つた。イアキモは賭に勝ちたいといふ願から、策略を以て、ポストユーマスを騙してやらうと考へた。これがために、イモヂンの召使の幾人かを買収して、イモヂンの寢室に入り、大きなトランクの中に、イモヂンが熟睡するまで隠れ、その熟睡を待つてトランクから這ひ出し、部屋中を探し廻り、見當り次第、一々部屋の模様を書き留め、特にイモヂンの首にある黒子を書き記し、それからポストユーマスが與へた腕環を靜かに腕からはずして、再びトランクの中に隠れた。そして翌日は揚々として羅馬へ旅立ち、ポストユーマスに、イモヂンが腕輪を呉れた事や、一夜その寢室で過した事などを誇り、イアキモは次のように偽を言つた。

「寢室には絹と銀系織の壁掛カステットがあつた。模様は勝ち誇つたクレオパトラがアントニーに會つてゐる圖であつて非常に立派な品である。」

「實際だ。然し君は見ないで聞いただけかも知れない。」

「それから煙突は部屋の南部にあつて、暖爐の前飾には「ダイアナ水浴」の圖があつた。あんなに生き生きとした作品は見た事がない。」

「これも亦君の聞いた話だらう、よく噂に上つてゐるから。」

イアキモは更に天井の具合を精しく話してお、殆んど忘れてしまふところだつた。 アンガイヤン 爐の様子を、爐は銀製の二人の「日くばせしてゐる戀奴キユービウ」で共に片足で立つてゐる、それから腕環を取出して言つた。

「何うです。この寶物を御存じでせう。奥さんが呉れたのです。自分の腕から外してね。今でもあの人が見えるやうだ。あの人の美はしい振舞はこの贈物以上です、併しこの寶もあの人が持つてゐたればこそ價值があるのです。あの人はこれを私に呉れと言ひました。一度はこれを非常に珍重してゐた事もあつたとね。」それから最後にイアキモは、イモヂンの首にある黒子の話をした。

疑ひの苦悶をもつて、この惡賢い話をすつかり聞いてゐたポストユーマスは憤慨して、イモヂン



の不實を叫びながら、イアキモがイモヂンから腕環を貰つて歸つて来るならば、賭物として與へるご約束した、ダイヤモンドの指輪をイアキモに呉れてやつた。

ポストユーマスは、嫉妬の焰を燃しながら、イモヂンの侍臣の一人であり、永い間ポストユーマスの親友であつた。ピサニオと言ふ英國の紳士に手紙を書いた。そして妻の不義の證據を語つた後、ピサニオにイモヂンをウエールスの海港ミルフォード、ヘブンにつれ出し、殺してしまつて呉れよと依頼して置き、一方イモヂンには自分は今も一日も會はないでは生きてゐられないから死の苦痛をも忍んでブリテンに歸り、ミルフォード、ヘブンに行くから、ピサニオと一緒に會ひに来て呉れよと詐りの手紙を書き送つた。イモヂンは人の良い少しも疑心のない婦人であつたの。ご夫を何よりも一番愛してゐたから、命を賭けても夫に會いたいと思ひ、ピサニオと一緒に、手紙を受取つたその晩すぐに出發した。

二人の旅行がもう終らうとした時分に、ピサニオは、ポストユーマスに對しては忠實であつたけれど、その無道な命に服する程忠實ではなかつたので、イモヂンに自分が受けた残酷な命令をすつかり打明けてしまつた。

自分の愛し愛されてゐる夫に會ふのではなくて、却つて夫の爲に殺されなければならぬ様な運命

にある事を知つたイモヂンは、計り知る事が出来ぬ悲に沈んだ。

ピサニオは極力イモヂンを慰め、ポストユーマスが自分の不正を知つて後悔する時の来る迄、辛抱強く忍耐する様に説いたが、王女はその悲歎の餘り、父の宮廷に歸る事を拒んだので、已むを得ずピサニオは王女に旅中の安全を計つて男装をする事を勧め、王女も之に賛成し、その變装のまま羅馬に渡り、自分に對してはあんなに情れなくしてをるけれど、何うしても忘れる事の出来ない夫に會はうと決心した。

ピサニオは王女の變装をすませると、さうしても宮廷に歸らねばならなかつたので、王女を不確な運命の手に委せて其所から立ち別れた。そして出立の前に妃からもらつた、何んな病氣でも立ち所に直るさういふ藥の瓶を王女に與へた。

イモヂンやポストユーマスの友達だと言ふのでピサニオを憎んでゐた妃は、毒が入つてゐるのだと思つて實は此の瓶をピサニオに與へたのであつた。妃は侍醫に命じて獸に呑ませるのだと言つて毒藥をもつて來したのであつた。然し侍醫は妃の心の曲つた性質を知つてゐたので之を信せず、毒藥の代りに唯數時間の間全く死んだ様に眠らせるだけで外に何の害にもならない藥を與へたのである。此の藥をピサニオは上等の藥だと思つて、若しイモヂンが途中で氣分の悪い様な事があれば



お呑みなさいと、與へたのであつた。斯うしてピサニオは王女の安全と、一日も早く身に餘る困難から脱して幸福になられん事を祈つて別れを告げた。

天の加護の下にイモヂンは不思議にも子供の時分に盗み去られた二人の弟の住居の方へ足を運ばせた。弟等を盗んだのはベラリウスと言ふシムベリンの宮廷の貴族であつた。その貴族は罪もないのに王から叛逆罪に問はれて宮廷より追放を受けたので、その復讐の爲シムベリンの二人の王子を盗み出し、自分の住んでゐる森の中の岩窟で育てた。貴族は復讐の爲に盗み出したのではあつたけれど共、間もなく二人を自分の本當の子供であるかの様に熱愛し、念入りに教育したので二人は立派な青年になつた。王者らしい二人の精神は勇敢な行動を喜んだ。王子達は獵をして生計を立て、るので爲す事はすべて活潑であり大膽であり、常に自分達の親だと思つてゐるベラリウスに向つては運命を拓く爲に戦争へ出して呉れとねだつてゐた。

此の青年達の住んでゐた岩窟へイモヂンがやつて来る様な事になつた。イモヂンはミルフオード、ヘブン（そこから羅馬まで船に乗らうと思つてゐた）へ行く途中この大きな森の中で路を失つた。その上何處にも食物を求むる所が見附からなかつたので、飢と疲れとで殆ど死にそうであつた。優美に育つた若い婦人が、男の風をしてゐたので、淋しい森の中を男の様に彷徨ひ廻る疲れに堪へら

れなかつた事は言ふ迄もない。恰もよし此の岩窟を見つけたので、イモヂンはその中には誰か食物を呉れる人がゐるだらうと思ひながら這入つて行つた。中には誰も居なかつたがあたりを見廻すに冷肉があつたので飢の苦しみの餘り、馳走を受けるのも待たずに、座つて食べ始め、獨語を言つた。

「あ、男の生活と言ふものは何さいふ退屈なものなんだらう。二晩續けて地べたを褥に寝たものだから、すっかり疲れてしまつた。しかし之も私の決心のお蔭だつた。さもなけりや病氣になつたに違ひない。ピサニオが山の頂上からミルフオード、ヘブンを指して呉れた時には、つい近くの様に見えるたのに。」それから又夫の事やその残酷な命令の事なごを想ひ出しては「私のいさしいボストユーマス、お前は何故嘘をつくののです。」と言つた。

父のベラリウスは獵に出てゐたイモヂンの二人の弟達は、此の時家へ歸つて來た。ベラリウスは二人にボリドアマカドウォルと言ふ名をつけてゐたので、二人共ベラリウスが眞の父でないと言ふ事などは一向知らなかつた。

ベラリウスが最初に窟にはゐるつてイモヂンを見たので二人を止めて言つた。「未だ這入つちやいけない。誰か私達の食物を食べてをるものがある。ひよつこするに妖精かも知れない。」

「何うしたんです、お父さん」と若者達が言ふに、「南無三寶。天使が窟に來てゐるのだ。でなけ



りや世にも類のない美しい人間だ。」男の服を着てゐたイモヂンはそんなに美しく見えたのである。

王女は人聲を聞いたので窟から出て来て人々に言ひかけた。「旦那様方。何うぞ私を打たないで下さい。あなた方の窟へ這入ります前は、今食べましたものを貰ふなり買ふなりしようと思つてゐたのです。本當に何も盗みはしませんし、又金貨が床に轉つてゐましたけれども、盗まうとも思ひませんでした。是は食物の代價です。私は食べてしまつたらこれを置いて、食物を與へ下さつたあなた方の爲に祈りを捧げて出て行かうと思つたのです。」

みんなに言つても皆は金を受取らなかつた。で憶病なイモヂンは言つた。「私に對して怒つてゐらつしやるのですね、然し皆様、私を殺されるにしましても私があれば食べなかつたら死んでゐたと言ふ事だけは覺えて置いて下さい。」

「お前さんは何處へ行くんです。そして名は何いふんです。」ミベラリウスが尋ねた。

「私はフィデイルと申します。伊太利へ行く親類の者が御座いまして、ミルフォード、ヘブンから船出致しますので私はそこへ行く途中で御座いますが、飢のために死にさうになりましたので、この不都合を致しました次第で御座います。」

「どうか若衆、私達を吝嗇漢だと思つては下さるな。又私達が住んでゐる家から判断して心の良くない者だなどと思つては下さるな。ようこそ此處へいらつしやいました。もうすぐ日も暮れますから出發前に御馳走を致しませう。それを食べてからお立ちなさい。おい子供達、お待遇をしなさい。」

優しい兄弟達は色々親切に話しながらイモヂンを窟の中へと招じた。兄弟の様に貴女を愛します。(實は貴君と言つた。)と言ひながら、皆で窟の中へ這入つた。イモヂンは弟達が持つて歸つた狩の獲物を、主婦らしい器用さで、夕飯の用意の手助をして皆を喜ばせた。今では身分の高い婦人が料理を稽古する様な習慣はないが、當時は皆稽古したものであつて、イモヂンは特に料理が上手であつた。フィデイルは弟達が褒めて言つた様にジュノー神が病氣になつたので、フィデイルがその料理番になつたかと思はれる程、上手に野菜を色々な形に刻んだり、肉汁ナグの味をつけたりした。「その上全く天使の様に歌ふよ」ミボリドアが弟に言つた。

弟達は又、フィデイルが非常に嬉しさに笑つてゐるけれども、悲しみと忍耐とが心を占領してゐるかの様に、悲しそうな憂鬱さがフィデイルの美しい顔を曇らせてゐると話し合つた。

イモヂンの優しい性質のために(或は多分血が續いてゐた爲かも知れない。勿論二人はイモヂン



だと知らなかつたけれど) 弟達は王女を(フィデイルと呼んでゐた) 非常に慕つたし、イモヂンもそれに劣らず弟達を愛した。若しいとしいポストユーマスの記憶さへなければ、一生この林中の青年達と一緒にこの窟の中で生死してもよいと思つた程であつた。兎に角旅の疲れが治つて、ミルフオード、ヘブンへ行けるやうになるまで止めて貰ふ事に同意した。

獲つて来た肉類を食べ盡して、皆が再び獵に出ようとしてゐた時、フィデイルは未だすつかり良くなつてゐなかつたので一緒に行く事が出来なかつた。明かに夫の慘酷な仕打ちに對する悲しみも、旅の疲れもがその病氣の原因であつた。

青年達はイモヂンに別れを告げて獵に出掛けた。その途々若いフィデイルの氣高い性質や優やかな振舞を譽めた。

イモヂンは獨りになるとピキニオから貰つた薬の事を想ひ出して、それを呑み、直ぐに死の様な深い眠りに落ちてしまつた。

ペラリウスも弟達が獵から歸つて来た時、ボリドアが最先に窟の中へ這入つたが王女が眠つてゐるのだと思ひ、音を立て、眼を覺まさせては悪いと思つて、はいてゐた重い靴を脱いだ。こんなに眞の優しさが王子らしい森人達の心に湧いてゐたのであつた。然し間もなくぎん音を立て、も王

女が眼を覺さない事に氣が附いたのできつと死んだのだらうと思ひ込んでしまひ、ボリドアは子供の時分から一緒に育つた兄弟の様な悲しみを以てイモヂンの死を悼んだ。

ペラリウスも亦、森の中へその屍を運んで行き、歌や嚴そかなお経等で當時の習慣通り葬式をしようと言ひ出した。

イモヂンの弟達は姉を小暗い森蔭に運んで行き、草の上に靜かに屍を寝かせ、死んだ王女の魂の爲に歌を歌つた。そして屍を美しい花や草の葉を以て埋めてボリドアは言つた。

「フィデイルよ、夏毎にそして、私の生きてゐる限り、私は毎日あなたの墓を訪ねやう。あなたの顔の色の様に青ざめた櫻草や、あなたの靜脈の様な色の桔梗や、あなたの息よりもやはらかな薔薇の葉等を、あなたの上に振り散らしてあげよう。又花のない冬には毛皮の様な苔であなたの屍を覆うてあげやう。」

皆は葬式をすませると非常に悲しげにそこを去つた。

イモヂンはそこに長くは眠つて居なかつた。間もなく薬の効果が消れて目が覺めた。そしてたやすく弟達がかけて置いた花や葉の軽い蓋ひを振ひおとして立上り、夢を見てゐたのではなかつたかミ訝りながら言つた。



「私は囁の番をして、親切な人達に料理をしてあげたりなきしてゐた筈なのに、何うして此んな所へ来たのだらう。花に埋つたりして。」

元の窟へ歸る途を見附ける事が出来ず、新しい友人達も皆見ねなかつたので、きつこあれは皆夢だつたと思ひ込んだ。そしてイモヂンは何時かはミルフオード、ヘブンに着いて、伊太利へ行く船に乗込むことが出来るだらうと望みながら、再び物憂い旅路に上つた。

王女は今尙夫のポストエーマスの事ばかり考へてゐて小姓に變装して夫に會はうと思つてゐたのである。

然るに此時イモヂンが夢にも知らなかつた大事件が起つてゐた。羅馬の皇帝、オウガスタス、シーザミアブリテン國王シンベリンとの間に不意に戦争が始まり、羅馬の軍隊がブリテンに上陸侵入して、丁度イモヂンが旅行してゐた森に向つて進軍して來たのである。此軍隊の中にはポストエーマスも従軍してゐた。

ポストエーマスは羅馬の軍隊と一緒にブリテンへ來たのであつたが、羅馬人の味方をして本國人と戦ふつもりでなかつたのみか、寧ろ、ブリテンの軍隊に投じて自分を追放した王の爲に戦はうと思つてゐた。

ポストエーマスは未だイモヂンが自分に不實であつたものと信じてはゐたが、あれ程までに愛してゐた彼女の死が、しかも自分が命じて殺させたと言ふ事が（ピサニオは、命令通りにイモヂンを殺したと手紙で書き送つた）心を苦しめた。それで戦死するか、追放から歸つて來たと言ふ罪で、シムベリンの爲めに殺されるか、何れかその一の死を望みながらブリテンへ歸つて來たのである。

イモヂンはミルフオード、ヘブンに着く前に羅馬軍の手に捕はれたが、王女の氣品やものごしが皆の氣に入つたので將軍ルシアスの小姓にされた。

シムベリンの軍隊も敵と接戦するために進軍しつゝ、丁度此の森に來た時、ボリドアミカドウォルは王の軍隊に投じた。二人共自分の本當の父の爲に戦はうとしてゐるのだとは、夢にも思つてゐなかつたが、只勇敢な行爲を好んで従軍したに過ぎなかつた。父のペラリウスも亦戦争に参加した。彼はもう長い間シムベリンの王子を盗み出した罪を深く悔ひて居り、その青年時代に武士であつたのでその罪亡ほしに自分が害を加へた王の軍隊に喜んで参加したのである。

兩軍の間に激戦は始まつた。ポストエーマスミベリウス及びその子の二兄弟の人間も思はれない勇敢な働きが無かつたならば、ブリテン軍は破れ、王は殺されたに違ひなかつた。彼等は王を守り、王の命を救つた。そのため戦運は一變して遂にブリテン軍の大勝利となつた。



戦が終つて後、戦争中に死ぬ事が出来なかつたポストユーマスは、追放の命を破つて歸つて来た刑罰として、喜んで死刑を受けようと思つて、シムベリンの士官の一人の許へ自首して出た。

イモチンと彼女の仕へてゐた將軍は捕虜になつて、シムベリンの前へつれ出された。其處には王女の仇敵で、羅馬の士官になつてゐたイアキモも同様に引き出されて居り、是等の捕虜が王の前になつた時ポストユーマスも死刑の宣告を受ける爲にやつて来た。然も又この不思議な廻り合はせの所へ、ベラリウスはボリアド及びガドウオルと一緒に、王の爲に盡した殊勳に對して適當な報賞を受けるためにシムベリンの前に来てゐた。王の侍従の一人であるピサニオが其の場に居た事は勿論のである。

だから今、王の前には（皆思ひくの希望や恐怖を抱きながら）ポストユーマス、イモチンこそ新主人、羅馬の將軍、忠實な家來ピサニオ、僞友イアキモ、シムベリンの二王子、それから二人の王子を盗み出したベラリウスが立つてゐたのである。

羅馬の將軍が一番先に口を開いた。その他の人達の中には胸の鼓動を打たせながら黙々として立つてゐた者もあつた。

イモチンはポストユーマスが百姓の風をしてはゐたけれども、すぐに見附けることが出来たが、

ポストユーマスは王女が男の服を着てゐたので見分ける事ができなかつた。王女は又イアキモを認め、その指に、自分のだつたと思ふ指輪をはめてゐるのを見たが、自分のこんな不幸の發頭人はこの男であると言ふ事は知らなかつた。そして自分はまことの父の前に捕虜になつて立つてゐた。ピサニオはイモチンを知つてゐた。イモチンに男の風をさせたのはピサニオ自身であつたからである。そして一人で考へた。

「お嬢様だ。然し生きて居られるのを見た以上は成り行く儘に委せて置かう」  
ベラリウスも王女を見覚えてゐた。で、こつそりミカドウオルに言つた。

「あの少年は生き返つたのぢやないか」

「瓜二つこいふ諺があるが、あのやさしい薔薇色の少年は、死んだフィデイル程、よく似て居るものは知りません。」

ミカドウオルが言ふ。

「死んだあの男が生き返つたのに違いありません。」ミボリアも言つた。

「靜かに、靜かに。若しあの少年だつたしたら、今迄に我々に話し掛けたに違ひない」ミベラリウスが言ふ。



「然し本當に死んだ所を見たんだがなあ。」とボリドアが囁き、「靜かに」とベラリウスが遮つた。ボストユーマスは黙つてすぐにも死刑の宣告を受ける事を待ち望んでゐて、決して王に自分が戰爭中に王の命を救つたのである事を打明けまいと思つてゐた。打明ければ王は心を動かされてボストユーマスを許す事は判つてゐたからである。

イモヂンを自分の小姓として保護してゐた羅馬の將軍ルシアスは、(前にも言つた様に)最先に口を切つた。この將軍は非常な勇氣と氣高い品位とを持つてゐたので王に向つて次の様に述べた。

「私は陛下が捕虜を赦さず、總てを殺してしまはれると言ふ事を聞きました。私は羅馬人だから、羅馬魂を以てその死に耐へませう。然し、一つ願ひしたい事があります」

と言つてイモヂンを王の前へ連れて來て

「此の少年はブリテン生れであります。この少年を赦してやつて下さい。これは私の小姓です。この様に親切で、義理堅く、何んな場合にも勤勉で、眞實で優しい小姓は又々ありますまい。羅馬人に仕へては居りましたが、ブリテン人には唯の一人にも害を加へませんでした。誰よりも先づこの子を救つてやつて下さい。」

シムベリンは熱心に王女イモヂスを見た。變裝してゐたので娘だとは氣が附かなかつたが、然し

自分の心の内に全能の大自然が囁いてゐる様な氣がして言つた。

「何處かで確にあの男を見たに違ひない。あれの顔には見覚えがある。何故だか、又何處で見たのだから判らないが。お前の命は赦してやらう。そしてお前の願ひがあればそれも應へてやらう。例へそれが予の貴重な捕虜の命を乞ふのであつても。」

「誠に有難う存じます、陛下。」とイモヂンは言つた。

此の場合一つの願ひを叶へるさういふ事は、その特典が與へられた人に、どんなものであつても一つの物を與へようとする約束した事に外ならなかつた。皆はこの小姓が何を願ふだらうと片唾を飲んでゐた。そして主人のルシアスは言つた。

「私は私の命を助けて呉れよは言はないが、お前はきつこそれを願ふだらうね。」

「いゝえ、いゝえ。私は外にさうしてもせなければならぬ事があるのです。主人、あなたの命を乞ふ譯には行きませぬ。」

此の少年が恩を忘れてしまつた様に見えたので羅馬の將軍は驚いた。

イモヂンはイアキモをじつと見つめて、イアキモが何故その指輪を指にはめて居るかさういふ譯を告白させて下さいと願つた。



シムベリンは此の願ひを承諾し、そのダイヤモンドの指輪を持つてゐる譯を白状せなければ拷問に附するぞと嚇した。

そこでイアキモは自分の悪事をすつかり告白した。前に話したやうに自分はポストユーマスに賭をした事や、そしてポストユーマスをうまうまと欺いた事などを残らず告白した。

ポストユーマスが自分の妻の無實である證據を聞いた時の心持は、言ひ現はす事が出来ない程であつた。ポストユーマスは直ちに前へ進み出てシムベリンに、自分がピサニオに命じて犯させた王女に對する慘酷な命令を告白した。そして狂はしげに叫びながら、「お、イモデン、我が女王、我が生命、我が妻！お、イモデン、イモデン、イモデン！」

イモデンは愛する夫が自分の生きて居る事も知らず苦悶しておるのを見かねて、自分の身分を明し、罪を歎きの重荷より解き放して、ポストユーマスを非常に喜ばせ、これまでに受けた慘酷な夫の仕打を許して昔の愛を夫に回復した。

シムベリンも失つた自分の娘が不思議にも見附かつたので、ポストユーマスに劣らず非常に喜び、前と同様に父として愛を以て勞はり、尙ほ夫のポストユーマスの生命を許したばかりでなく、自分の養子として認めると言ふ許を與へた。

ベラリウスは此の喜びと仲直りの喜びの時機を見はからつて自分の罪を懺悔した。ベラリウスはボリドアマカドウォールとを王に示し、これが王の失つたギデウリスミアルピラカスの二人の王子であるを語つた。

シムベリンはベラリウス老人を許した。王はそんな幸福な時に罰の事なきを考へる事が出来なかつたのである。娘が見附かり、又自分の爲にあんなに勇敢に戦つて呉れた青年が、自分の失つた王子であつたと言ふ事は誠に思ひ掛けない喜びに外ならなかつた。

イモデンはやつこの事で外の仕事が終つたので、前主人、羅馬の將軍ルシアスの爲に命乞ひをした。王は立ち處に將軍の生命を許し、將軍ルシアスの仲裁に依つて羅馬ミブリテンとの間に平和條約が結ばれて、平和は長い間保たれた。

然るに一方心の曲つたシムベリンの妃が、自分の密計が盡く破られたために絶望し、その上良心の呵責に耐へかねてゐた際、愚かな實子のクローデンが、自分から起した喧嘩で他人に殺されたと言ふ事を聞いたのが原因で、病氣になつて死んだと言ふ報知は、此の幸福に満ちた大團圓を妨げるには少し悲惨すぎる出来事であつた。ただ幸福を受ける資格のある人は凡て幸福を受け、友を欺いたイアキモでさへ、その悪事を遂行し得なかつたのだからと言ふお思召で、罰せられずに放還され



たと言ふ事はまことに目出度いことであつた。

リヤ王

ブリテン王、リヤには三人の娘があつた。アルバニー公爵の妻であるゴネリルとコオンウオール公爵の妻リガンと、うら若い處女のコオデリヤである。コオデリヤにはフランス王とバアガンデイー公爵との二人の戀の競争者があつて、彼等は共にリヤ王の宮廷に滞在してゐた。

老王は年が老つたのこ國事の心勞りで、今後國政には一切たづさはらず、王位は若い力のある者達に譲り、然も年は八十の坂を越してゐたので餘命もさう長くはあるまいと思はれる自分の死期を待つ事にした。そこで王は三人の娘を自分の所に呼んで、各々の口から誰が一番自分を愛してゐるかを聞いて、其の愛に相應する割合で自分の王國を三人に分けてやらうと決心した。

長女のゴネリルは、口で言ひ得るより以上に父を愛し、自分の眼の光よりも、生命よりも、自由よりも、父を愛するなごこ、本當の愛があつて言つて居るのではないと言ふ事がすぐ見ぬすく様な、大げさな言葉で、父に自分の愛を示した。その言葉には本當の心から出た美しくさが少しもなかつた。併し王は娘の口から此の様な愛の證を聞いて、ほんこうにその通りに思つてゐるのだらうと考

へ、子の可愛さに眼が眩んで、その娘と夫とに廣大な領地の三分の一を與へた。

王は次に次女を呼んで、どれ程自分を愛するかと尋ねた。リガンも姉と同じ様な偽りの心を持つてゐたので、姉に少しも負けない様に言つた。否、リガンの父に對する愛の表現は姉のそれも及ばない程うまいものであつて、自分はありこあらゆる歡樂を斥けても、父王を愛するのを幸福に思ふと言つた。

リヤは自分が望んでゐた通りこんな可愛い子供を持つた事を非常に幸福に思ひ、リガンが美しくい愛の証を述べ立てたので、前にゴネリルに與へたのと同じ程の大きさ、即ち王國の三分の一を彼女にその夫に與へずには居られなかつた。

さて王は自分の秘藏子である、三番目の娘コオデリヤに向つて、返事を求めた。王は勿論この娘が姉達と言つたと同じ様な可愛い、言葉で自分の耳を喜ばせて呉れるか、それとも常に姉達よりも、より可愛がつて居るのだし、姉達よりも常に親切を盡して呉れる娘の事だから、姉達よりもつこ強く父王への愛を表はすだらうと思つて居たのである。併しコオデリヤは心にも無い事を口に述べ立てた姉達の詔を悪んでゐたのこ、姉達が父の機嫌を取るのも唯父の領地を欺し取つて、自分の夫達と共に王の存命中にもその國を治めようと思つてやつてゐるに過ぎない事を知つてゐたので、斯



う答へるより外はなかつた。——私は義務相應に父を愛します。それより多くもなければ、又少なくもありません。

王は一番自分の寵愛して居る娘が、こんな恩知らずの様な答をしたのに驚いて、良く考へなほして言ひ方を繕はぬと幸福を得られないと注意した。

コオデリヤは自分を育て、可愛がつてもらつた父であるから、そのお禮には、子こして正當な義務だけは盡し命令に従ひ愛しもし又敬ひもするが、姉達が言つた様な大げさな事はさうしても言ふ事が出来ないし、又世界中何物にも勝つて愛すると云ふ様な事はさうしても約束する事が出来なかつた。若し姉達が言つた様に姉達が父の外に何者をも愛さないのならば何故夫と結婚したのだらう。結婚した上はその夫に對し自分の愛の半分は捧げなければならぬ。また、心からの心盡しと勤めをも半分は夫のために捧げねばならぬ。若し姉が父のみを愛するのならば結婚すべきでなかつた筈である。父に言つた。

姉達が言葉の上で父を愛してを つたのに引き換へ、コオデリヤは心から父を愛してを つたのであるから、もし外の時であつたならばもつと娘らしい可愛いこゝで少しも言葉を飾るこゝになしに、そして少しも不孝者だとも思はれずに父に自分の愛を納得させる事が出来たであらうが、姉達があの

様に巧みに機嫌を取る様な言葉を言つて、法外な報酬をもらつたあとで、心で愛して黙つてゐるのが最も立派なやり方だも考へた。だからコオデリヤの愛情は損得にかゝはらぬものである事が分り、又父を愛してゐるのは領地が欲しいからではない事を示した。しかもコオデリヤの言葉こそ一番見得を張つてはゐるなかつたが、二人のよりは本當であり眞實であつた。

此の様に明らかに言つたコオデリヤの言葉を、リヤ王は高慢だも言つて非常に怒つた。——此の老王は若い時分には短氣な性質で癪癪を起したり激怒したりしたが、老年の今は王の理性は年寄りに有り勝ちな溺愛の爲に曇らされてゐるので、詔と眞實との見別けが附かず、大げさに飾り立てた言葉と心からの親切との區別がつかかなかつた。——そして怒りのため物の見さかいかい附かず、コオデリヤにやらうと思つて残して置いた國土の残りの三分の一を取つて、それを平等に二分して姉達とその夫であるアルバニー公爵とコオンウォール公爵とに與へた。そして二人の公爵を呼び寄せ朝臣達の居并ぶ前で二人の連帶に自分の王冠を譲り、凡ての権力も、所得も、司配權も共同所有として二人に與へ、自分は唯王も言ふ名稱を保つ事を宣言し、其他の王の待遇は凡て放棄し、唯百人の侍臣達と共に、毎月交代に二人の娘の宮殿で養つてもらへば良いも言つた。

王が理性を失つて、激情のまゝに、自分の王國を不合理に處理した事に對して、朝臣達は非常に



愕き又悲しんだ。併し誰も激怒した王を諫めるだけの勇氣のあるものはなく、唯一人ケント伯爵のみがコオデリヤの爲に辯護しようとした。けれども激怒した王は直ちにその話を止めなければ殺してしまふまでに怒つたが、正しいケント伯爵は之をやめやうとしなかつた。伯爵は今まで常にリヤ王に對して忠義を盡し、王として尊敬し、父のやうに愛し、主人として命に服してゐたのみならず、伯爵は常に自分の生命を王の敵に賦けた質物の様にしか考へてゐず、王の安全の爲めならば自分の生命を捨てる事さへ少しも怖れてゐなかつた。王が今は自分を悪んでゐるけれども、本來の主義を忘れずに男らしくも王のためを思つてリヤ王に諫言をしたのである。之を無禮だと怒つたのはリヤ王の氣が其時轉倒してゐたからである。伯爵は今迄長い間最も忠實な王の顧問官であつたので今も尙（これ迄の重大事件に就てした様に）親しく意見を述べて王に諫言しようと思ひ、熟考した上王の末娘が姉達に劣らず父を愛してゐる事、又華やかな言葉で、言はないで、普通の言葉で言つたのは少しも偽りのない證であると言ふ自分の判断が間違つてをれば、自分の生命を投げ出してよいと言ふ斷乎たる決心をしたのであつた。凡て權力が詔に旨いられた時には臣下の諫言も露骨ならざるを得ない。伯爵の命は既に王に捧けてあるのであるから王の嚇しも何の役にも立たなかつた。伯爵は忠臣としての義務を感じてしたのであるからその位の事では引き込まなかつた。

ケント伯爵が王の爲を思つた諫言も唯王を益々怒らせたばかりであつた。そして精神病者が自分の致命的病氣を好んでその醫者を殺すやうに、王はこの忠實な臣下に追放を命じ、出發準備として五日間の餘裕しか與へなかつたのみか、若し六日目になるも、伯爵が未だブリテンの領内の何處かは居るならば、直ちに殺してしまふとまで嚴達した。ケント伯は王に別れを告げて言つた。無禮をも省みず斯く言つたからには、此處に残つて居たまで、追放の身と同じ事である。又出發する前にあの様に正しく考へ、分別ある言葉を言つた、コオデリヤ姫の上に神々の加護を祈り、姉達が大げさな言葉よりも行爲の上に愛を示さねたいと望み、新しい國へ行つて以前通りの主義を守らうと言つて出發した。

フランス王ミバアガンデイー公爵とは、王の前に招かれて、王から末娘に對する決心を聞き、今や父の怒りを蒙つて、身體一つの外に何の財産もなくなつた、コオデリヤを尙妻に欲しいと願ふか何うかを尋ねられた。バアガンデイー公爵は求婚を思ひ止つてそんな條件の下になら妻に貰ふまいと言つたが、フランス王は姫が父の愛を失つた原因が何んな性質の過失であつたかと言ふ事、姫の言葉が緩慢で姉達の様に詔を言ふ事が出来なかつた爲である事なきを知つてゐたので、喜んで姫の手をとり、姫の徳は一國よりも尙尊い持參金であると言つた。そして直ちにコオデリヤに向ひ、姉



達や残酷であつた父に對して別れを告げ、自分と共にフランスへ行き妃となり、美しい女王となつて、姉達のよりもすつと美しく領土を治めて呉れ願つた。そしてバアガンデー公爵の愛が此の時凡て水の様に流れ去つたので、水くさい公爵だを嘲弄した。

コオデリヤは涙を流して姉達に別れを告げ、好く父上を愛し好く國を治めて呉れる様に願ひ、姉たちは二人とも自分等の義務位は心得てゐるから、その指揮には及びませぬ、却つて幸運のお餘り程に思つてお前を拾つて呉れた（二人はそんな言葉で嘲笑した）良人の機嫌を損ねない様になさいと言つた。コオデリヤは姉達の善くない心も知つてゐたし、父上をこんな姉達の手に残して置くに忍びず、重い心を抱いて宮殿を去つた。

コオデリヤが立つか立たないかに姉達の悪心はその本性を現はした。リヤが長女ゴネリルのもとと一緒に暮した最初の一ヶ月が未だ終らない前に、王は既に約束と實行との間に非常に相違のある事に氣が附いた。此の心の曲つた姉は王から得られるだけのものは悉くとり、王から王冠をさへ奪ひ取つてゐたが、父が尙ほ自分は王であると思つて満足する爲に残して置いた王權をもとらうとして不平をこぼした。娘は父やその百人の侍臣共が居るのが嫌であり、父に會ふ度に澁面を作つた。父が娘に話し掛けようと思つた時にはいつも似せ病氣になつたり、父の傍から脱れる様な口實を作

つた。娘は今、父の老年を厄介物に思ひ、侍臣等を無用の費えだと思つてゐた事は明かであつた。娘は自分で王に對する義務を怠つたのみで、別に命令はせなかつたのであらうが、その臣下共までも娘に見ならつて王を疎略に取扱ひ王の命令に従はなかつたばかりか、輕蔑して王の言ふ事さへ聞かない様な振をした。王は、自分の過失や我儘から自分の身に降り掛つて來た不快な結果に對しては、誰もさう思ひたく無いと同じ様に、出来る限りは自分の娘の態度が變つた事をも、見て見ぬ振をしてゐた。

似非者や不實の者が、たとへばんな厚遇を受けてもその心を換へないと同じ様に本當の愛情や眞實のある者は如何に虐待されるもその志を變へるものでない。その好例はケント伯である。伯爵は王から追放を受け、期限の後一日たりとも英國に留まつてゐたならば、命を取られる事になつてゐるが、主君の爲に忠義を盡す機會の有る限りは、止まつて如何なる困難にも耐へよう決心し、時々手段を盡し賤しい姿に變へてまでも忠義を盡さねばならなかつた。然し乍ら之も責任ある自分が王の爲に何程かでも役に立てばと思つてした事であるから、絶対に恥づ可き無用の事ではなかつた。伯爵は凡ての威嚴と光榮とを捨て、王の爲に力とならんものと給仕の變装をして居たが、王は伯爵が變装してゐるとは知らず（王は既に娘達の油の様な滑かな諂の言葉が約束通りに行はれ



なかつたのを知つて、それに懲りてゐた所であつたので、伯爵の露骨な、或は寧ろ無禮にも言ふ可き應答振りを非常に喜びそこですぐに話が調つて、その男の言ふケーアスと言ふ名前のまゝで王の召使となる事になつたが、これが王の昔の寵臣であつて、氣高くも威嚴を備へたケント伯爵であるとは少しも氣附かなかつた。

ケーアスは召抱へられて間も無く王に對して愛と忠義を示すべき機會を得た。その女主人から内々に命ぜられてゐた事は確かであるが、其日ゴネリルの執事がリヤに對して無禮な言動をなした。ケーアスはその時王に對して斯様に無禮な言行をなすのを、見るに見かね矢庭に足を上げて無道な執事を小溝の中へ蹴り込んだ。この友情の厚い勇敢な行動を見たリヤ王は、ケーアスを益々深く信頼する様になつた。

もこより王に侍つてゐた周囲の忠臣は、ケントだけではなかつた。當時王侯貴族は道化者を抱へて置き、煩い事件の起つた後にはいつも人々を笑はせる爲めに使つてゐたので、リヤがまだ宮殿を持つてゐた時に抱へてゐた道化者が、出来る限り何氣ない風を装ひ、王に對して敬愛を示して居り、リヤ王が王位を興へてしまつた後も、頓智で王の氣持を愉快にさせて居た。さるにても時には王が自ら王冠を捨て、一切の所有物をさへ娘達にやつてしまつた事の無謀を嘲笑せずには居られなかつたので時々節面白く歌ひ出したものである。

其の時娘御は嬉し泣き

おれは悲しうて唄うとた

こんな王様が阿呆を相手に

かくれん坊をさつしやるかと思つて。

こんな風に澤山知つてゐた露骨な洒落や歌等を歌つてこの正直で愉快さうな道化者は、ゴネリルの面前をも憚らずに、手厳しい嘲弄や、急所を刺す皮肉等を言つた。例へば王を郭公の卵を嚮化する相雀に譬へ大きくなつてから育てた雛のために傷けられる様になる事を言つたり、何んな馬鹿だつて、車を引く時に馬が車の後からついて行つたら、不思議に思はないものはあるまいなと言つた。(それは父の後に従ふべきリヤの娘達が父の前に位してゐる事を諷したのである)その上、今のリヤ王は王ではなくて唯その陰影に過ぎない等と言つた。その無禮な嘲笑の爲めに、答で打つぞと嚇された事も一度や二度ではなかつた。

リヤ王が受け始めた冷酷や無禮な行爲は、この無情な娘がお人好の父に對してなした事は斯んな事だけでは濟まなかつた。娘は父に向つて、明らかに百人の侍臣を連れてをるこゝを主張されるな